

みとおしいせき

美通遺跡

(2021 年度調査地点)

一級河川朝日川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2023 年 3 月

山梨県観光文化部
山梨県国土整備部



美通遺跡 2021 年度調査地点（北西から）



美通遺跡 2021 年度調査地点（左が北）

卷頭図版2





環状集石（上が北）



環状集石（北から）

巻頭図版4



1号集石土坑（西から）



7号土坑覆土断面（南から）



環状集石断面（図 8G-G' 断面）



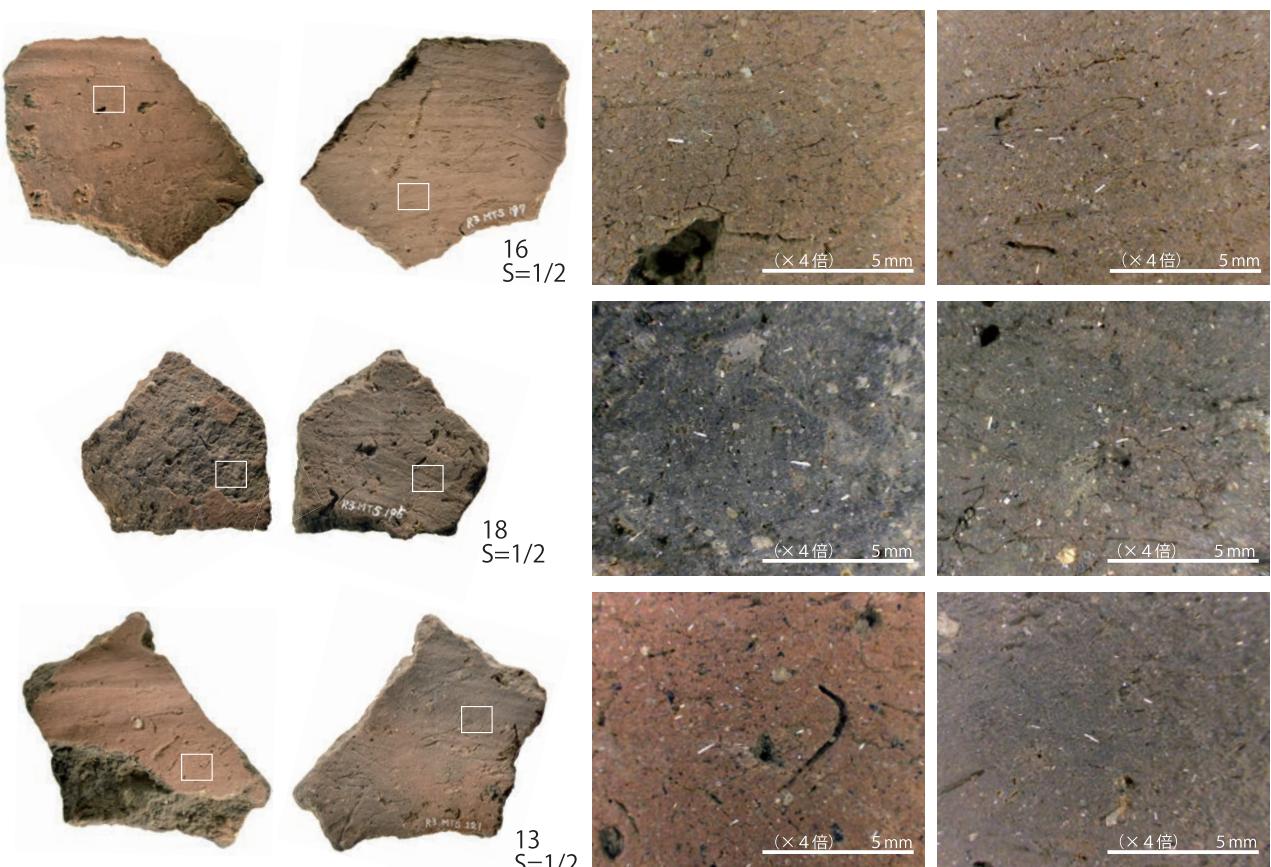
環状集石・28号土坑・29号土坑断面（図 14H-H'' 断面）



弥生土器出土状況（西から）



美通遺跡出土土器



下吉井式土器胎土に含まれる海綿骨針

土器片の枠内を右2列に拡大した。



調査報告書のあらまし

美通遺跡は、都留市内を流れる朝日川の左岸に立地する遺跡です。これまでの発掘調査によって、縄文時代から近世にかけての幅広い時代の遺跡であることが判明していました。

この発掘調査報告書は、2021年に美通遺跡で実施した埋蔵文化財記録保存のための調査の結果をまとめたものです。ここでは本書を利用する際の手引きとなるよう、調査と成果の概要を整理しておきます。

1 美通遺跡の周辺

中山湖と富士山北麓の湧水を水源とする桂川は、西桂町、都留市、大月市の急峻な山間部を北流して笛子川に合流します。美通遺跡はこの桂川に支流の菅野川と朝日川が合流する地点に立地しています。

河川沿いの狭小な平坦地を中心に遺跡が分布する地域ですが、甲府盆地、関東平野、富士吉田、相模原の各方面との交通の結節点にあたるという特性もあります。こうした地理的・歴史的環境については第2章で述べます。

2 発掘調査の進め方

(1) 調査に至るまで

この調査が実施されることとなったのは、遺跡に隣接する一級河川朝日川で河川改修工事が予定されているためです。事前に試掘調査を実施したところ埋蔵文化財が発見され、工事主体である山梨県富士・東部建設事務所と県文化振興・文化財課との協議により工事着手前に発掘調査を実施することとなりました。この調査結果の記録をもって遺跡の内容を後世に残す（記録保存）こととなります。これらの経緯や調査体制などについては第1章で述べます。

(2) 調査の方法

埋蔵文化財のある地層まで重機で掘削した後



人力で掘削する発掘調査の様子

人力で掘削しながら土器などの遺物や建物跡などの遺構を探索していきます。遺物や遺構を発見すると、それらを計測・図化、写真撮影、観察所見の作成などにより記録しました。

現地での調査終了後は、記録類の整理や基本的な分析、朝日川河川敷での石材調査などを進め、一連の成果をまとめた本書を作成しました。調査方法については、第3章にまとめました。



発見されたばかりの集石土坑（1号集石土坑）

3 発掘調査の成果

今回の調査で発見された最も古い時代の遺物と遺構は、縄文時代早期のものでした。多量の焼けた石が詰った集石土坑と呼ばれる遺構は、この時期に残されたと推測しています。集石土坑とは、地面に穴を掘り、そこで石焼き芋のように石を熱して蒸し焼き調理をしたと考えられている跡のことです。以前の調査でも発見されていますが、今回の調査では2箇所、関連する土坑が1箇所、そしてこの集石土坑が7×8m程度の範囲に環状に集まって形成されたと考えられる環状集石が発見されています。

調査区中ごろにまとまって出土した縄文時代前期初頭の下吉井式土器の胎土には、海綿骨針とよばれる海綿体の骨が含まれていました。これはこの土器が関東平野から搬入されてきたことを示すものです。

発見された縄文土器には、他に中期や後期のものがありますが、土坑内から発見された後期の土器2点を除き、遺構から発見されたものではなく、調査面積に対して少量でした。

今回の調査で発見された最も大きな土器は、弥生時代中期の壺形土器でした。直径約1.5mの土坑の中から、この土器が1点だけ発見されました。弥生時代以降の遺物には、平安時代、中世、近世のものがありました。調査成果の詳細は、第3章に記載し、第5章の総括にて今回の調査成果のまとめをします。

序 文

本書は、一級河川朝日川河川改修工事に伴い、2021 年度（令和 3 年度）に実施した美通遺跡の発掘調査成果をまとめた報告書です。

美通遺跡は、山梨県都留市内を流れる朝日川と菅野川に挟まれた河岸段丘上に立地する遺跡です。これまでの調査で縄文時代から近世に至る幅広い時代の遺物や遺構が発見されています。今回の調査でも、縄文時代、弥生時代、平安時代、中世、近世の遺物が発見されました。中でも、縄文土器は早期末から後期までの多時期にわたります。

遺構には、調理に使われたと考えられる縄文時代早期の集石土坑や、その集石土坑がたくさん集まって形成されたと考えられる環状集石、見事な弥生時代の壺が出土した円形の土坑などが発見されました。これらの幅広い時代にわたる遺物や遺構は、美通遺跡での各時代の生活誌を今日に伝える貴重な文化財と評価できるでしょう。

本書が、今後の美通遺跡の保護、地域の歴史学習や研究のために、多くの方に御活用いただければ幸いです。

最後に、今回の発掘調査及び調査報告書の刊行に当たり、御理解と御協力をいただいた関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

2023 年 3 月

山梨県観光文化部埋蔵文化財センター
所長 西川 秀之

例　言

- 1 本書は、山梨県都留市井倉地内に所在する美通遺跡での発掘調査の成果をまとめた発掘調査報告書である。
- 2 当該発掘調査は山梨県が実施する一級河川朝日川河川改修工事に伴う事前調査であり、発掘調査及び発掘調査報告書の刊行は、山梨県県土整備部から山梨県観光文化部が委託を受け、埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 発掘調査は2021年(令和3年)6月1日から同年9月30日まで実施した。また、発掘調査終了後の基礎的整理作業は2021年11月1日から2022年(令和4年)1月31日まで、本格的整理作業及び発掘調査報告書の作成は2022年4月1日から2023年(令和5年)3月17日まで実施した。
- 4 調査体制については第1章第4節に記載した。
- 5 本書の執筆、編集は久保田健太郎が行った。
- 6 第4章は久保田健太郎 2023「美通遺跡 2021年度調査地点における集石土坑の基礎分析」『研究紀要』39, 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター, pp.1-8, 山梨の一部を改変して再録したものである。
- 7 遺跡における写真は久保田が撮影した。また、遺物の室内写真は久保田と佐藤孝志が撮影した。
- 8 発掘調査に係る国土座標測量、基準標高測量、空中写真撮影及び遺構断面写真撮影の一部はシン・技術コンサル株式会社に委託した。
- 9 発掘調査及び報告書作成にあたり、下記の方々や機関から助言と協力をいただいた。記して謝意を表する。
(敬称略、50音順)
一瀬一浩、金子寿元、櫛原功一、国土交通省関東地方整備局甲府河川国道事務所大月出張所、
小坂井孝修、渋谷賢太郎、都留市役所、都留市教育委員会、奈良泰史、森屋雅幸
- 10 本発掘調査に係る記録図面、写真等の記録類、出土遺物は山梨県埋蔵文化財センターに保管している。

凡　例

- 1 遺物・遺構等の縮尺は図中に示した。
- 2 遺構の立面図や断面図の左側基点に付した数字は標高値(m)を表す。
- 3 掲載した平面図の方位は、図中に方位記号を付して示した。
- 4 土層段断面図の作図基準点の平面位置は図6上段に示した。
- 5 各遺構の断面図の作図基準点は各遺構平面図に示した。
- 6 土器観察表中及び土層注記の色調名は、農林水産省水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』1990年度版による。
- 7 本書中に掲載した地図は、国土地理院発行の1/25,000地図を利用した。
- 8 参考文献については各章の末尾に掲載した。

目 次

卷頭写真図版

序文

例言、凡例

目次

第1章 調査の経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	
第2節 調査の目的	
第3節 調査の経緯と諸手続き	
第4節 調査組織	
第2章 遺跡の位置と環境	3
第1節 遺跡周辺の地形	
第2節 遺跡周辺の歴史環境	
第3章 調査の方法と成果	7
第1節 発掘調査の方法	
第2節 遺跡内の層序と旧地形	
第3節 発見した遺構	
(1) 概要、(2) 長形土坑、(3) 円形土坑、(4) 溝跡、(5) 集石土坑関連、(6) 環状集石	
第4節 出土した遺物	
(1) 概要、(2) 出土遺物各説1 (縄文時代から弥生時代までの土器)、(3) 出土遺物各説2 (石器)、 (4) 出土遺物各説3 (その他の時期の遺物)	
第4章 集石土坑及び環状集石構成石材の検討	36
第1節 検討の目的	
第2節 遺跡に隣接する朝日川河川敷での石材調査	
第3節 方法の検討	
第4節 検討と結論	
第5章 総括	43
美通遺跡 2021 年度調査地点の層序と年代	
微地形と遺構形成の傾向	
集石土坑と環状集石	
集石の形成過程	
美通遺跡における各時期の空間利用実態に関する課題	
写真図版	
報告書抄録	

挿図目次

図1 美通遺跡2021年度発掘調査地点の位置と周辺の地形	4	図16 土坑（6）	22
図2 美通遺跡周辺の遺跡分布	5	図17 土坑（7）・集石土坑（1）	23
図3 美通遺跡における既往の調査個所	5	図18 集石土坑（2）	24
図4 美通遺跡2021年度調査地点・グリッド設定図	7	図19 土坑（8）・環状集石（1）	25
図5 美通遺跡2021年度調査地点内の基本層序	8	図20 環状集石（2）	26
図6 美通遺跡2021年度調査地点の土層堆積状況（1）	9	図21 出土遺物の平面分布	29
図7 美通遺跡2021年度調査地点の土層堆積状況（2）	10	図22 環状集石周辺の出土土器平面分布	30
図8 美通遺跡2021年度調査地点の土層堆積状況（3）	11	図23 時期別の出土土器分布傾向	31
図9 美通遺跡2021年度調査地点内の層序と5層下面段階の地形	12	図24 出土遺物（1）	32
図10 美通遺跡 2021年度調査地点遺構分布図	16	図25 出土遺物（2）	33
図11 土坑（1）	17	図26 出土遺物（3）	34
図12 土坑（2）	18	図27 石材調査結果	38
図13 土坑（3）	19	図28 美通遺跡 2021年度調査地点周辺の地質	39
図14 土坑（4）	20	図29 集石間の礫重量比較と環状集石における重量量の礫の平面分布	39
図15 土坑（5）・1号溝跡	21	図30 環状集石内出土の磨り面をもつ台石	40
		図31 環状集石における石材種別平面分布傾向	41
		図32 環状集石における非破碎石材の平面分布傾向	42
		図33 環状集石における礫接合関係	42

挿表目次

表1 周辺の遺跡一覧	6	表3 遺物観察表(土器)	35
表2 遺構計測表	13	表4 集石ごとの石材組成比	39

写真図版目次

卷頭図版1	調査区遠景	卷末写真図版4	環状集石（3）・1号集石土坑・2号集石土坑
卷頭図版2	調査区周辺の地形	卷末写真図版5	2号集石土坑・7号土坑
卷頭図版3	環状集石	卷末写真図版6	環状集石・集石土坑の石材
卷頭図版4	集石土坑・土坑	卷末写真図版7	土坑（1）
卷頭図版5	土層断面・弥生土器出土状況	卷末写真図版8	土坑（2）
卷頭図版6	出土遺物	卷末写真図版9	土坑（3）
卷頭図版7	土層断面と旧地形の検討	卷末写真図版10	土坑（4）
卷末写真図版1	調査風景	卷末写真図版11	出土遺物（1）
卷末写真図版2	環状集石（1）	卷末写真図版12	出土遺物（2）
卷末写真図版3	環状集石（2）	卷末写真図版13	出土遺物（3）



調査参加者

酷暑の中での調査となり、新型コロナウイルス感染症への対策と熱中症対策の両立が課題となる調査だった

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

山梨県県土整備部富士・東部建設事務所が実施する一級河川朝日川河川改修工事に伴い、当該地で擁壁工事や側道の建設が予定されていたことから、2014(平成26)年6月10日から6月26日にかけて、埋蔵文化財の有無や内容、範囲などを確認するための試掘調査を都留市教育委員会が実施した(森屋・服部編2016)。その結果、縄文時代の遺物を中心とした埋蔵文化財が発見され、保護の措置を協議する必要が生じた。これを受け、山梨県観光文化部文化振興・文化財課が富士・東部建設事務所と保存について協議したが、現地での埋設保存が困難であると判断し、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

2021(令和3)年4月20日付けで山梨県観光文化部と同県土整備部が「一級河川朝日川河川改修工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査に関する覚書」を交換した。

また、発掘調査を実施するにあたり、2021年5月上旬に山梨県観光文化部文化振興文化財課、山梨県埋蔵文化財センター、富士・東部建設事務所による現地協議を実施し、調査範囲や工程、設置施設等の調査計画について3者で確認した。これを受け、当センターで発掘調査実施に向けた準備を進め、6月1日から発掘調査を開始した。

第2節 調査の目的

本格的調査に先立って都留市教育委員会が実施した試掘調査で縄文時代を中心とした遺物や、形成時期不明の遺構が多数発見されていたことから(森屋・服部編2016)、遺構と遺物の分布や遺跡の形成時期把握とその記録保存を調査の主目的とした(調査成果は第3章第3節、第4節。第5章に総括)。

表土掘削と試掘坑内土層断面の復旧・観察の過程で、調査区内の各堆積層に、隣接する朝日川に向けた東西方向の傾斜と、朝日川の上流側から下流側に向けた南北方向の傾斜とがみられることが判明した。そのため、現地表面に至るまでの地形形成や遺跡の形成過程の検討に必要な土層堆積過程を把握するため、地形の傾斜方向を踏まえた南北方向2系列(図6 :①B-B'', D-D' の一部, ②D-D' の一部, A-A', C-C', H-H'' の一部, G-G' の一部)、東西方向5箇所(図6 :D-D', E-E', F-F', H-H'', G-G')での土層断面の観察と記録を実施した。これを基に調査区南側の小規模な谷状地形を捕捉し、微地形と遺物・遺構分布傾向の関係を検討した(検討結果は第3章第2節に、まとめを5章に記載)。

また、調査の過程で発見した集石土坑と環状集石を構成する礫採取地の推定を目的とした石材調査を、隣接する朝日川河川敷で実施した(調査成果は第4章)。

第3節 調査の経過と諸手続き

(1) 調査の経過

調査にあたり、都留市所有の調査区隣接地を作業ヤード用地として、同じく都留市所有地を表土仮置場として、また調査区に隣接する国土交通省甲府河川国道事務所大月出張所管理の国道用地を駐車場として借用した。2021年5月末にフェンスや休憩所、機材庫などの各種仮設物を設置し、6月1日から6月9日にかけて表土掘削を実施した。この段階で、調査区南東部に大規模な現代の攪乱跡が発見され、該当エリアを調査対象から除外した(図4 E10-14, D10-18, C12-20, B15-21のうち「調査区内の掘削底面」から除外されている範囲)。またこの間に基準点測量と方眼杭の設置を実施した。

6月7日から作業員による人力掘削を開始した。初期の段階で都留市教育委員会による試掘坑の位置を特定・復旧し、調査区内の堆積状況を把握した。8月23日までに基本層序5層(第3章第2節)より上層に形成された遺構の精査と各種記録作業を終了し、それ以下の遺構・遺物を探索した。5層以下の調査と記録は概ね9月13日までに終え、空中写真撮影を実施した。その後9月16日から埋め戻しを開始したが、環状集石と2号集石土坑の記録作業は継続した。作業員の任用は9月21日までであった。この日までに環状集石の調査を終え、2号集石土坑の調査と記録作業は、久保田と佐藤で実施した。そして9月30日には全ての記録作業と埋め戻し、仮設物の撤去を完了し、現場作業を終了した。

なお、2023(令和5)年1月4日に調査区に隣接する朝日川河川敷で石材調査を実施した。

(2) 調査に係る諸手続き

- ・2021年4月20日付けにて、「一級河川朝日川河川改修工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査に関する覚書」を山梨県観光文化部と同県土整備部とで交換。
- ・2021年6月7日付け埋文第298号にて、文化財保護法第99条第2項に基づく埋蔵文化財発掘調査の報告を山梨県知事へ提出。
- ・2021年10月1日付け埋文第764号にて、文化財保護法第100条第2項に基づく大月警察署長宛の文化財発見の通知を山梨県知事へ依頼。
- ・2022年3月18日付け埋文第1182号にて、山梨県知事へ発掘調査の終了を報告。

第4節 調査組織

(1) 2021年度(発掘調査・基礎的整理作業)

調査主体 山梨県観光文化部

調査機関 山梨県埋蔵文化財センター

所長 西川秀之

次長 保坂和博

調査研究課長 宮里 学

調査担当者 調査研究課 主任・文化財主事 久保田健太郎

会計年度任用職員 佐藤孝志

発掘調査作業員(50音順. いずれも会計年度任用職員.)

雨宮信次、有賀国雄、池田茂光、石井 元、石井大夢、石井礼子、石黒毅志、板倉梨貢、牛山栄一、奥野治男、斧田文夫、小坂井孝修、小林英樹、高尾和美、田中基子、馬場紀聰、原田恵美、望月貴久、横川賢一、渡邊正法

整理作業員(50音順. いずれも会計年度任用職員.) 斎藤律子、清水真弓

(2) 2022年度(本格的整理作業・報告書作成)

調査主体 山梨県観光文化部

調査機関 山梨県埋蔵文化財センター

所長 西川秀之

次長 保坂和博

調査研究課長 宮里 学

調査担当者 調査研究課 主任・文化財主事 久保田健太郎

会計年度任用職員 佐藤孝志

整理作業員(50音順. いずれも会計年度任用職員.) 清水真弓、新津多恵

参考文献

森屋雅幸・服部浩平編 2016『山梨県都留市内遺跡発掘調査報告書』都留市埋蔵文化財調査報告書第15集 ,
都留市教育委員会,山梨 pp. 24-26

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡周辺の地形

富士五湖の1つである山中湖や富士北麓地域の湧水を水源とする桂川は、右岸の道志山地と左岸の御坂山地の間を北東方向へ流下し、大月市内で笛子川と合流して相模湖へと東流する(図1)。相模湖からは相模川となり、相模湾へ流れゆく。美通遺跡は、この桂川水系に属する朝日川流域に立地している。

菜畑山(標高1293.0m)から今倉山(標高1470.1m)にかけてを水源とする朝日川は⁽¹⁾、朝日曾雌で赤鞍ヶ岳(標高1299.0m)を水源とする大旅川と合流し(標高516.6m付近)、朝日馬場で高畠山(標高980.5m)を水源とする天平川と合流する(標高476.9m)。ここまで概ね西流していた朝日川水系は、生出山(標高661.7m)を左岸にみながら次第に流路を北へと移していき、生出山の西麓を北流する菅野川に合流する。菅野川もまた、そのすぐ北側で桂川に合流する。美通遺跡は、この朝日川と菅野川とに挟まれた河岸段丘上に立地している(図1右下地形断面図)。2021年度調査地点の標高は約413.9mで、朝日川や菅野川の流路方向に合わせて北に傾斜している。

美通遺跡2021年度調査地点と現在の朝日川河川敷との比高差は約3から4m程度である(第4章図27右上)。朝日川河川敷では手の平大程度の円礫から亜円礫が採取可能であり、当調査で発見された集石土坑や環状集石の石材もここから供給されたものと推測される(第4章に詳細を記載)。

桂川流域は、約8,500年前に富士山から大月市猿橋付近まで流下した溶岩流の跡(猿橋溶岩)がみられるほか、富士山給源のスコリアや火山灰等の火山碎屑物の堆積が顕著な地域である。これらは当該地域特有の地形や景観をつくりだすとともに、地形や遺跡形成の過程を検討する上で鍵層の役割も果たしている。美通遺跡2021年度調査地点と隣接する朝日川河川敷との間には高さ約3～4mの崖線部があるが(写真図版6右上)、この崖線を構成する大部分は猿橋溶岩にあたる玄武岩質溶岩である。D-D'断面の玄武岩質溶岩は、この一部である(図8)。このことから、当調査での最下層にあたる基本層序(図5)の11層は、猿橋溶岩形成後の約8,500年前以降に堆積したものであるといえる。また、基本層序5層以降の堆積物中のスコリアは、縄文時代中期後半以降に度々富士山から噴出した火山碎屑物に対応するものと考えられ、多時期にわたる遺跡形成の時期を捉える手がかりとなる(第3章第2節に記載)。

第2節 遺跡周辺の歴史環境

桂川は急峻な山地の間を流れるため、その流域には広く平坦な土地が希薄である。そのため、河川周辺の比較的小な平坦地を中心に遺跡が分布する特徴がある(図2)。広い耕地を確保しづらいこの環境は養蚕と織物業を発展させ、近世から名を馳せた「郡内織」を世に送り出すこととなる。こういった桂川流域の地形環境にあって、朝日川と菅野川の間には比較的広い平坦地が展開しており、格好の日常生活の舞台となった。この平坦な段丘上には広範囲に遺構や遺物が分布する。これが美通遺跡である。

桂川とその支流は、多様な地域へと往来するパスの役割ももつ。桂川上流は富士北麓地域方面へ、下流は関東平野へ、大月で合流する笛子川の上流は甲府盆地方面へ、菅野川上流は道志村方面へ、そして朝日川上流はそのさらに支流である大旅川を遡り、分水嶺となる離鶴峠を越えて秋山川を辿ることで相模原方面へ、それぞれ繋がっている。富士北麓方面はさらに御殿場を経由して小田原や三島方面へ続く。美通遺跡は、この結節点にあたるエリアに立地する。山間地内にあって比較的広く平坦な土地に立地することと相まって、多時期にわたって断続的に遺跡が形成された要因となっているのではないか。図3に示した既往の調査の範囲では、縄文時代早期押型文土器、条痕文系土器、前期初頭下吉井式土器、前期前葉の土器、中葉黒浜式土器、後葉諸磯式土器、前期末十三菩提式土器、中期曾利式土器、後期称名寺式、堀之内式、加曾利B式、晚期氷I式、弥生時代前期から中期の土器、古墳時代後期、平安時代、中世、近世といった、2021年度調査地点で発見された時期と共に通するものも含む多時期の遺構や遺物が発見されている。

註

(1) 地図上では大旅沢と記載されている。

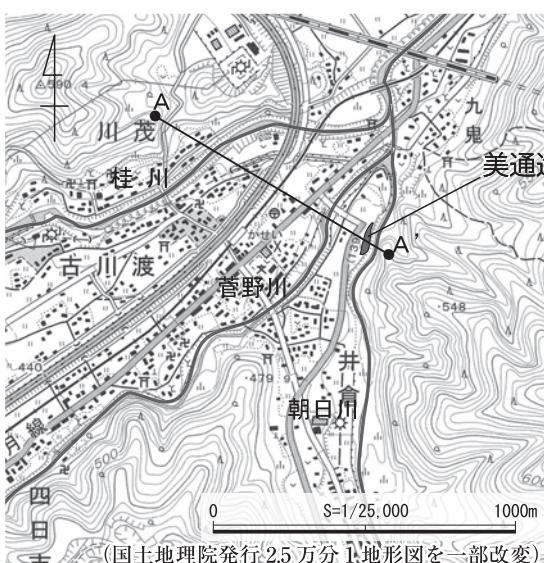
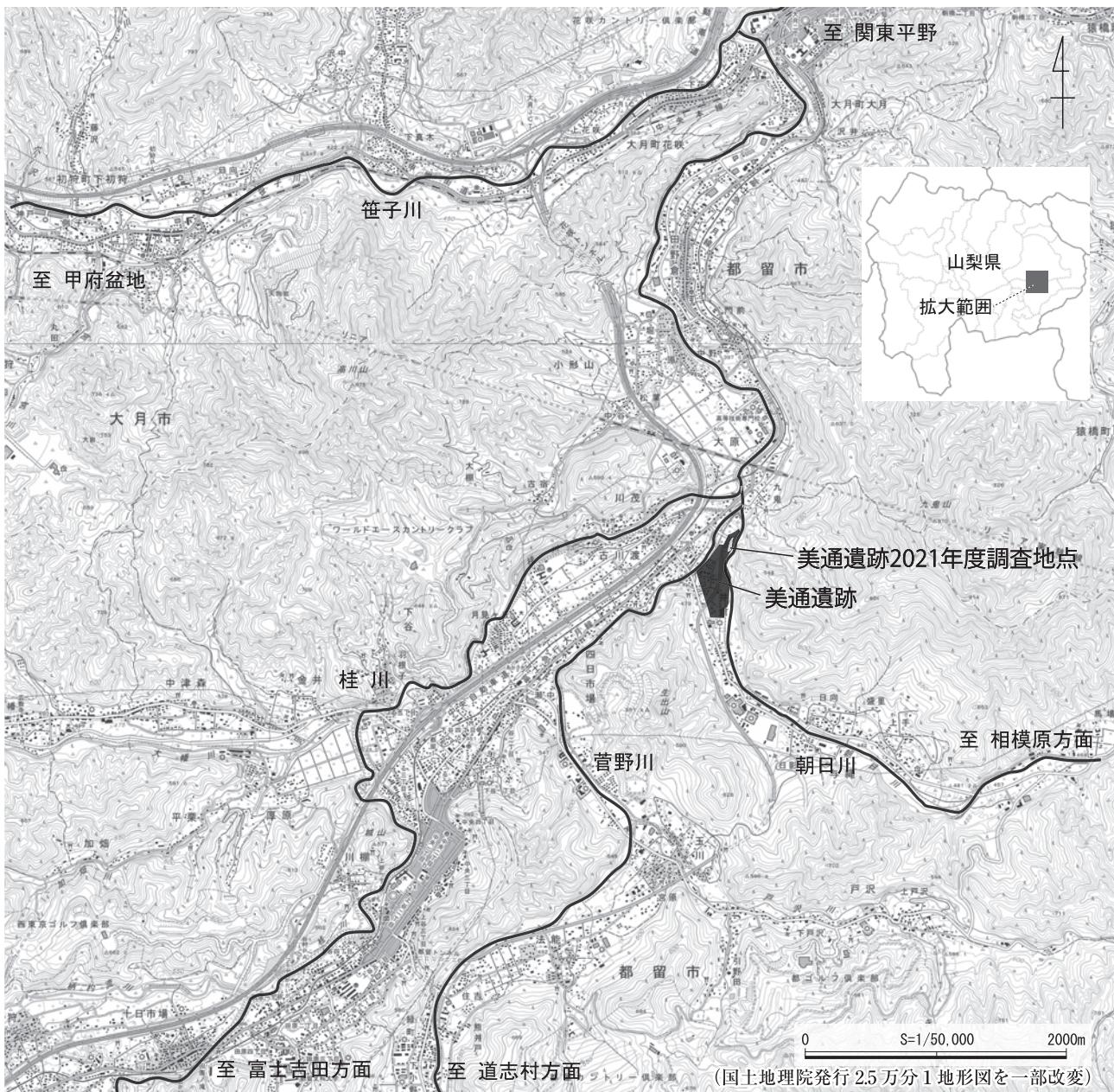


図1 美通遺跡2021年度発掘調査地点の位置と周辺の地形

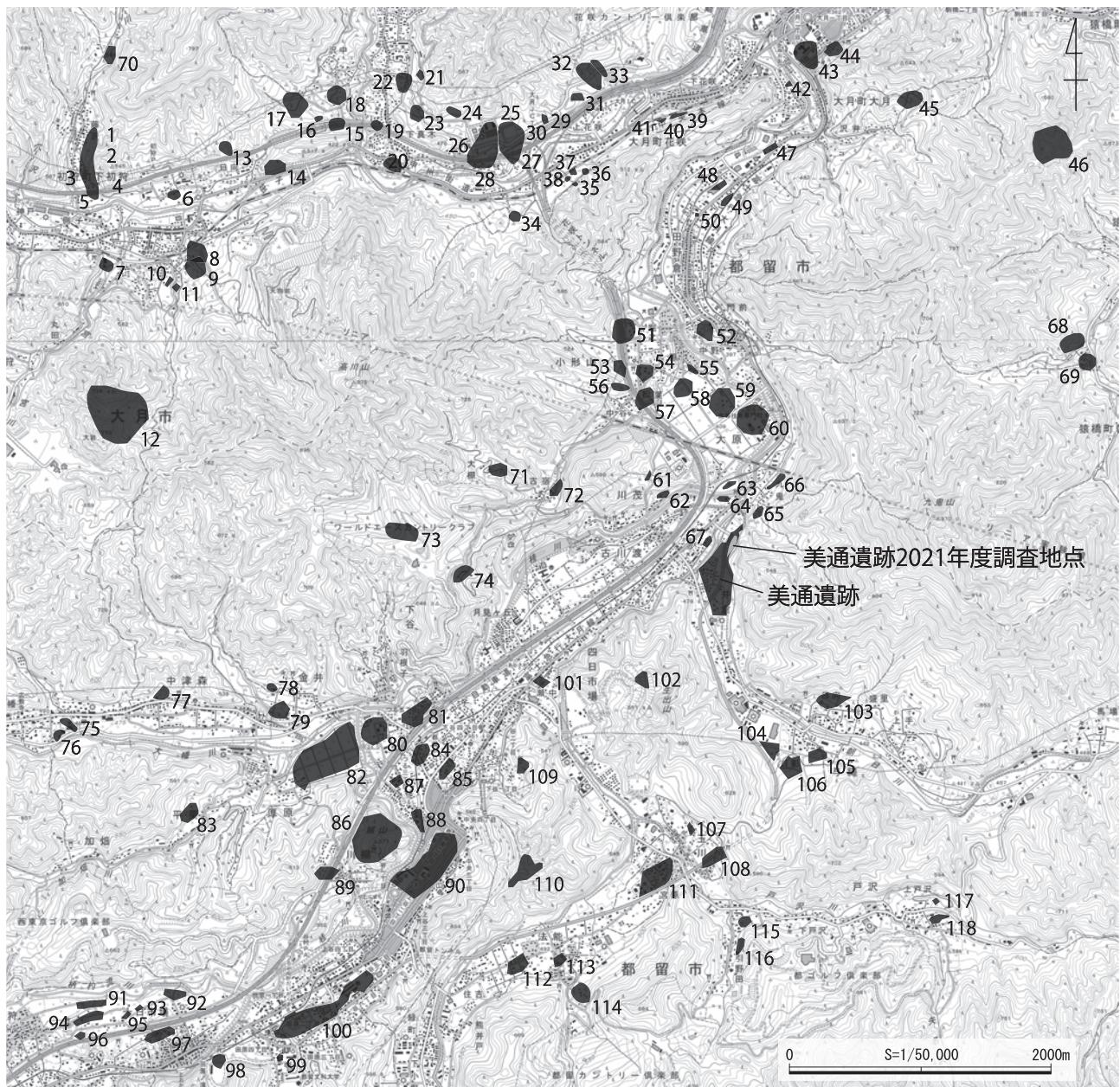


図2 美通遺跡周辺の遺跡分布（国土地理院発行 2.5万分1 地形図を一部改変）

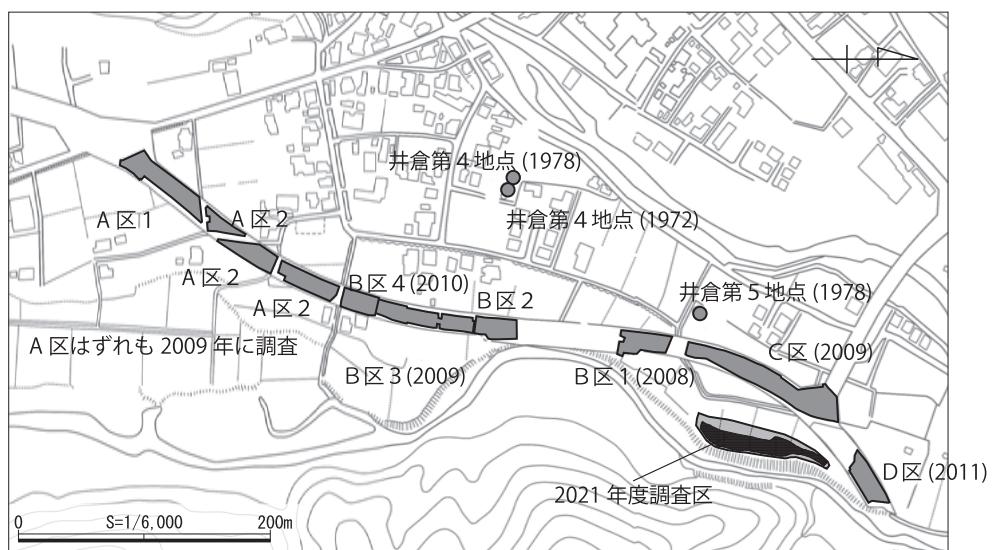


図3 美通遺跡における既往の調査箇所

表1 周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	横道B遺跡	散布地	縄文	59	中溝遺跡	集落跡	縄文
2	横道A遺跡	散布地	縄文	60	沖大原遺跡	散布地	縄文
3	寺門A遺跡	散布地	縄文	61	揚久保遺跡	散布地	縄文
4	寺門B遺跡	散布地	縄文	62	亀石遺跡	散布地	縄文・平安
5	寺門口遺跡	散布地	縄文	63	下久保遺跡	散布地	縄文
6	房氏遺跡	散布地	縄文	64	大久保遺跡	散布地	縄文
7	堰遺跡	散布地	縄文	65	九鬼I遺跡	散布地	縄文・奈良・平安
8	河内遺跡	城館跡	中世	66	九鬼II遺跡	集落跡	縄文・平安
9	連野遺跡	散布地	縄文	67	前ヶ久保遺跡	散布地	縄文・奈良・平安
10	上原遺跡	散布地	縄文	68	むらさき遺跡	散布地	縄文
11	外ガイド遺跡	集落跡	縄文・平安	69	朝日小沢遺跡	散布地	縄文
12	近ヶ坂鐘撞堂	城館跡		70	下門原遺跡	散布地	縄文
13	足ノ口遺跡	散布地	縄文	71	大棚遺跡	散布地	縄文
14	川向遺跡	窯跡		72	古谷戸遺跡	散布地	縄文
15	沢中原A遺跡	散布地	縄文	73	大日影遺跡	散布地	縄文・平安
16	沢中原B遺跡	散布地	縄文	74	横吹遺跡	散布地	縄文
17	沢中原C遺跡	散布地	縄文	75	久保遺跡	集落跡	縄文
18	権現原遺跡	散布地	縄文	76	壁谷遺跡	住居跡	縄文
19	小佐野遺跡	散布地	縄文	77	新井遺跡	散布地	縄文
20	青木原遺跡	散布地	縄文	78	佐久路遺跡	散布地	縄文
21	梅久保遺跡	散布地	縄文	79	中津森館跡	城館跡	中世
22	中曾根遺跡	散布地	縄文	80	道生堀遺跡	散布地	縄文・中世
23	後小路遺跡	散布地		81	鷹の巣遺跡	集落跡	縄文・奈良・平安
24	錢神遺跡	散布地	縄文	82	牛石遺跡	集落跡	縄文・奈良
25	原平A遺跡	集落跡	縄文・弥生・奈良・平安・中世・近世	83	上ノ山遺跡	散布地	縄文
26	原平B遺跡	集落跡	縄文・弥生・奈良・平安・中世・近世	84	徳重遺跡	散布地	縄文
27	坂田古墳	古墳		85	滑岩遺跡		
28	前沢内屋敷遺跡	古墳		86	城の腰遺跡	散布地	弥生
29	西ノ上A遺跡	散布地	縄文・平安	87	城の腰第2遺跡	散布地	平安
30	西ノ上B遺跡	古墳		88	勝山城跡	城館跡	中世・近世
31	後林遺跡	土坑群	縄文	89	正觀寺遺跡	散布地	縄文
32	花咲鐘撞堂	城館跡		90	矢村城	城館跡	中世
33	芝草遺跡	集落跡	平安	91	御所海戸遺跡	散布地	縄文
34	幸ノ田遺跡	散布地	縄文	92	向原遺跡	散布地	縄文
35	遼郷1遺跡	散布地	縄文	93	馬々舟遺跡	散布地	縄文
36	遼郷2遺跡	散布地	縄文	94	下原遺跡	散布地	縄文
37	遼郷3遺跡	散布地	縄文	95	おいしがね遺跡	散布地	縄文
38	遼郷4遺跡	散布地	縄文	96	山梨原遺跡	散布地	縄文・中世
39	大石遺跡	散布地	縄文・平安	97	下山梨遺跡	散布地	縄文
40	花咲用水遺跡	生産遺跡	近世	98	大堰遺跡	散布地	縄文
41	花咲用水関連遺跡	生産遺跡	近世	99	四ノ側遺跡	集落跡	平安
42	堂地遺跡	集落跡	縄文	100	三ノ側遺跡	集落跡	縄文・奈良・平安・中世
43	大月遺跡	集落跡	縄文・奈良・平安	101	小倉遺跡	散布地	縄文
44	献上地遺跡	散布地	平安	102	生出山(山頂)遺跡	集落跡	縄文・弥生・平安
45	地蔵窟遺跡			103	与繩日向遺跡	散布地	縄文
46	駒橋御前山	城館跡		104	天正寺遺跡	集落跡	縄文・弥生・中世
47	先の宮遺跡	散布地	縄文	105	与繩城跡	城館跡	中世
48	桃園遺跡	散布地	縄文	106	日影松原遺跡	散布地	縄文
49	神出遺跡	散布地	縄文	107	玉川遺跡	散布地	縄文・古墳
50	桃園西遺跡	散布地	縄文	108	玉川金山遺跡	集落跡	縄文・奈良・中世
51	堀之内原遺跡	集落跡	奈良・平安	109	深田遺跡	散布地	縄文・古墳
52	中野原遺跡	散布地	古墳	110	谷村の烽火台	城館跡	中世
53	宮脇遺跡	散布地	縄文・平安	111	宮原遺跡	散布地	縄文
54	松葉遺跡	散布地	縄文	112	住吉遺跡	集落跡	縄文
55	原遺跡	散布地	縄文	113	海戸遺跡	散布地	縄文
56	中谷入遺跡	散布地	縄文・平安	114	天神山遺跡	散布地	古墳
57	中谷遺跡	集落跡	縄文・古墳・奈良	115	桃曾根遺跡	散布地	縄文・弥生
58	大原中溝遺跡	集落跡	縄文・古墳	116	引の田遺跡	散布地	縄文
				117	西畠遺跡	散布地	縄文
				118	金山遺跡	散布地	縄文

第3章 調査の方法と成果

第1節 発掘調査の方法

調査範囲は都留市教育委員会が2014年に実施した試掘調査結果を基に決定した(図4網掛けの範囲)。その内、表土掘削中に発見した南西部の攪乱を除く図4斜線の範囲を最終的な調査対象とした。

調査にあたり近世以降の水田耕作土と推定される2層までを重機で除去するとともに、各地点における堆積状況の検討・把握を目的として、都留市教育委員会が実施した試掘坑の位置特定と復旧作業を重機と人力により実施した。その後、調査区内に国土座標に基づく三次元座標の基準杭を4点設置し(他に工事計画段階で打設された2点の既知点を利用した)、1辺5m四方のグリッド杭を打設した。各グリッド名の表記には東西方向(X軸)に大文字アルファベット、南北方向(Y軸)にアラビア数字を用いた。X軸は西側を起点としてA, B, C…、Y軸は北側を起点として1, 2, 3…とし、各グリッドはその交点の記号番号を組み合わせて「A 1 グリッド」のように呼称することとした。

遺構の調査 重機による表土掘削後は、人力掘削にて遺構平面の検出と遺物分布状況の確認を進めた。円形土坑及び長形土坑(遺構の種別については第3節参照。以下同様。)は原則長軸方向に半裁して覆土断面を観察し、堆積状況を実測図化・写真撮影・観察所見の記載により記録した。その後完掘し、完掘状況の写真撮影・平面図作成そして遺構によりエレベーション図の作成を実施した。集石土坑は検出段階の平面形状の実測図化、写真撮影、礫エレベーション図作成後、光波測距儀による礫の国土座標に基づく三次元座標を用いた位置情報の記録を取り上げを実施し、完掘した。完掘状況の記録は円形土坑・長形土坑の記録方法と同様である。環状集石は調査段階で集石土坑が集積して形成したものと推測したが、土坑状の平面形状や断面形を捉えることができなかった。そのため礫エレベーション図の作成・礫の三次元位置情報の記録と取り上げをもって完掘とし、記録作業を終えた。また、遺構完掘段階(集石土坑と環状集石は検出段階)で調査区全景写真撮影と周辺地形との関係を把握する景観写真撮影を目的とした空中写真撮影を実施した。

遺物位置情報の記録 調査区全体において遺構外の遺物分布が希薄であったことと、時期別に集中して散布する傾向を読み取れたことから、遺物の分布状況は原則全点の三次元位置情報を記録することとした(第4節図21に遺物平面分布図を掲載)。

その他 地形形成過程に関する情報の把握を目的として、南北に2系統、東西に5箇所で土層断面の観察・実測図化地点を設けた(第2節(1)参照)。集石土坑や環状集石の基礎分析のために、朝日川河川敷において石材調査を実施した。その実施方法については第4章に記載した。

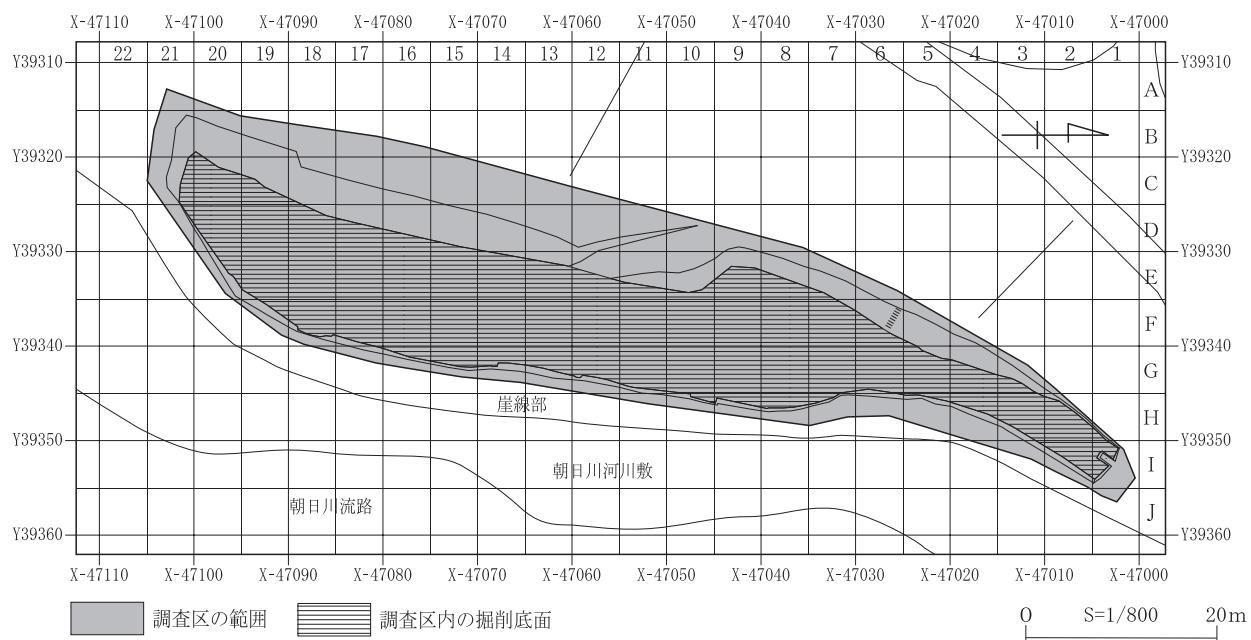


図4 美通遺跡2021年度調査地点・グリッド設定図

第2節 遺跡内の層序と旧地形

(1) 調査区内の基本層序

調査区全体にわたって近世以降の水田耕作土である2層が分布し、これが下層を削平して形成している状況が観察できた。調査区内の自然地形は朝日川上流側から下流側へ向けて南北に標高が低くなっていく傾向がある。水田耕作面はこれに合わせて南から北へ階段状に土地を削平して形成していた。概ね旧地形面に合わせて造成された水田面であるが、高標高エリアである調査区南西部においては特に旧堆積層の削平が著しく、3層から5層もしくは6層までが消滅していた。自然地形は調査区東側の朝日川に向けても著しく傾斜している。調査区全体を通して、朝日川に隣接する東端エリアでは堆積層の遺存状況が良好である。そこで、調査の初段階から堆積層の観察対象としていたA-A'断面をベースとしつつ、特に5層以上の堆積は調査区東端のB-B"断面(図7)を参照し、図5の基本層序をまとめた。

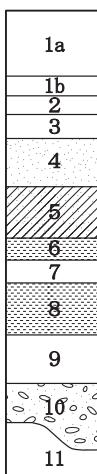
調査区全体の堆積層を5層形成以前と以後に分けて整理する。5層は富士山給源の多量のスコリアを含む黒褐色土層で、同層出土の遺物から縄文時代中期後葉の曾利式期に堆積した火山碎屑物であると考えられる。5層形成以前の堆積層はスコリアを含まない。この層群は褐色の風化火山灰を主体とするが、約8,500年前に富士山から流下したとされる猿橋溶岩が11層よりも下層の基盤となっていることから、完新世に堆積したものである。

5層以前の堆積層 A-A'断面作成地点で標高約412.000mを底面とした砂礫層(10層)が堆積している。これは(2)でも述べるが巻頭図版7の平面図に網掛けで示した範囲に分布し、その外ではより粒径が細かく粗粒砂から細粒砂として確認される。これよりも上層は風化火山灰を中心に構成される層によってなる。この風化火山灰層にはシルトが含まれており、堆積の過程でシルトが供給される環境であったか、風化火山灰自体が水成の再堆積層である可能性がある。風化火山灰を主体とした6層から9層までの層群のうち、6層と8層は土壤化が著しく暗褐色を呈する。このうち、7層相当段階に環状集石や集石土坑が形成したと想定している。形成時期は早期末と結論した(第3節)。この層群の段階では、調査区南側に朝日川に向けた小規模な谷状地形があった((2)の検討による。)。一方、5層上面が比較的水平であることから、徐々に埋まりつつあったこの谷状地形は5層の形成により完全に埋没したことがわかる。

5層以降の堆積層 5層下面からそれ以下の層を掘削して形成している40号土坑は覆土が5層であるが(巻頭図版5上段写真の手前にみられる土坑)、他の土坑はいずれも5層を掘削して形成している。また覆土に4層を含むものもないことから、いずれも4層堆積以降に形成したものと考えられる。4層は調査区全体に安定してみられるわけではなく、5層中にブロックとして分布する場合がある。2層はそれ以下の層を削平して造成された近世以降の水田耕作土である。底面には鉄分を多く含んだ床土が形成していた。

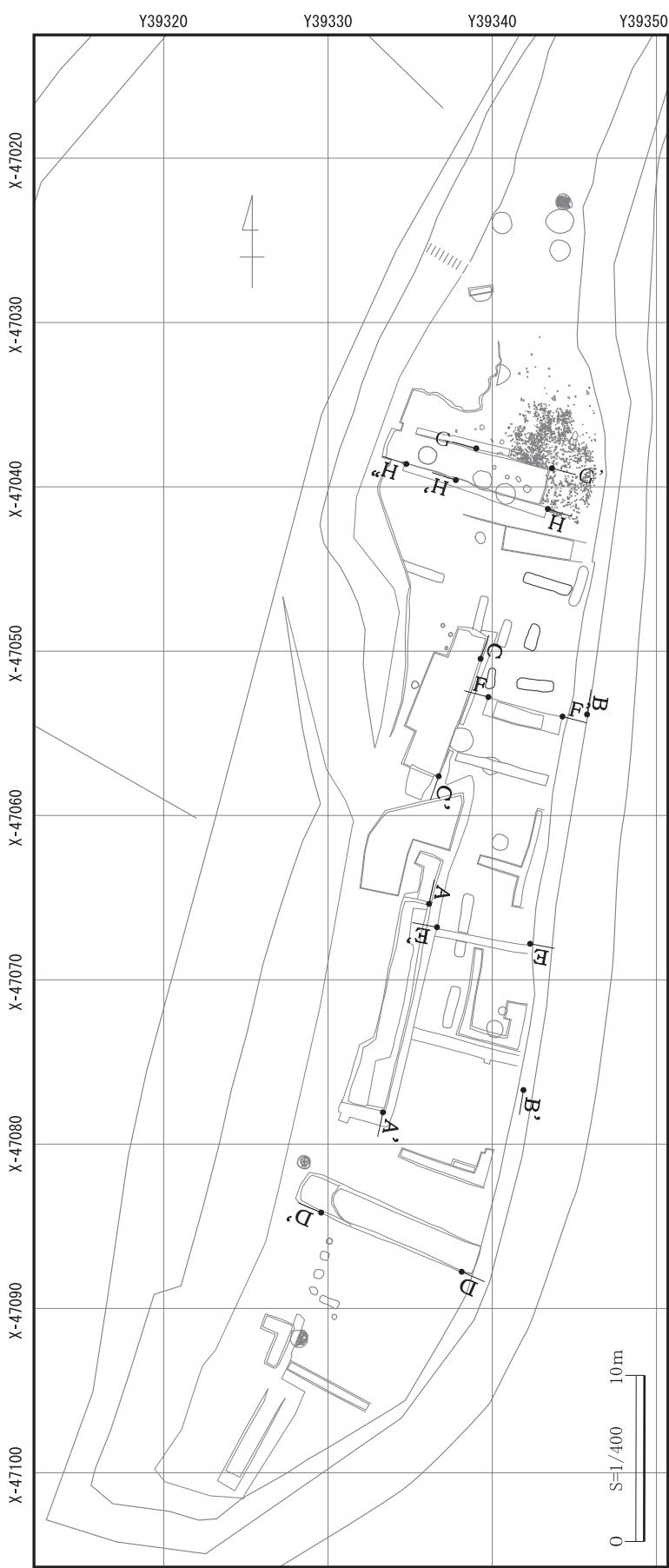
(2) 旧地形の検討

前述したように、5層形成以前の堆積層群には調査区南側に小規模な谷状の微地形がみられた。一方、富士山給源の火山碎屑物により厚く堆積した5層の形成を境に谷状地形は埋没している。実はこの5層以前と以後の地形変化は、時期別の遺構分布傾向に関係している。



- 1a : 盛土層. 現代の土地造成に伴う客土層. 調査区西側に堆積している.
1b : 現代の耕作土層. 下部には床土が形成している.
2 : 灰褐色土層(10YR5/2)しまり極めて強く固い. 旧耕作土層. 江戸時代を中心とした遺物を含む. 下部には床土が形成している.
3 : 黒褐色土層(5YR2/2)スコリアを含む. 堆積層が良好に残存する調査区西側で観察できる.
4 : にぶい灰褐色土層(10YR5/4)スコリアを多量に含む. 堆積層が良好に残存する調査区西側で観察できる.
5 : 黒褐色土層(7.5YR3/2)スコリアを多量に含む. 直径2mm程度の褐色粒子を含む.
6 : 暗褐色シルト質ローム層(10YR3/3)下層に類似するが. 土壤化が顕著である. 1mm以下の白色の微粒子をごくわずかに含む.
7 : 褐色シルト質ローム層(7.5YR4/4)白色の微粒子を上層よりも多く含む.
8 : 黒褐色土層(7.5YR3/2)6層に類似する.
9 : 褐色シルト質ローム層(7.5YR4/4)7層に類似する.
10 : 褐色砂礫層(10YR4/4). 調査区西側から東側へ傾斜する.
11 : 褐色砂質ローム層(7.5YR4/4)7層や9層に類似するが. 砂をより多く含む.

図5 美通遺跡2021年度調査地点内の基本層序



土層断面図作図基準点の位置

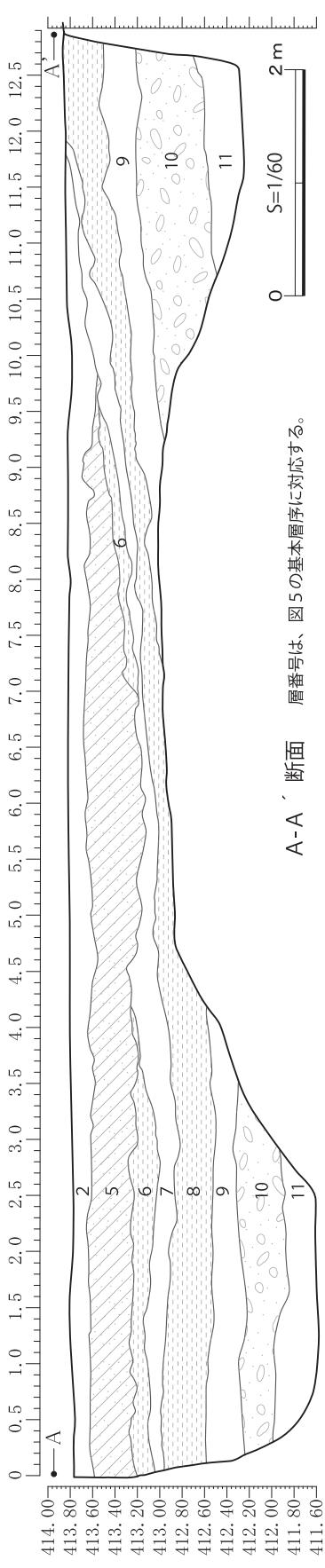


図6 美通遺跡2021年度調査地点内の土層堆積状況(1)

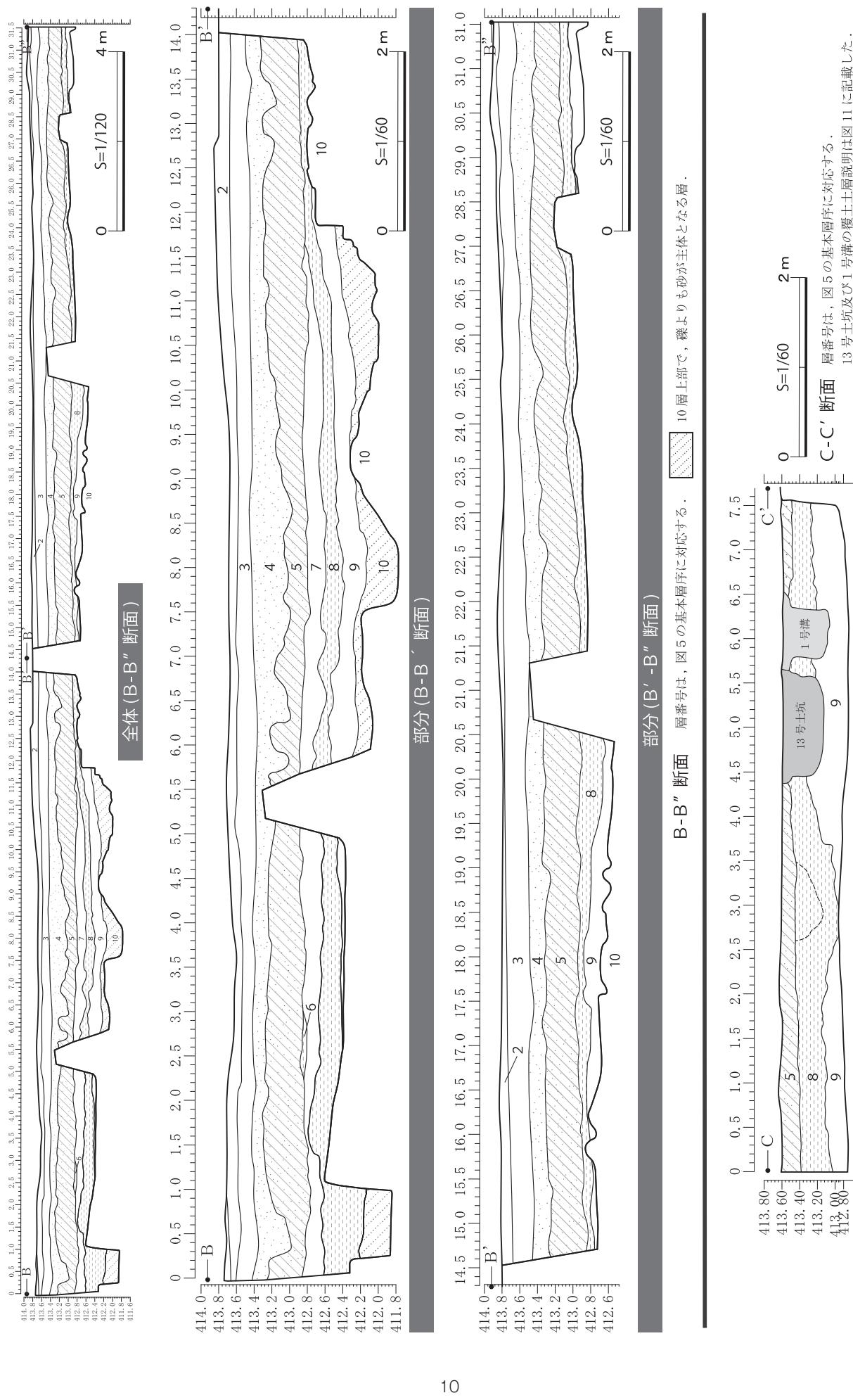


図7 美通跡2021年度調査地点内の土層堆積状況(2)

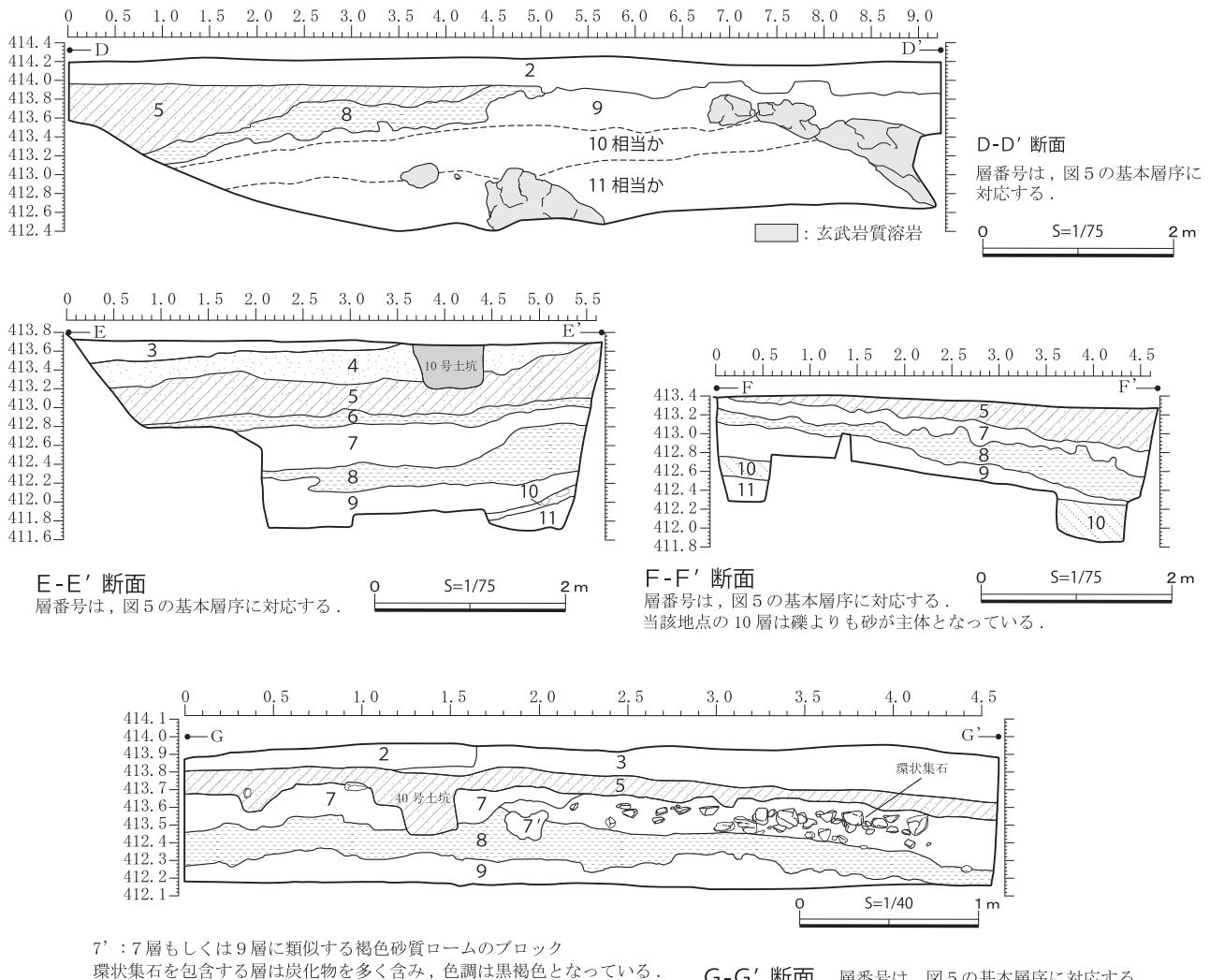
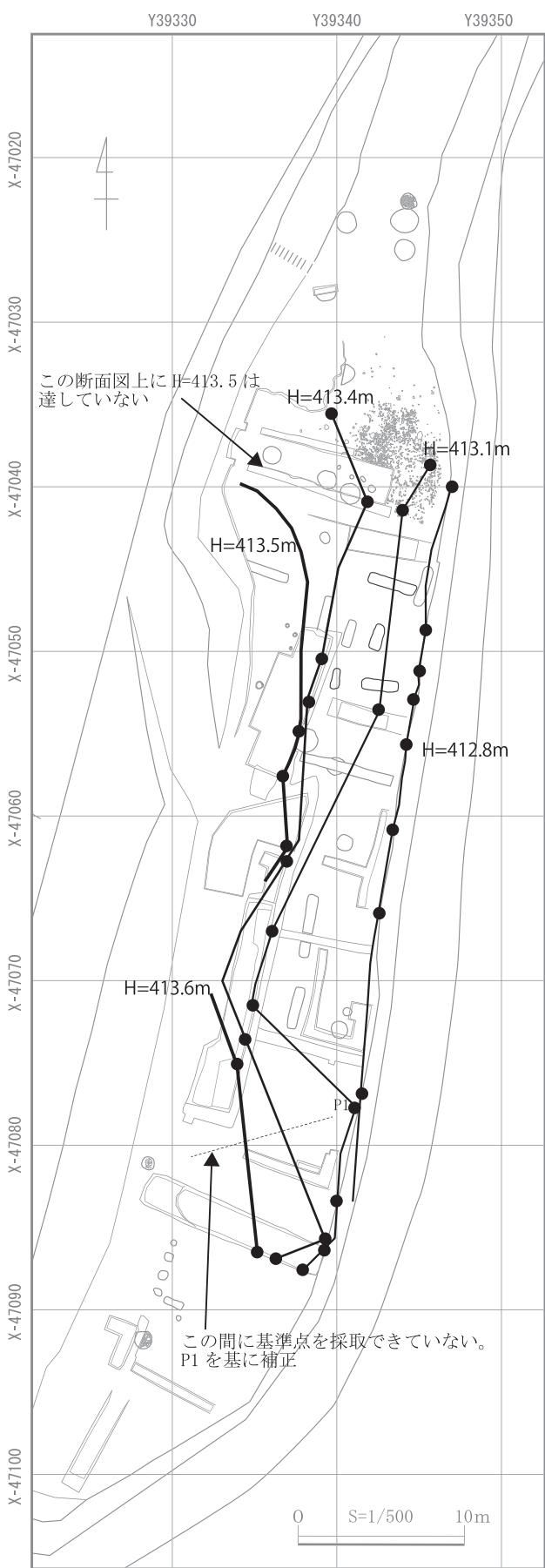


図8 美通遺跡2021年度調査地点内の土層堆積状況(3)

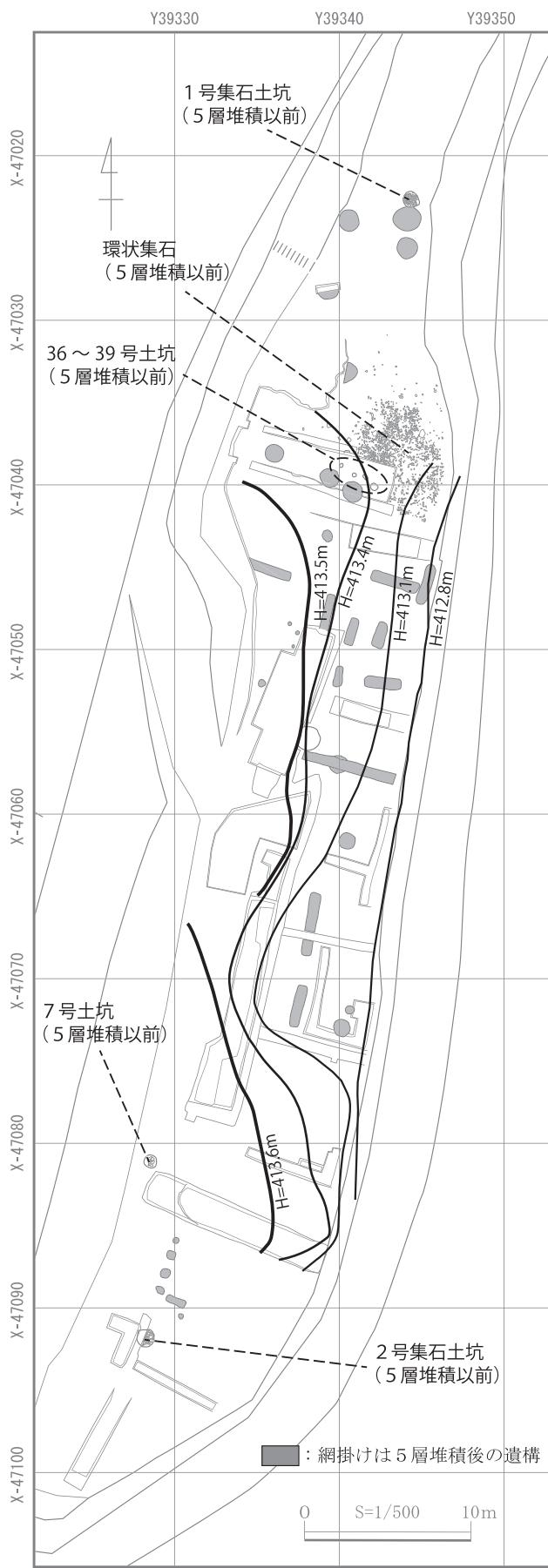
5層堆積以前の地形復元 5層は調査区の広い範囲で確認できたことから、その下面を対象として谷状微地形の把握を試みた。第1章に記載したように、当調査では調査区全体の地形の変化を把握するために南北方向2系列(図6:①B-B'', D-D' の一部, ②D-D' の一部, A-A'', C-C'', H-H'' の一部, G-G' の一部)、東西方向5箇所(図6:D-D', E-E'', F-F'', H-H'', G-G')の地層観察地点を設定している(図6~8)。これを基に、各地点における5層下面の標高412.8m、413.1m、413.4m、413.5m、413.6m点を繋いでいき、等高線を作成した。図9左は各計測点の位置を黒丸で示し、同標高点を直線で繋いだもの、右は参考とする点のない範囲を補正しつつ線を滑らかに調整したものである。この等高線により、調査区南側に小規模な谷状地形が朝日川に向けて展開している様子がわかる。基本層序の10層はこの谷の最深部にあたる。10層の中でも特に深いエリアを卷頭図版7に示している。10層はこの特に深い範囲で砂礫層として堆積しているが、それ以外では砂やシルトとなる。

遺構分布との関係 5層堆積以前の遺構は2つの集石土坑と環状集石、7号土坑、36~39号土坑のみである。少ない遺構数の中での傾向ではあるが、いずれも谷状地形外に構築されている。5層堆積以前の遺物分布の傾向も前期後葉段階の土器群を除き、特定の時期の土器がまとまりをもって分布する事例は谷状地形外にみられる傾向がある。

これに対し、4層堆積以降に形成されたと考えられる各種土坑は、谷状地形と無関係に分布する(図9右側、網掛けの遺構)。各遺構の形成時期やその用途が不明であるため分布の要因については断定できないが、傾向として5層形成以前と以後の遺構分布傾向に違いが認められる。5層は底面が谷状地形の形状を反映しているのに対し上面は(一部上層に削平されているとはいえる)下層に比べて水平に堆積している。5層を主に構成する富士山給源の火山碎屑物により谷状地形が概ね埋没したこと示しており、5層以降に形成した遺構は谷状の旧地形と無関係に構築された可能性がある。



土層断面上から採取した等高線作成の基準点



左図を基に作成した5層下面段階の等高線

図9 美通遺跡2021年度調査地点内の層序と5層下面段階の地形

第3節 発見した遺構

(1) 概要

美通遺跡2021年度調査地点で発見された遺構の種別には、①概ね正円の土坑、②短辺に対して長辺が少なくとも3倍以上の長さのある土坑、③溝跡、④集石土坑、⑤環状集石がある。本書では①をその規模を問わず円形土坑と呼称する。②は從来「溝状遺構」などとよばれてきたものである。円形の土坑と比べて溝状に細長い平面形をもつが、いわゆる溝のように排水機能や、土地を区画するといったあり方を示さないことから、細長い平面形の土坑という意味で本書では「長形土坑」とする。当調査で発見された遺構には遺物を伴うものが少なく、ほとんどの遺構の時期比定が困難である。ただし、検出された層位や覆土の特徴から、基本層序の5層(図5) 堆積以前に形成された遺構と、5層堆積直前に形成したもの(遺構覆土が5層であるもの)、5層堆積以降に形成したもののが3つの相対的な時期に分けることができる。5層中に含まれる土器のうち最も古いものが層下部で出土した曾利Ⅱ式土器である。近しい富士山の噴火には曾利IV式段階のものがあり、時期差はあるが、5層を主に構成する火山碎屑物は曾利式段階に富士山から噴出したものと想定した。

遺構の平面分布状況と各遺構の名称は図10に示した。各遺構別の実測図は図11から20に掲載した。遺構分布と旧地形の関係は第2節に記載したとおりである。谷状地形以南は2層による削平が著しいエリアであり、深さの浅い遺構は消滅した可能性もあるが、それでも遺構分布が希薄である。個々の遺構の種別による分布の特徴は、以下の各項目に記載する。

(2) 長形土坑(図11~14、写真図版7~9)

平面形が隅丸方形で短軸に対して長軸が著しく長い特徴がある。長辺・短辺の長さ、深さ、南北に対する傾きの一覧を表2上段に示した。傾きは南北の軸を0°として右回りに計測した。短辺の長さが約60から65cmの間にまとまる高い齊一性を示すのに対し、長辺の長さの変異幅は大きい。長軸は南北方向を向くもの(9~18°の範囲)と東西方向を向くもの(96~109°の範囲(1号土坑は除外))の2グループに分かれる。すべての長形土坑が5層を掘削して形成していて、覆土はスコリアを含む黒褐色もしくは黒色土の単層で構成されている。当該遺構からは遺物は出土していない(図23で長形土坑上に点在する遺物分布は、遺構と無関係の層に含まれるもの)。

(3) 円形土坑(図11・14~17・19、写真図版7~10)

正円に近い平面形状の土坑で、全部で29基発見された。直径と深さの一覧を表2下段に示した。2号土坑から5号土坑が直線的に等間隔で検出されたほかは平面分布に規則性は認められない。平面形の大きさが著しく小形のものも一括して円形土坑と呼ぶこととし、ここで報告する。

2号土坑から5号土坑はおよそ同規模の平面規格・深さの土坑で直線的に等間隔に検出された。また、長形土坑である1号土坑の長軸がこれに直交する。また1号土坑から直角に折れた位置に6号土坑があり、これらが一連の遺構である可能性を示している。ただし、1号土坑が他の長形土坑と同類のものかはわからない。

表2 遺構計測表

番号	形状	長辺	短辺	深さ	傾き	番号	形状	長辺	短辺	深さ	傾き	番号	形状	長辺	短辺	深さ	傾き
1号	長形	1.22	0.40	0.16	116.2	14号	長形	1.27	0.45	0.08	10.9	18号	長形	2.53	0.61	0.20	18.7
8号	長形	2.54	0.61	0.32	14.4	15号	長形	2.23	0.64	0.26	96.8	19号	長形	(2.73)	0.57	0.27	109.9
10号	長形	3.81	0.60	0.50	9.8	16号	長形	1.57	0.67	0.24	10.9	25号	長形	(2.16)	0.51	0.04	13.6
12号	長形	1.64	0.58	0.22	9.8	17号	長形	2.96	0.63	0.46	108.5						

※ 傾きは南北軸を0°として右回りの角度を計測した。

番号	形状	長辺	深さ	番号	形状	長辺	深さ	番号	形状	長辺	深さ	番号	形状	長辺	深さ
2号	円形	0.41	0.10	13号	円形	1.42	0.30	28号	円形	1.24	0.42	36号	円形	0.24	0.03
3号	円形	0.58	0.14	20号	円形	0.41	0.08	29号	円形	1.08	0.48	37号	円形	0.24	0.06
4号	円形	0.49	0.16	21号	円形	0.15	0.06	30号	円形	1.08	0.12	38号	円形	0.36	0.12
5号	円形	0.35	0.08	22号	円形	0.22	0.07	31号	円形	(1.28)	0.38	39号	円形	0.45	0.12
6号	円形	0.30	0.08	23号	円形	0.19	0.08	32号	円形	(1.24)	0.36	40号	円形	0.33	0.24
7号	円形	0.71	0.24	24号	円形	1.07	0.36	33号	円形	1.32	0.28				
9号	円形	0.50	0.12	26号	円形	1.03	0.18	34号	円形	1.26	0.20				
11号	円形	0.95	0.22	27号	円形	0.70	0.18	35号	円形	1.45	0.18				

28号から30号土坑は比較的同規模の土坑が近接して発見された事例の1つである。都留市教育委員会による試掘坑により一部が損壊していたが、底面付近と28号・29号土坑の覆土断面を観察できた。29号土坑からは縄文時代後期初頭段階の土器(図25:33・34、写真図版12:33・34)が底面よりやや上部の覆土中より出土した。都留市教育委員会による試掘坑の南側断面の観察により、28号と29号土坑は基本層序(図5)の5層を掘削して形成していることがわかる(図14下:H-H'断面、卷頭図版5中段)。同規模の土坑に13号土坑、35号土坑が、やや小規模な土坑に26号土坑、11号土坑、24号土坑、31号～34号土坑ある。26号土坑、9号土坑、11号土坑、24号土坑、13号土坑は基本層序の5層を掘削して形成された状況を確認できた。他の土坑も、覆土にスコリアを含むことから5層以降に形成されたものと判断できる。また35号土坑を除いていずれも土器を含まない点からも、28号土坑との時期的な関連は不明である。35号土坑からは底面直上から弥生時代中期の壺形土器が発見されたことから、土器と同時期の遺構であると判断した。壺形土器は胴部下半が欠損していたが、上半部の遺存状態は良好であった(図26、卷頭図版5、写真図版10、13)。なお、33号土坑からは覆土中間程度の高さから石斧が1点(図25:41、写真図版13:41)と剥片1点が出土した。

9号土坑、20号土坑、27号土坑、40号土坑は、さらに小規模な土坑である。40号土坑は覆土が基本層序の5層である(図8 G-G'断面、卷頭図版5上段写真手前の土坑)。27号土坑からは縄文時代後期に帰属すると思われる土器が出土した(写真図版9、図25:37、写真図版13:37)。

36号から39号土坑と、21号から23号土坑は平面規模の極小規模な土坑である。これらには規則的な配列はみられないものの、同規模の土坑がそれぞれ前者と後者とでまとまって分布している。36号から39号土坑の覆土はスコリアを含まない暗褐色土であり、5層形成以前の遺構であると考えられる。この上部には環状集石の南西部分が分布していたと想定されるが、試掘坑により欠損しており層位的関係を検討できない。

土坑底面から礫が検出された7号土坑については(5)集石土坑関連に記載する。

(4) 溝跡(図15、写真図版9)

東西に延びる1号溝跡の1箇所のみ検出された。全体にわたり、下端に対して上端がややオーバーハングしている。24号土坑を壊して形成されている。

(5) 集石土坑関連(図17・18、卷頭写真4、写真図版4・5)

円形土坑内いっぱいに被熱した礫が充填されている遺構を集石土坑としたが、円形土坑底面からのみ礫が検出された7号土坑も覆土には炭化物が多く含まれる層があり、関連する遺構としてここに記載する。

1号集石土坑　長径1m、深さ0.3m程度の円形土坑から672点の礫が検出された。南東隅に比較的大きな横長の礫1点が配されている。礫は土坑底面まで間断なく充填されていた。礫間の空隙には炭化物を多く含む黒色土が堆積している。焼土は形成していない。礫の石材組成は大多数を安山岩と礫岩が占め、玄武岩、溶岩、花崗岩がわずかに含まれる(第4章表5)。安山岩としたものの中には玄武岩と肉眼観察での判別が難しいものがあり、安山岩、礫岩、玄武岩の組成比は環状集石や2号集石と同様の傾向となる可能性がある。重量分布は最も軽いものから1,506gまでの間に集中し、それ以後2,329gまで緩やかに連続する(第4章図29右のグラフ)。前述の南東隅の横長の礫は重量が突出しており、4,000gである。これは環状集石の重重量の礫の一群(3,700g以上)と同等の重さである。礫の大多数には赤色化、煤の付着、火燐ね、クラックの形成といった被熱痕がみられるが、破損により礫形状が著しく損壊しているものは比較的少なく、残存率が80%以上の礫の割合は42.3%と、環状集石(5.4%)と比べて圧倒的に高い(図32右表・グラフ)。

2号集石土坑　長径1m、深さ0.4m程度の円形土坑から413点の礫が検出された。土坑は平らな底面中央に小さな浅い掘り込みがつくられるような有段の形状となっている(図18:d-d', e-e'断面)。1号集石土坑と同様、土坑内全面に礫が間断なく充填され、礫間の空隙に炭化物を多く含む黒色土が堆積していた。土坑内の中央には、特に炭化物が密集して堆積する面が形成されていた。写真図版5の上段2枚の写真は、この中間の炭化物密集面の状態を撮影したものである。中層の炭化物密集面は、土層断面にも反映されている(図18:c-c'断面、写真図版5:上から2段目右列)。中層の炭化物密集面にも土坑底面にも焼土は形成していない。礫の石材組成は安山岩が最も多く、礫岩、玄武岩、溶岩がこれに続き、花崗岩も1号集石土坑や環状集石と比べて著しく多い(第4章表5)。前述のように1号集石土坑と2号集石土坑の安山岩、礫岩、玄武岩の合計が占める割合はほぼ同等のものであるが、2号集石土坑中の溶岩の比率の高さが際立っている。縄文人による石材の選択性を反映したものか(第4章

参考)。当該土坑内の礫にもそのほとんどに1号集石土坑内の礫と同様の被熱痕がみられる。重量分布は最も軽いものから2,020gまでの間に集中し、2,350gから3,100gまでにもう1群、そして大きく離れて3,700gから6,400gまでの重重量の1群が分布する(第4章図29右のグラフ)。重重量の一群は、環状集石における重重量の礫の重量分布域に共通する。残存率80%以上の礫の割合は37.3%で1号集石土坑よりも低いが、環状集石(5.4%)と比較すると、やはり高い割合であるといえる(図32右表・グラフ)。

7号土坑 長径0.8m、深さ0.25m程度の円形土坑の底部から14点の礫が敷き詰められるように検出された。集石土坑のように土坑内すべてを礫が充填するものではないが、礫が被熱している点や覆土が多量の炭化物により黒色、暗褐色を呈する点など、集石土坑との機能的関連を窺わせる特徴がある。2号集石土坑の土坑底面から中層の炭化物集中層までの様相と関連するかもしれない、集石土坑の形成過程を良好に残す事例の可能性がある。

(6) 環状集石(図19・20・22・29～33、巻頭図版3、写真図版2・3)

規模と形態 調査後半段階、G9グリッド内で、広い範囲での極めて密な礫分布が明らかになったことをきっかけに、直径約7.5mの範囲内に多量の被熱した礫が密集する当該遺構の存在が判明した。図19は当該遺構検出段階の礫外形を写真測量により図化したものである。この段階での礫エレベーションを図19・20に示した。a-a'、b-b'、d-d'の各断面はいずれも重重量の礫を含めた礫分布形状を捉えるためのものである。c-c'断面は、右半分が礫残存率80%を超える石材で円礫の形状をよく残す一群、左半分が破損率の高い礫で角礫状になっている一群であることを示している。残存率80%以上の石材が密集する傾向については、以下の項目と第4章で詳述する。礫全点の分布を図20に示した。当該遺構は南東に向けて傾斜した地形に立地しているため、全点を対象に垂直分布図を作成すると傾斜分も反映してしまう。そこで幅0.5mの範囲を対象として垂直分布図を作成した。平面分布では特に西側から北側にかけて最も高い密集がみられる。これに次いで、東側と南側に礫が密集する。礫の密集にはより細かな単位があるようにもみえる。例えば写真図版4上段の2枚には円形の礫の密集がみえる。直径は概ね1m程度で、当調査地点で発見された2つの集石土坑と同規模である。このことから、集石土坑が集積して当該遺構が構成されている可能性を想定した。

当該遺構の中央部は特に礫の分布が希薄である。この傾向は垂直分布図にも表れている。このことから当該遺構は礫が環状にめぐるものと判断し、名称を環状集石とした。

礫の諸特徴 3250点の礫が検出された。大半に1号集石土坑や2号集石土坑内の礫と同様、被熱痕がある。石材組成は安山岩、礫岩、玄武岩が大部分を占め、溶岩、花崗岩、砂岩・泥岩がわずかに含まれる(第4章表6)。安山岩、礫岩、玄武岩の割合の高さは1号集石土坑、2号集石土坑と同じ傾向をもっている。礫重量は最も軽いものから1,969gまでの間に最大20g程度の重量差で密集し、約70gの断絶後2,138gから3,100gまでより緩やかに連続する。そして3,700gまで600gの断絶の後、19,000gまで重重量の1群が分布する(第4章図29右側のグラフ)。同図左側の平面図は、重重量の礫の平面分布とその重さを示したものである。このうち最も大形である19,000gの礫は図30に図示した台石で、検出段階で上面になっていた平坦面に摩滅痕がみられる。これら重重量の礫も被熱している。前述のように当該遺構が複数の集石土坑が集積したものであった場合、また重重量の比較的大形の礫が1号集石土坑における南東端の大形礫のように各集石土坑と対応関係をもつ場合、重重量の礫分布が個々の集石土坑の位置を間接的に示すと想定し作成したのが図29左図である。残念ながら礫の密集と重重量の礫分布とは明確な対応関係はみられなかった。環状集石を構成するであろう個々の集石を捉えるための検討は、集石ごとの石材選択傾向の違いを想定した分析と、集石ごとの使用頻度の違いが礫破損率の差に反映していることを想定した分析によって実施した(第4章)。両者とも環状集石が1号・2号集石土坑のような個々の集石群によって構成されていることを示す結果となった。

出土土器と形成時期 環状集石の範囲からは神之木台式を含む縄文時代早期後葉の条痕文系土器と中期後葉の曾利II式土器、後期前葉の土器が出土している。このうち中期以降の土器はいずれも5層以上に帰属する。環状集石と早期後葉の土器は6層以下に帰属することから、当該遺構は条痕文系土器期に形成したものと考えられる(第4章図22)。当調査で出土した神之木台式土器2点は、いずれも環状集石中から発見された。無文の条痕文系土器の型式は不明だが、神之木台式期に土器型式が限られるならば、早期末の遺構ということになる。

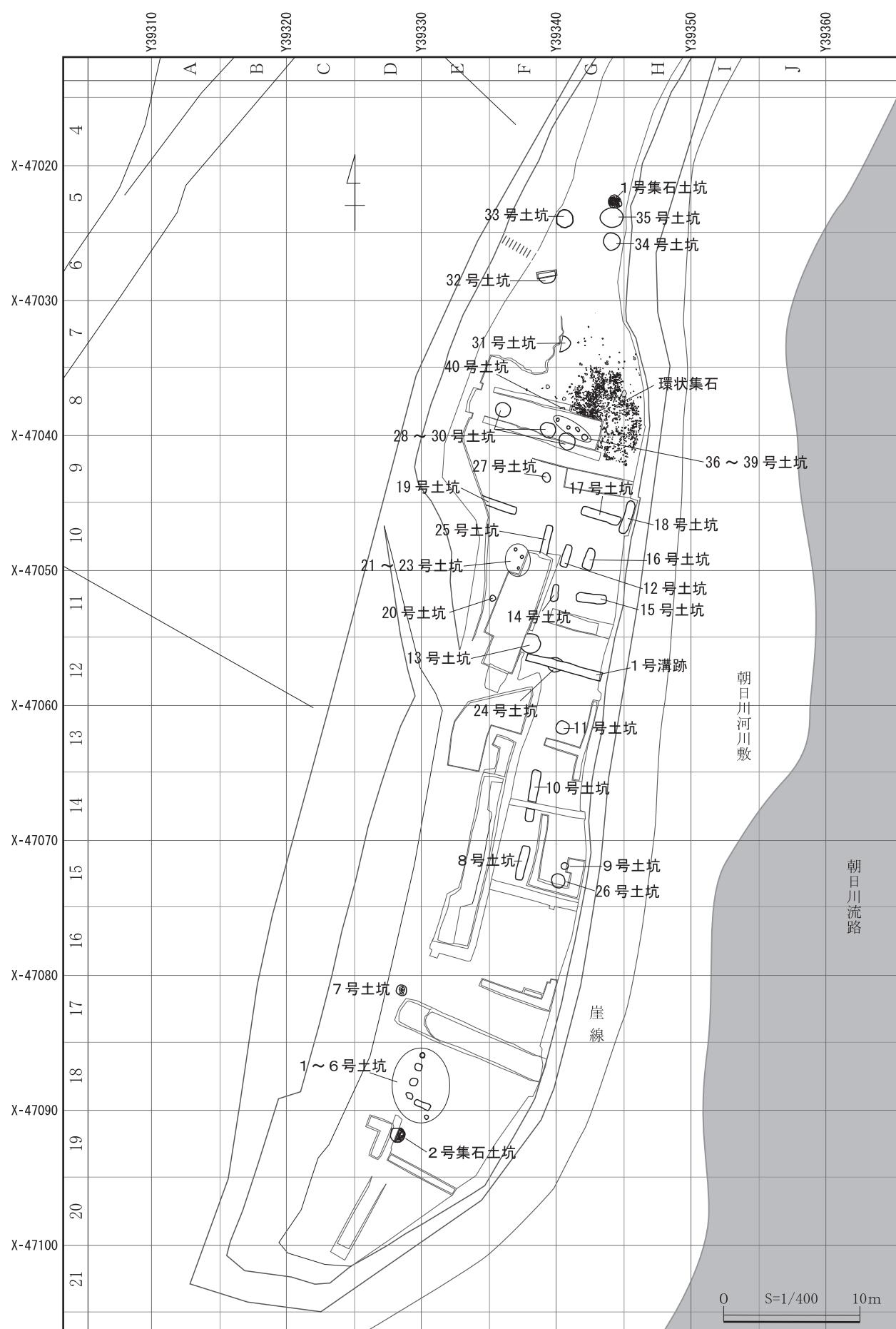


図10 美通遺跡2021年度調査地点遺構分布図

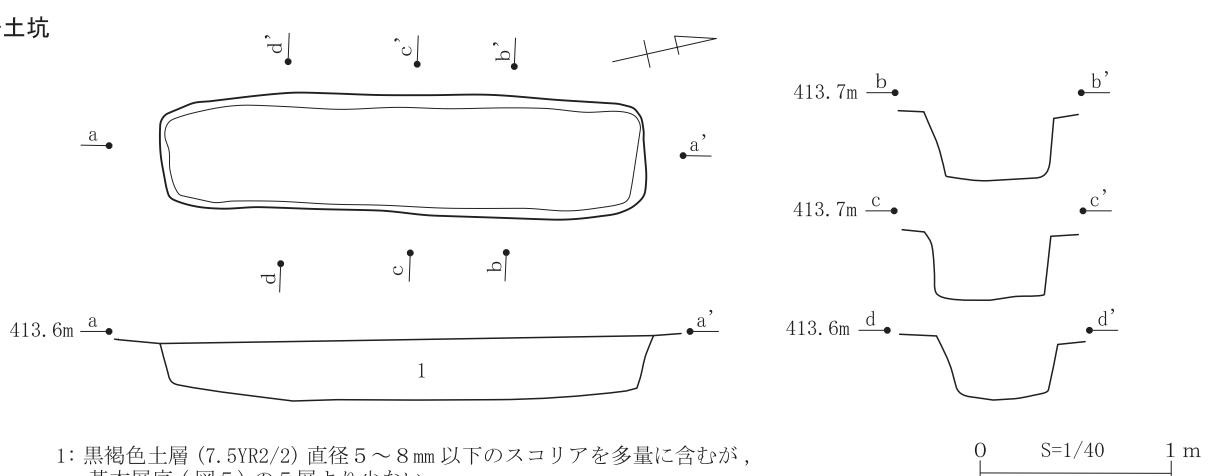
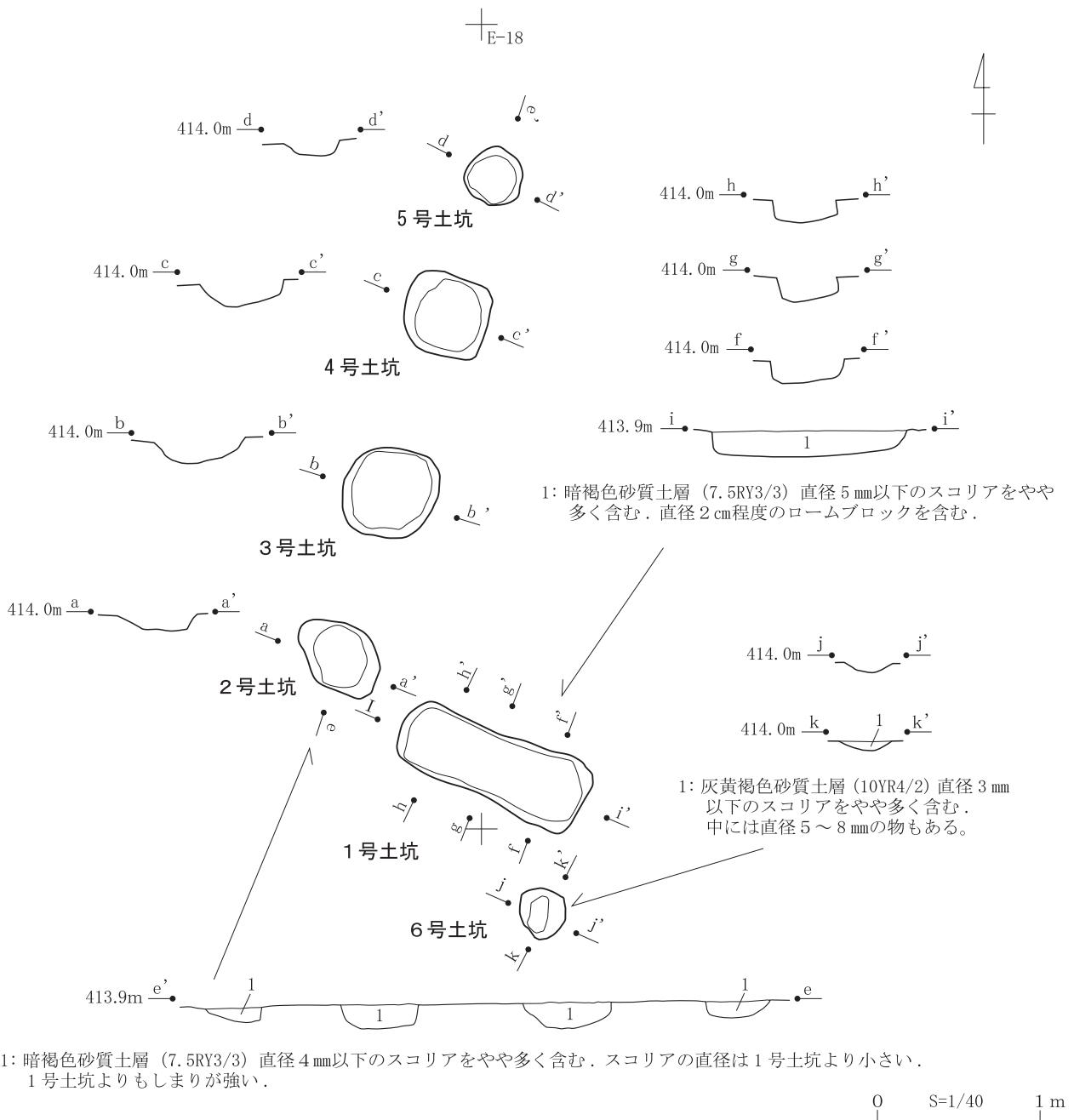
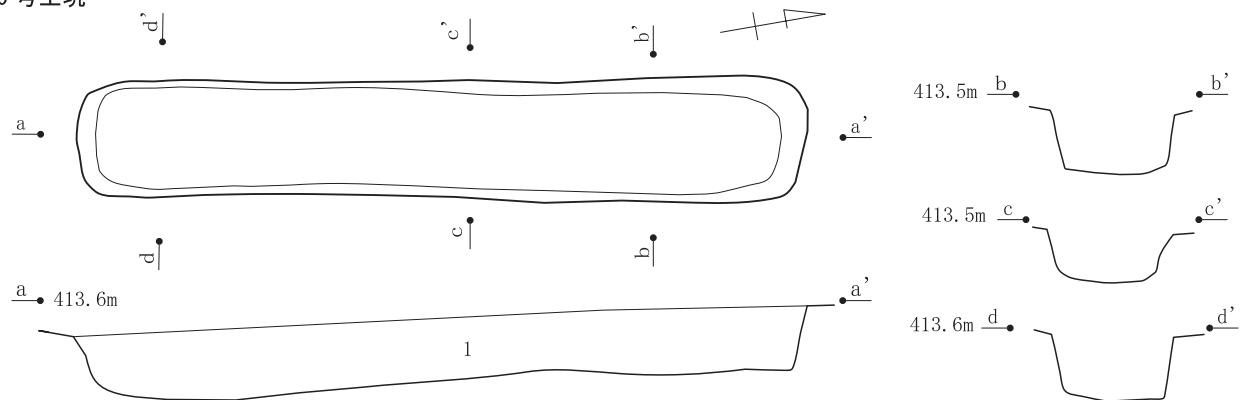


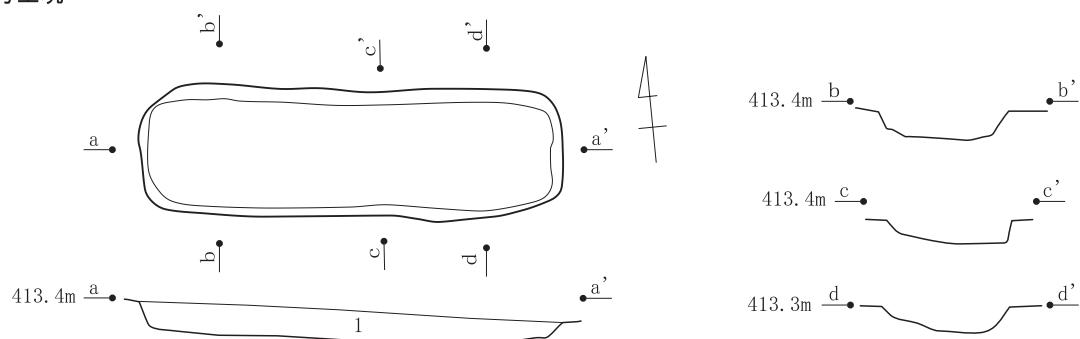
図11 土坑(1)

10号土坑



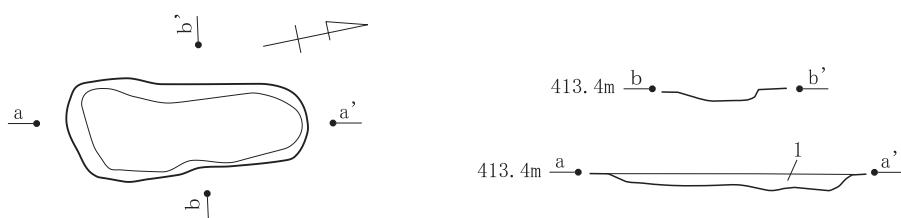
1: 黒褐色土層 (7.5YR2/2) 直径5~8mm以下のスコリアを多量に含むが、基本層序(図5)の5層より少ない。

15号土坑



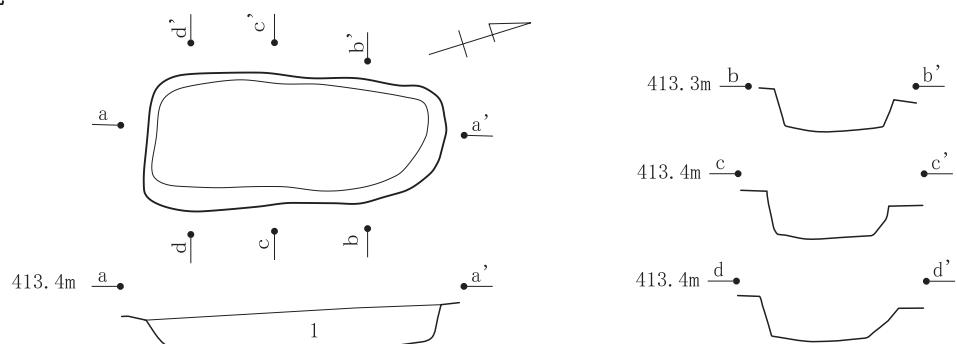
1: 黒色土層 (7.5YR3/2) 粘性・しまり弱い。スコリアを多く含むが、基本層序(図5)の5層より少ない。

14号土坑



1: 黒色土層 (7.5YR3/2) 粘性・しまり弱い。スコリアを多く含むが、基本層序(図5)の5層より少ない。

16号土坑

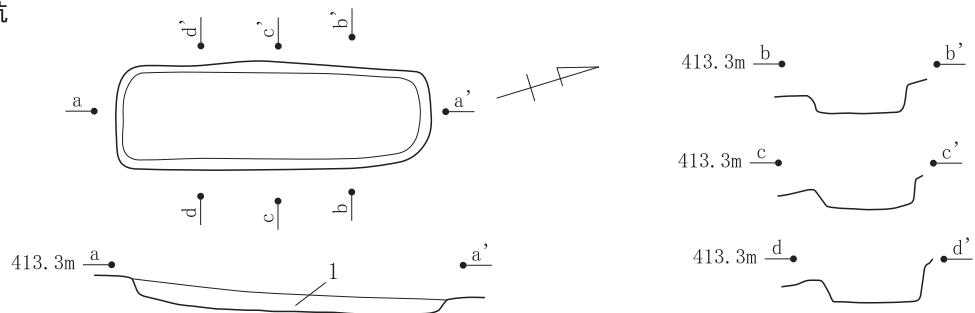


1: 黒色土層 (7.5YR3/2) 粘性・しまり弱い。スコリアを多く含むが、基本層序(図5)の5層より少ない。

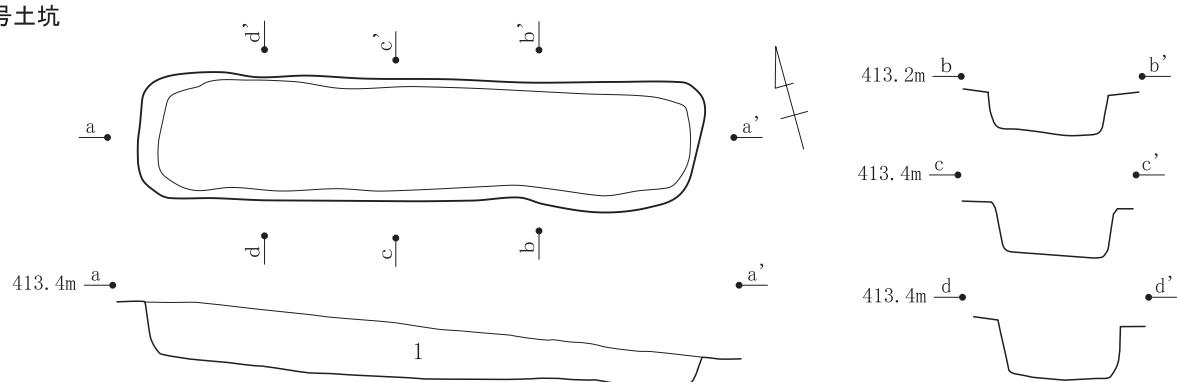
0 S=1/40 1 m

図12 土坑(2)

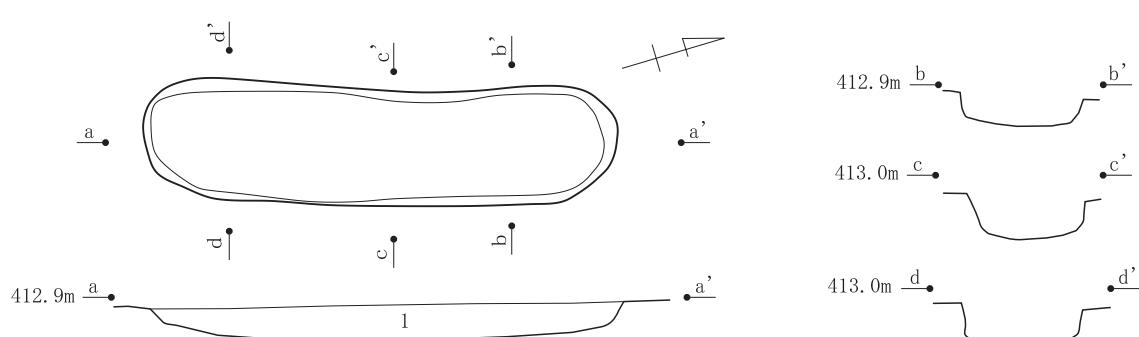
12号土坑



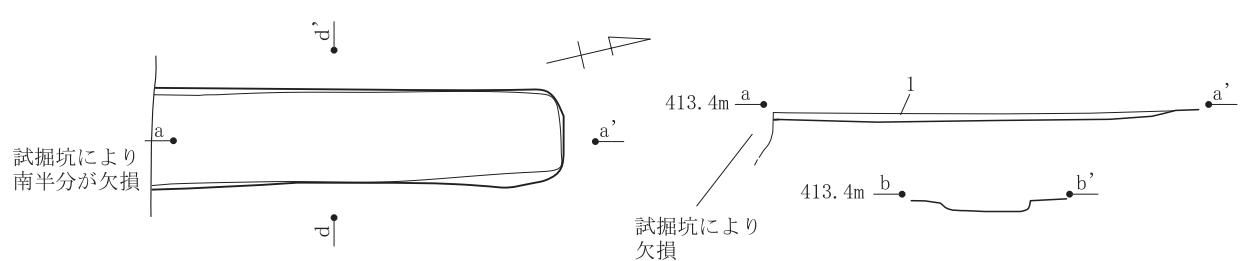
17号土坑



18号土坑



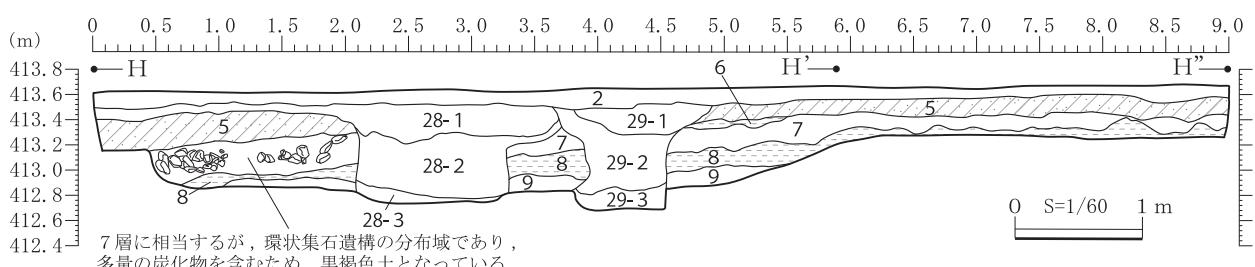
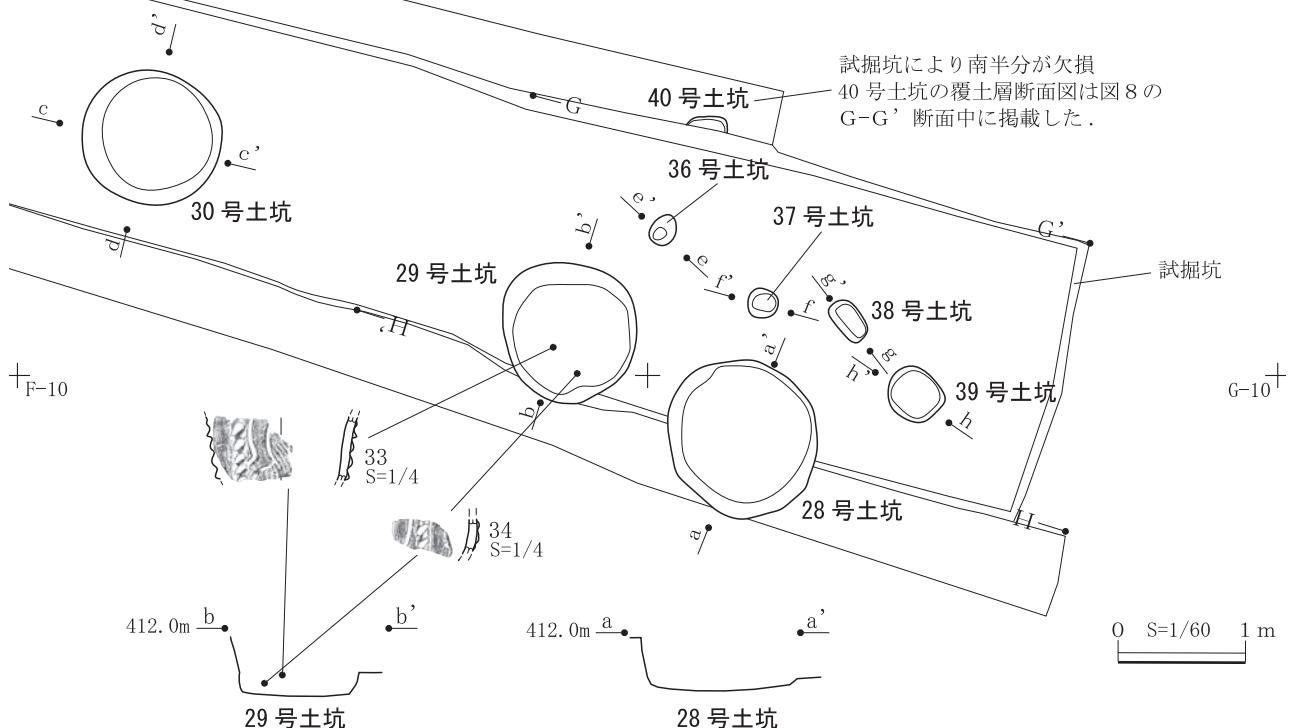
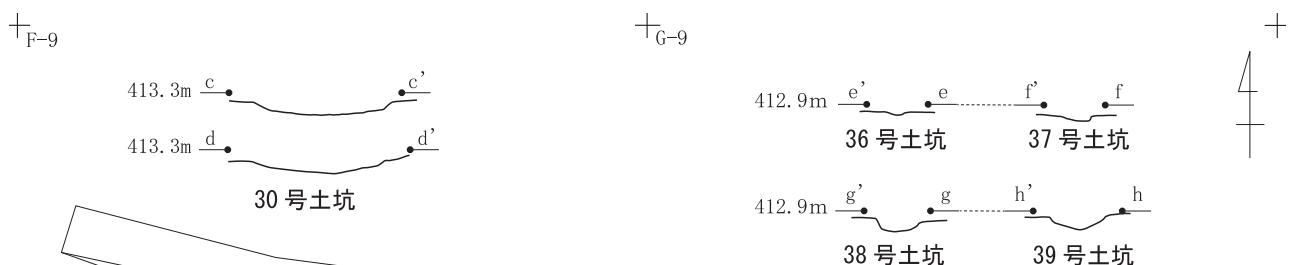
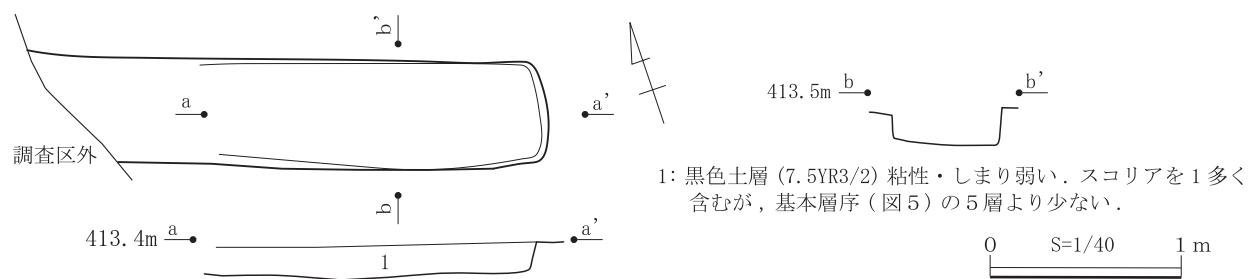
25号土坑



0 S=1/40 1 m

図13 土坑(3)

19号土坑



28号土坑覆土層 28-1: 黒褐色土層 (5YR2/2) スコリアを含むが、下層よりも少量である。
28-2: 黒褐色土層 (5YR2/2) スコリアを含む。

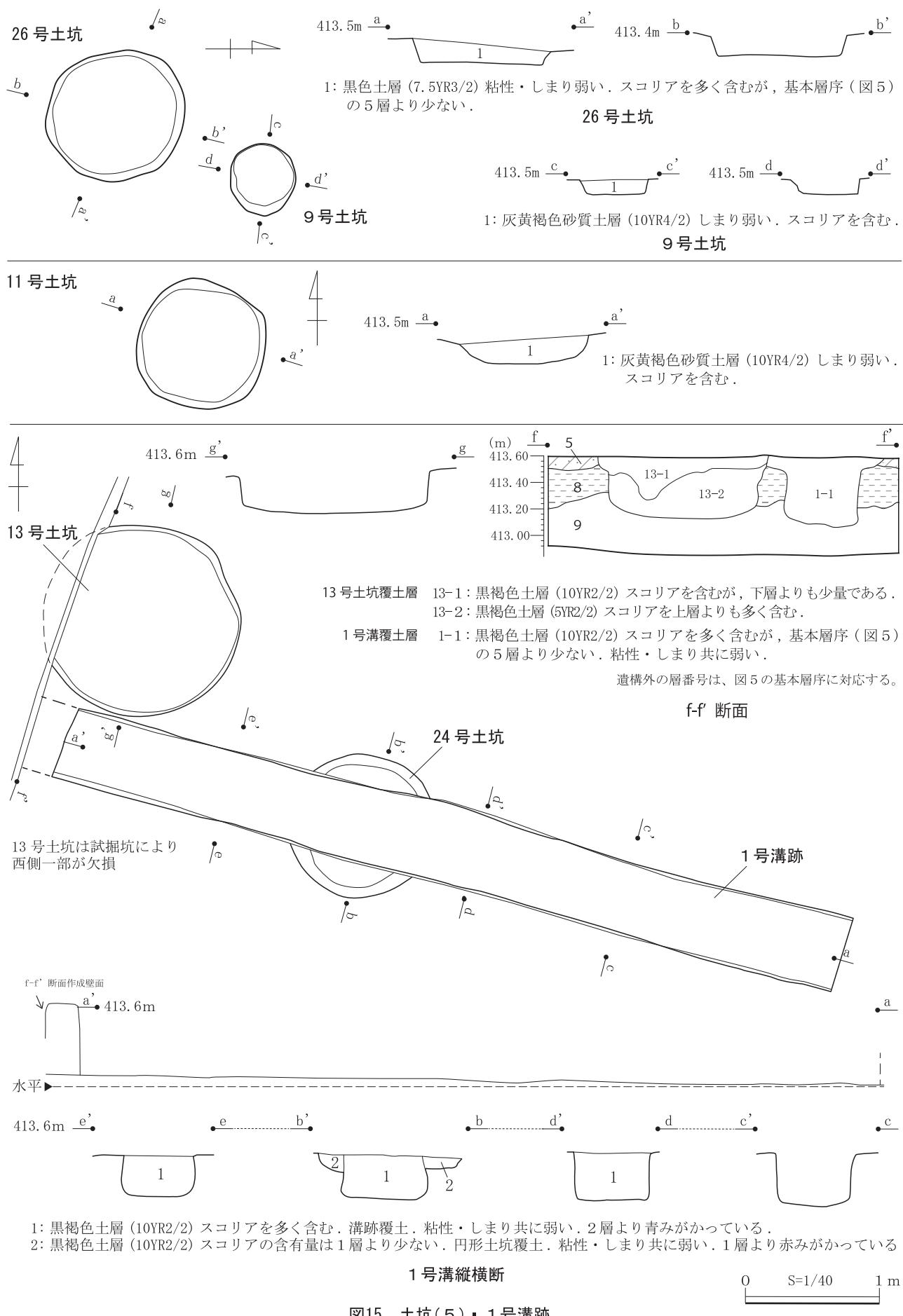
遺構外の層番号は、図5の基本層序に対応する。

28-3: 黒褐色土層 (7.5YR2/2) 直径4mm以下のスコリアを多量に含む。

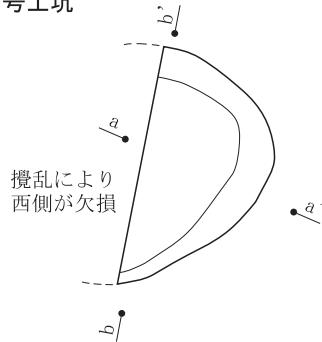
28号土坑覆土層 28-1: 黒褐色土層 (7.5YR3/2) スコリアを多量に含む。5層の再堆積層。
28-2: 黒褐色土層 (5YR2/2) スコリアを含む。
28-3: 黒褐色土層 (7.5YR2/2) 直径4mm以下のスコリアを多量に含む。

H-H'' 断面

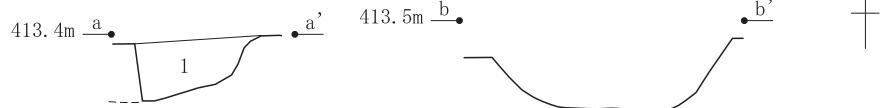
図14 土坑(4)



31号土坑

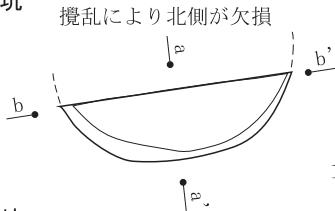


攪乱により
西側が欠損

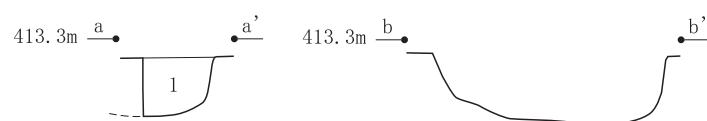


1: 黒褐色土層 (7.5YR3/2) スコリアを多量に含む。同様にスコリアを多量に含むにぶい黄褐色土が
ブロック状に混在する。

32号土坑

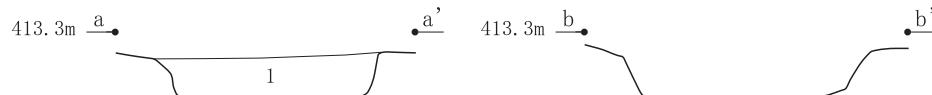
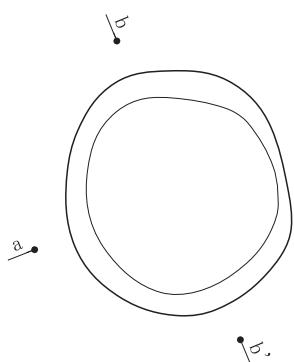


攪乱により
北側が欠損



1: 黒褐色土層 (7.5YR3/2) スコリアを多量に含む。同様にスコリアを多量に含むにぶい黄褐色土が
ブロック状に混在する。

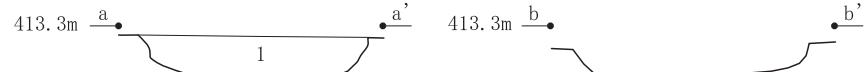
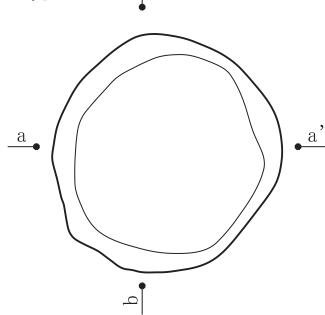
33号土坑



1: 黒褐色土層 (7.5YR3/2) スコリアを多量に含む。スコリアを多量に含むにぶい黄褐色土が
ブロック状に混在する。

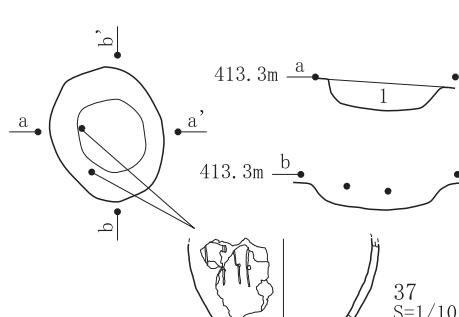
覆土中層から石斧（図25:41）と剥片が各1点出土した。

34号土坑



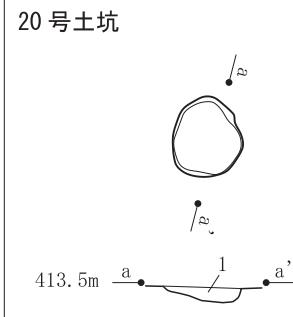
1: 黒褐色土層 (7.5YR3/2) スコリアを多量に含むが、5層よりも少ない。
スコリアを多量に含むにぶい黄褐色土がブロック状に混在する。

27号土坑



1: 黒褐色土層 (7.5YR3/2) スコリアを多量に
含むが、基本層序（図5）の5層より
少ない。直径2mm程度の褐色粒子を含む。

20号土坑



20～23号土坑覆土層 1: 黒褐色土層 (10YR2/2) スコリアを多く含むが、基本
層序（図5）の5層より少ない。粘性・しまり共に弱い。

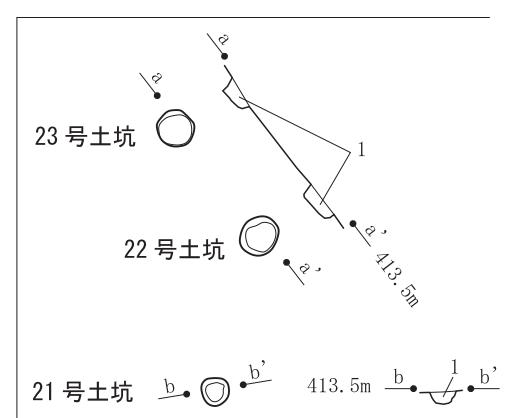
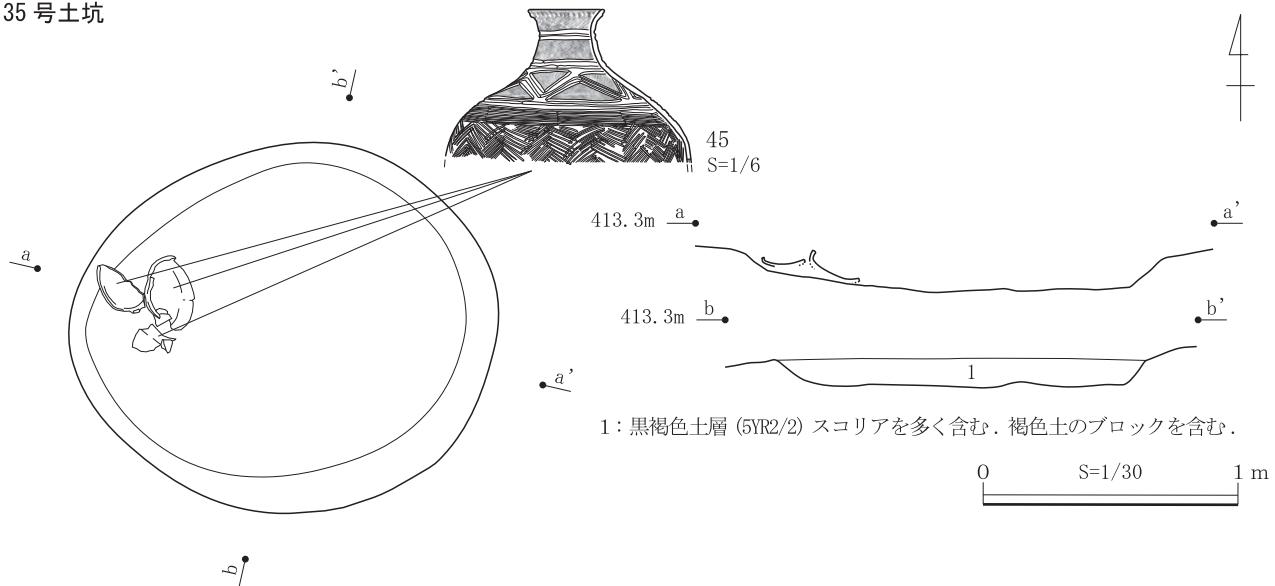


図16 土坑(6)

35号土坑



1: 黒褐色土層 (5YR2/2) スコリアを多く含む。褐色土のブロックを含む。

1号集石土坑

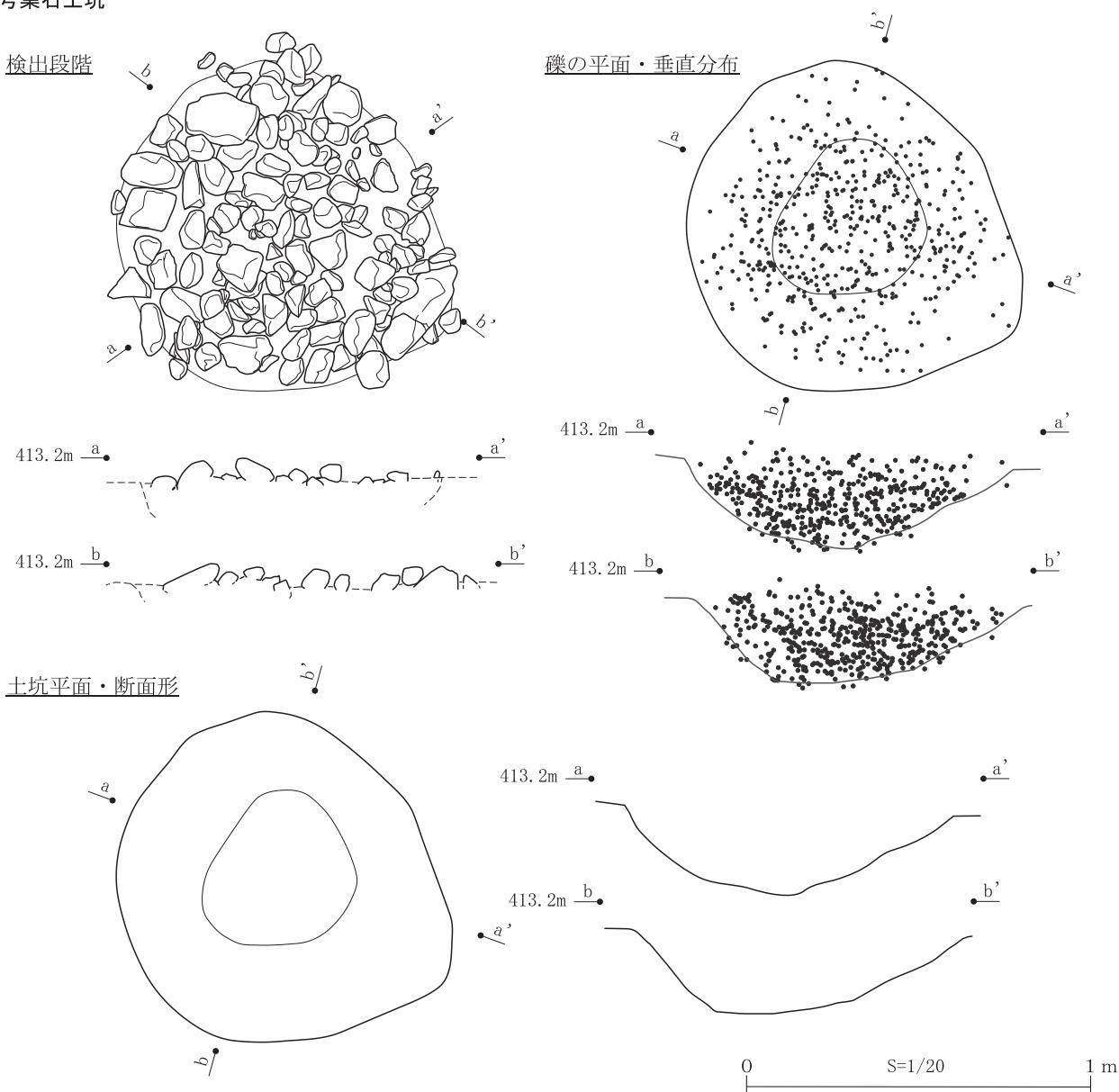


図17 土坑(7)・集石土坑(1)

2号集石土坑

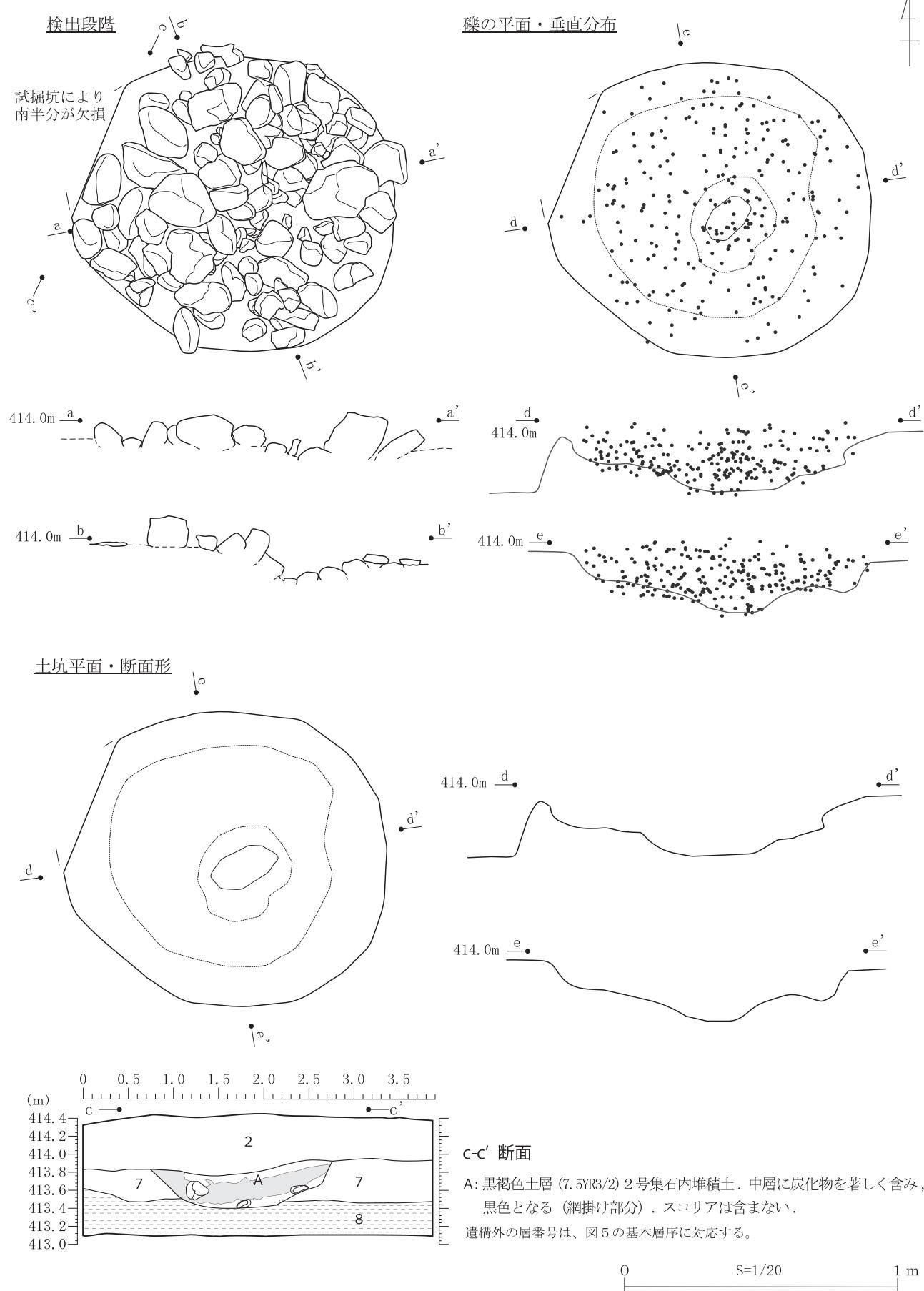
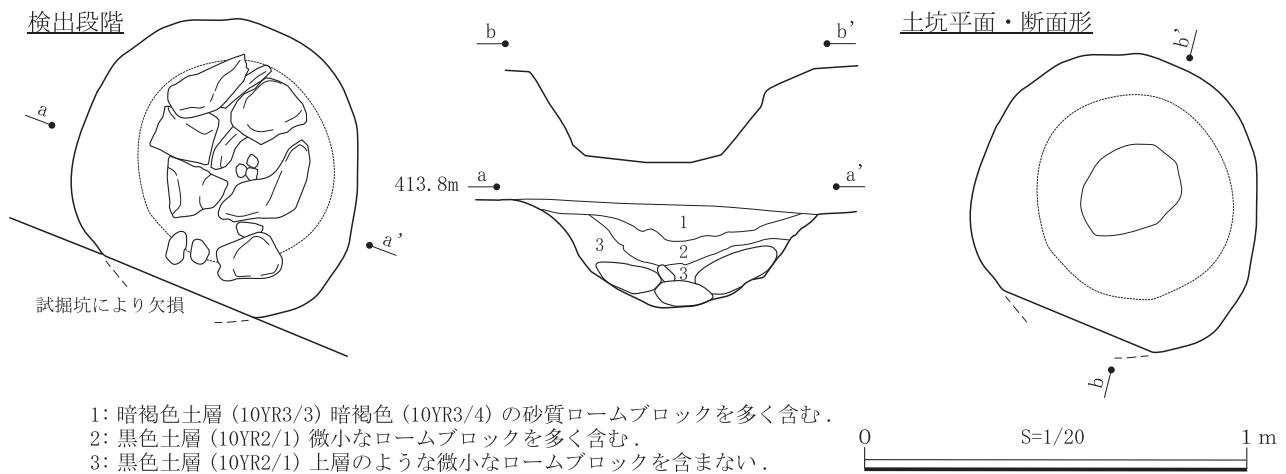


図18 集石土坑(2)

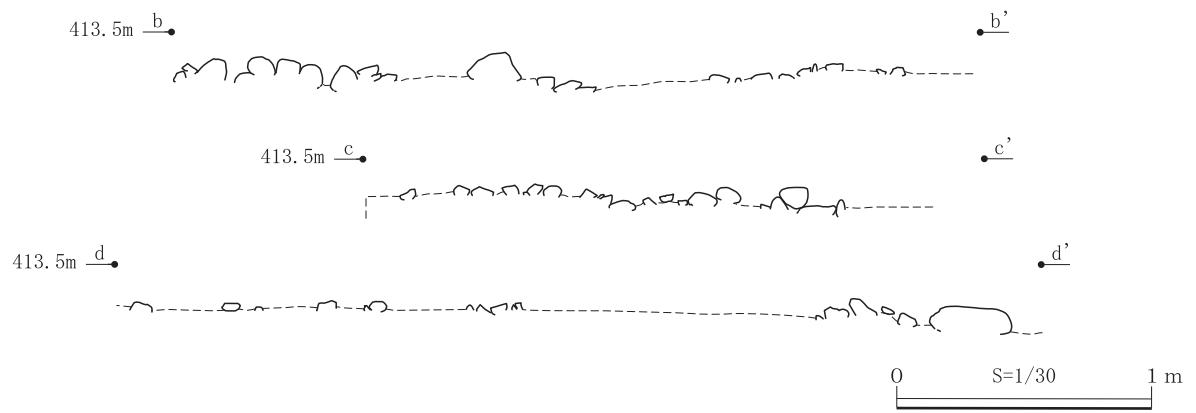
7号土坑



環状集石 検出段階



図19 土坑(8)・環状集石(1)



環状集石 磚の平面・垂直分布 ※出土遺物の分布は図 22 に示す。

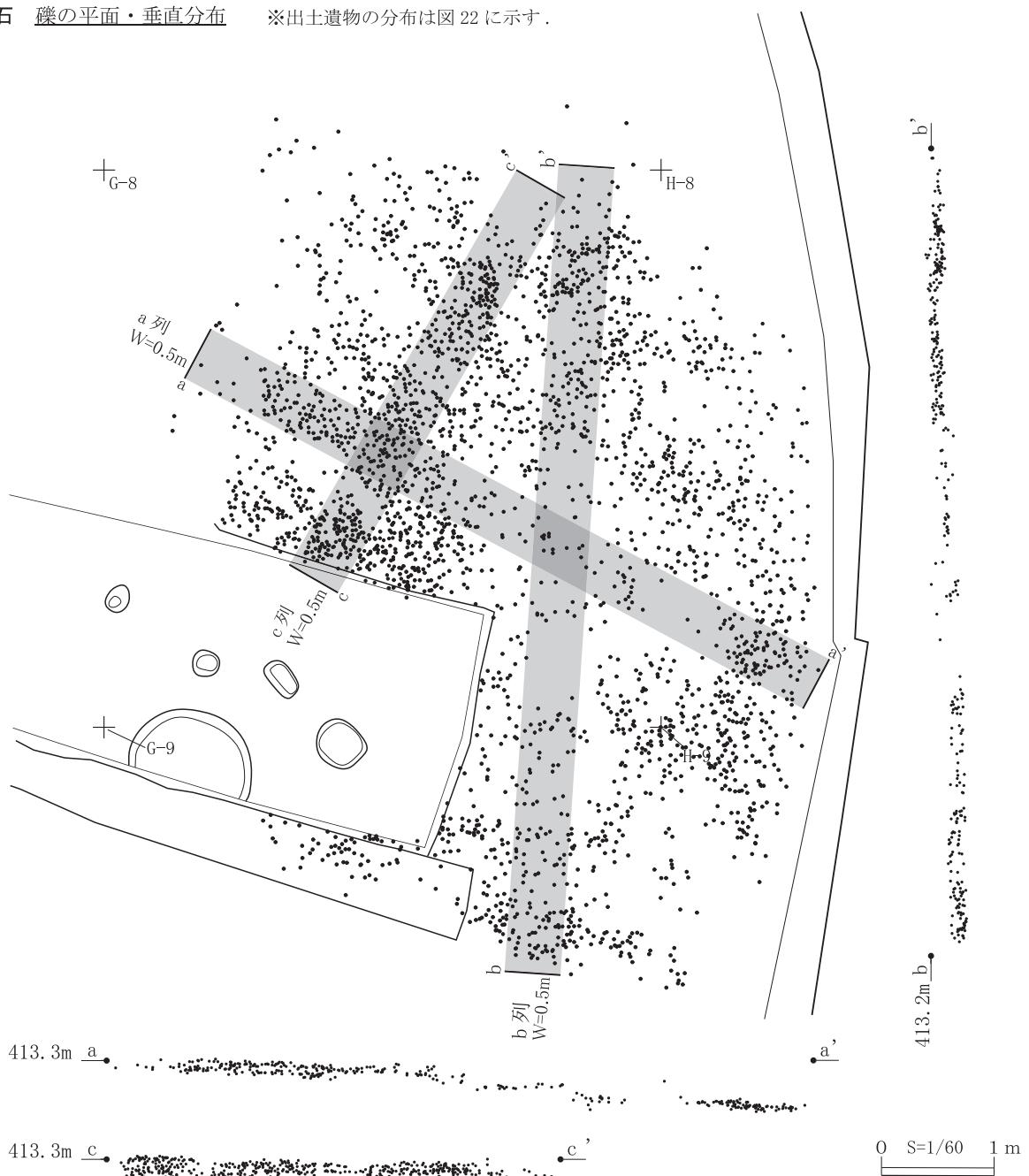


図20 環状集石(2)

第4節 出土した遺物

(1) 概要

縄文時代早期、前期初頭、前期後葉、前期末葉、中期後葉、後期、弥生時代前期、平安時代、中世、近世と多時期の遺物が発見されたが、大半が遺構外からの出土であった(図21)。遺構内出土の遺物は少なく、27号土坑(図12)、29号土坑(図13)の覆土から縄文時代後期の土器が、33号土坑覆土から石斧と剥片1点ずつが、35号土坑から弥生時代前期の壺形土器(図13)1点が発見されたほか、環状集石の分布域から縄文土器が複数点発見されたのみである。

遺構外出土遺物の平面分布傾向 遺構外出土遺物には、概ね時期ごとにまとまった平面分布の傾向がみられる(図23)。F 15・16グリッド付近に縄文時代前期後葉諸磯 b式期の深鉢や浅鉢の破片の散布、そのやや南側に縄文時代早期末打越式期の土器片の散布、G 11・12、F 12グリッド付近に縄文時代前期初頭下吉井式期の土器片の集中的な散布域が南北に2つある。縄文時代前期末十三菩提式期の土器片は調査区南側のF 19からE 20グリッドに多く散布するほか、中央付近のG 12、やや北側のF 10グリッドからも1点ずつ出土した。縄文時代中期や後期の土器片は調査区北半部のG 8グリッドからF 12グリッドの広い範囲に少量が散布している。

各時期遺物の層位別出土傾向 縄文時代中期後半以降の遺物は基本層序の5層もしくはそれよりも上層から出土する。縄文時代前期末以前の土器は、基本的に5層よりも下層特に6層から7層から出土する。いずれもそれよりも詳細な各時期と層位の対比は困難であった。5層の形成を境とする時期別の土器分布傾向が把握されたことと伴出土器を基に、7層相当段階に形成されたと考えられる環状集石の形成時期を、縄文時代早期後半条痕文系土器特に早期末の神之木台式土器段階であると結論した(第3節)。平安時代以降の遺物はいずれも近世以降の水田耕作土層である基本層序の3層から発見された。

(2) 出土遺物各説 1(縄文時代から弥生時代までの土器)

縄文時代早期後葉条痕文系土器以前の可能性のある土器(図24) 1は不鮮明であるが外面に右撫りの0段の条を巻いた絡条体によると思われる回転施文がみられる。2は条の間隔が極めて狭いが、胎土の特徴などから同一個体と考えられる。3は底部付近の破片で、右撫りの0段の条を巻いた絡条体が横位に回転施文されている。4は口縁部片である。口縁直下は無文で、その下に左撫りの無節縄文が右方向へ横位に回転施文されている。内面には右から左へ向けたやや右傾する横位のナデ整形痕がみられる。

縄文時代早期後葉条痕文系土器(図24) 5から7は外面に垂直に押し当てる貝殻腹縁文が施されている。貝殻圧痕には横走するのものと、斜行するものとがある。5・7は内面に条痕整形がみられる。胎土には纖維を含む。いずれも小破片のため文様構成は不明であるが、打越式と思われる。8・9はいずれも口縁の無文部の下に頂部に刻みをもつ隆帯が1条巡る。8は隆帯の下に横長の斜格子状の沈線が施されているが9ではなく、代わりに条痕整形がみられる。口唇部形状はいずれも平縁で、8は内面と外面の各エッジに連続的な棒状工具の押し当てが、9には平縁の平坦面に対するヘラ状工具による刻みが施されている。内面には頗著な条痕整形がみられる。胎土には纖維を含む。神之木台式に相当する。いずれも環状集石中から出土した。10は外面に擦痕状の整形が、内面に頗著な条痕整形がみられる。胎土には纖維を含む。11・12は尖底の土器の底部付近の破片である。胎土に纖維を含み、内面に縦方向に近い整形痕がある。11には外面に一部条痕がみられる。

縄文時代前期初頭下吉井式土器(図24) 13から18は、内面に条痕整形をもつ土器で、胎土に纖維のほか海面骨針を含む。卷頭図版6下段に13・16・18表面の拡大写真を掲載した。海面骨針に比較的大きなものと、極めて小さく、太さも細いものとがみられる。下吉井式は条痕文系土器に含まれるが、平面分布にまとまりをもつことから本書では別に記載する。13と14は当該土器の南北2つの集中散布域のうち南側(F 12、G 12グリッド)、15から18は北側(F 11グリッド)から出土したものである。13と14は口縁部付近から胴部上半にかけての破片で、幅2cm程度、断面三角形の横走する隆帯が添付されている。15は口縁部破片である。口唇部は平坦で棒状工具もしくは貝殻の押し当てによる刻みがある。あるいは擬口縁か。16は13・14と同様、口縁部付近から胴部上半にかけての破片である。隆帯の幅は約1.5cmで断面は三角形であるが、やや丸みを帯びている。

縄文時代前期前葉の土器(図24) 19は左撫りの単節縄文が左から右へ横位に施文され、胎土に多量の纖維を含む。内面は平滑によく調整されているが、光沢を伴うほどではない。

縄文時代前期後葉の土器(図24) 20は、波状口縁の下に横走する多截竹管状工具の連続刺突をもつ。諸磯a

式土器か。21は諸磯b式土器の破片である多截竹管状工具の連續刺突が3条(現存部)と無文部を挟んで1条横走している。そのさらに下部に無文部がわずかに残存している。22・23は諸磯式期の浅鉢の破片である。特に外面が光沢をもつほど平滑に調整されており、外面の器壁は有段である。21から23の胎土には直径1mm程度以下の石英と長石が多量に含まれる。

縄文時代前期末十三菩提式土器(図24) 24は幅2.5mmの半截竹管状工具による集合沈線を地文とし、幅3mmの隆線が添付され、竹管の連續刺突により加飾されている。集合沈線は右下に斜行するものと垂下するものがある。添付された隆線は横走している。25から28はいずれも縄文を地文として隆線を添付し、工具の連續刺突により加飾している。隆線の加飾には25はヘラ状工具、26から28には半截竹管状工具が用いられている。25・26・28の胎土には直径1mm程度以下の石英が顕著に含まれている。28はそれに雲母が次ぐ。長石の含有量は少ない。27は目視で確認できる鉱物が少なく、わずかに石英と長石がみられるのみである。また、27のみ内面が光沢をもつほど平滑に調整されている。地文の縄文はいずれも単節である。27のみ、原体が細い。28は左撫りの単節縄文を縦位に回転施文しているが、他はいずれも小破片であり回転方向が判別できない。

縄文時代中期後葉の土器(図25) 29から31は、曾利II式土器の口縁部破片である。接合関係にないが、形状、整形の状態、胎土、文様と施文手法、施文具一致の各特徴から同一個体の可能性が高い。29と30はいずれもやや内傾する平縁で、胴部上端の括れ部から外反し、口縁部上部でやや内湾する形状である。29から31のいずれも、内面は光沢をもつほど平滑に調整されている。外面には左撫りの1段の縄による絡条体を原体とした縦位の回転施文が施されている。この文様のうち29の左から3条目、上から1～6つ目までの節が、30の右から5条目、上から1～6つ目までの節に対応する。また、31の右端の条は30の右から5条目、上から3～5つ目までの節に、右から2条目は30の右から6条目、上から3～7つ目までの節に対応する。胎土には直径1mm前後の石英と長石が若干含まれるほか、金雲母が顕著に含まれている。32は加曾利E2式土器の胴部破片である。2本の異なる左撫り1段の縄を正撫りした2段の縄を用いて縦位に施文し、その周囲を沈線で方形に区画したうえ、周囲の縄文が磨り消されている。破片上部には胴部上端を示す横位の沈線が施されている。

縄文時代後期の土器(図25) 33・34は29号土坑より出土した。磨り消し縄文を伴う沈線区画が展開する。その後、垂下降帶が添付され、その上に断面円形の棒状工具による左傾する刻みが施されている。縄文は左撫りの単節縄文が概ね縦位に施文されている。胎土には雲母が顕著に含まれている。後期初頭の土器か。35は口縁部片である。口唇直下で若干肥厚する。口縁部直下に沈線による区画がある。後期初頭の土器か。36は胴部の括れ部と思われる。縦位の並行沈線と細い単節縄文の施文がみられる。後期前葉堀之内式期の土器か。37は27号土坑出土の胴部下半の土器片で、垂下する沈線が施されている。38はやや不規則な斜格子状の沈線が施されている。胎土に纖維は含まず、同じく斜格子状の沈線文をもつ8(神之木台式土器)とは異なるものである。39は沈線による施文があるが構成は不明である。40は右撫り単節縄文と沈線区画の磨り消し部が横位に展開する口縁部破片である。

弥生時代の土器(図26) 45は35号土坑より出土した弥生時代中期の壺形土器である。上半部のみ出土した。同土坑から出土した遺物はこの1個体のみである。胴部には集合沈線が鋸歯状に施され、その上部に肩部との境となる沈線が4条横位に並走する。肩部は5単位の鋸歯状の沈線が描かれ、その間を重点するように鋸歯状の沈線より上には逆三角形の区画が、下には正位の三角形の区画が配される。首部は2条の並行沈線で区画されている。口縁部直下には隆帶が添付され、右方向からヘラ状工具で加飾されている(部分写真1)。口縁部直下から首部、肩部にかけては左撫りの単節縄文の回転施文後に沈線が引かれ、肩部の三角形区画の外部が磨り消されている。器面の磨きは、特に肩部までが顕著である。胴部の鋸歯状の集合沈線は実測図上面観に示した▲点を始点・終点とし、右回りに施文されている。また、始点部付近には、鋸歯状沈線の描き足しがみられる(部分写真4)。肩部と胴部を区画する並行沈線は、胴部の鋸歯状の集合沈線よりも後に引かれている。肩部下段の正位の三角形区画は、左辺、右辺、底辺の順に引かれている(部分写真3)。上段の逆位の三角形区画は、概ね上辺と右辺が一筆書きされ、その後右辺が引かれるが、右辺が先行する場合や、全辺一筆書きされる場合もある(部分写真2)。

(3) 出土遺物各説2(石器)

調査区全体を通して石器の出土量は少なく、ここに掲載するもの以外は剥片が数点出土したのみである。この剥片からは刃部再生に関する痕跡や微細剥離、原礫面など、石器生産の段階を反映した情報は得られなかった。試掘調査においては黒曜石製の石鏃が1点出土している(森屋・服部2016)。41の石斧は33号土坑中から出土した。42～44の石斧は遺構外からの発見であるが局所的に集中して出土した。

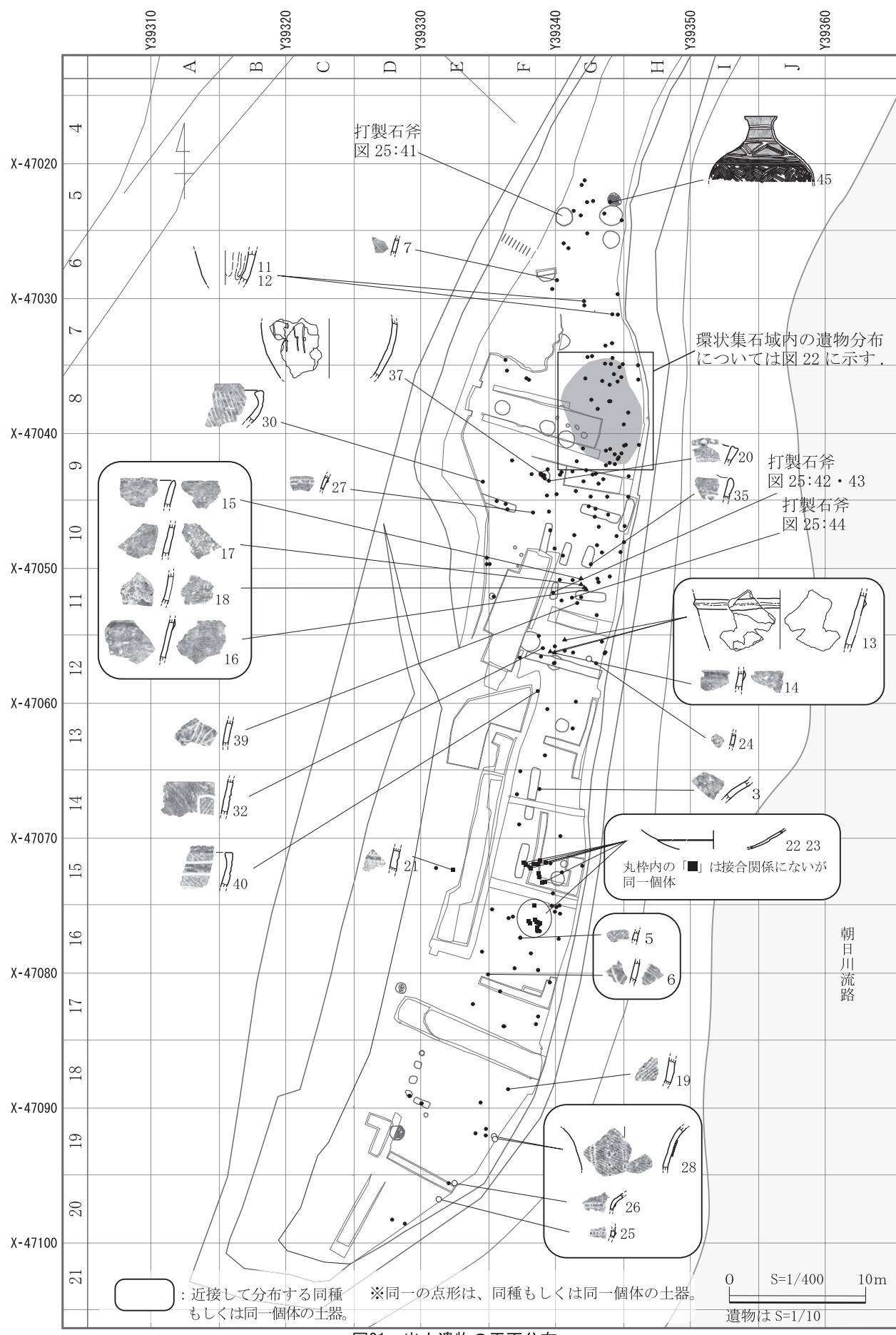


図21 出土遺物の平面分布

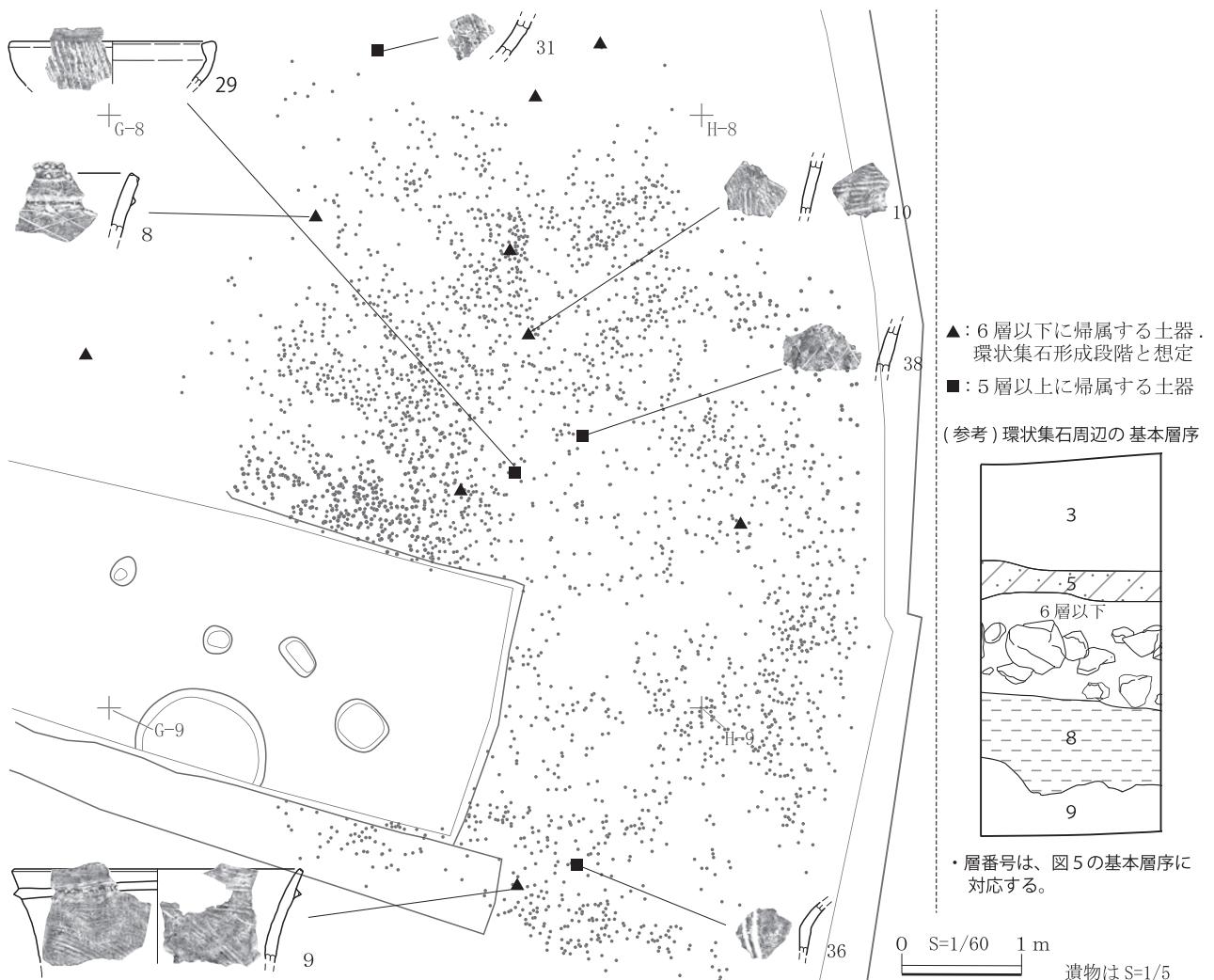


図22 環状集石周辺の出土土器平面分布

打製石斧(図25) 41は33号土坑の覆土から出土した。玄武岩製で、扁平な素材の外縁を両極打法により成形したものである。刃部周辺には顕著な摩滅痕がある。同土坑からは他に剥片が1点出土している。42から44は7層より出土した折損資料である。いずれも結晶片岩製で、両極打法によって成形されている。42から44は近接して分布していた(図21)。

台石(第4章図30) 環状集石内に分布する重重量の礫(第4章参照)の形状には扁平なものとそうでないものとがあるが、本資料は扁平で表裏が平坦である。全体に赤色化やクラックの形成、表面の劣化、火燐ねといった被熱痕がみられる。特に出土時の底面の劣化が著しい。出土時の上面に摩滅がみられる(図30実測図表面の網掛け範囲、写真)。よく摩滅しており擦痕はほとんどみられないが、長軸方向の擦痕がわずかに残っていた(図30拡大写真)。他の重重量の礫には被熱を除き、摩滅痕などはみられない。

(4) 出土遺物各説 3(その他の時期の遺物)

いずれも近世以降の耕作土(基本層序の2層)から出土したものであるが、もともと当調査区域に包蔵されていたものの可能性が高いため、報告する(図26)。46・47は8世紀代の壺の破片である。47の体部内面には垂直方向のミガキ痕がある。48は平安時代の甕の破片である。49は中世の土師質土器の破片である。50は開元通宝である。当調査区内には時期不明の土坑が多数あるが、これらの遺物は、その時期比定に関わる可能性がある。

参考文献 森屋雅幸・服部浩平編 2016『山梨県都留市内遺跡発掘調査報告書』都留市埋蔵文化財調査報告書第15集，都留市教育委員会、山梨 pp. 24-26

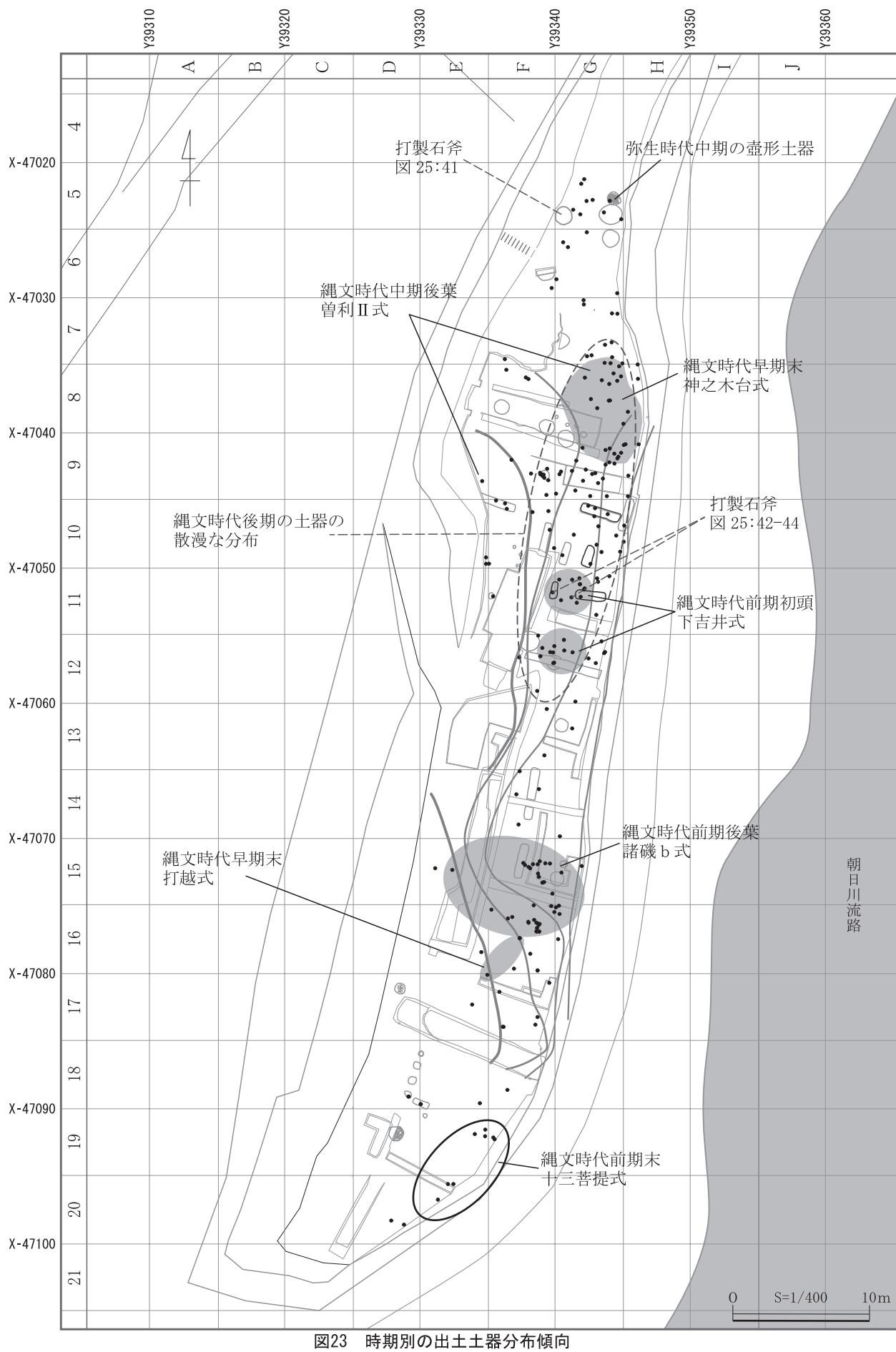
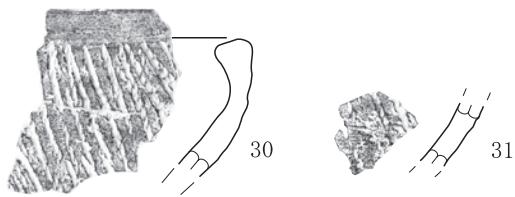
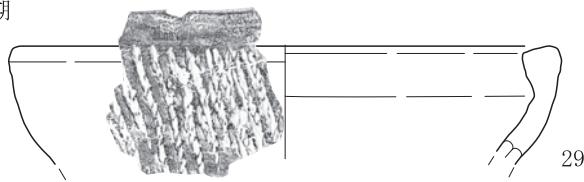


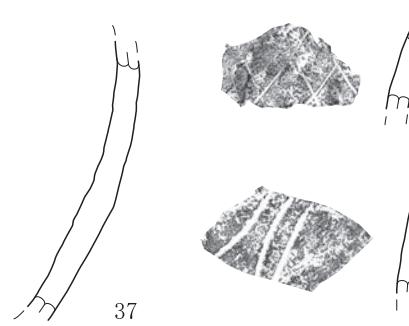
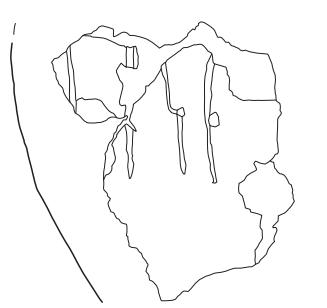
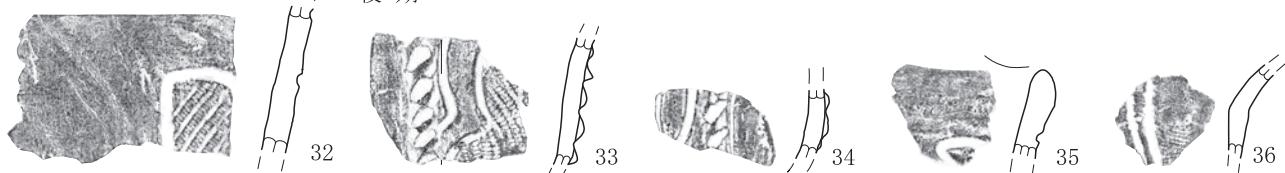


図24 出土遺物(1)

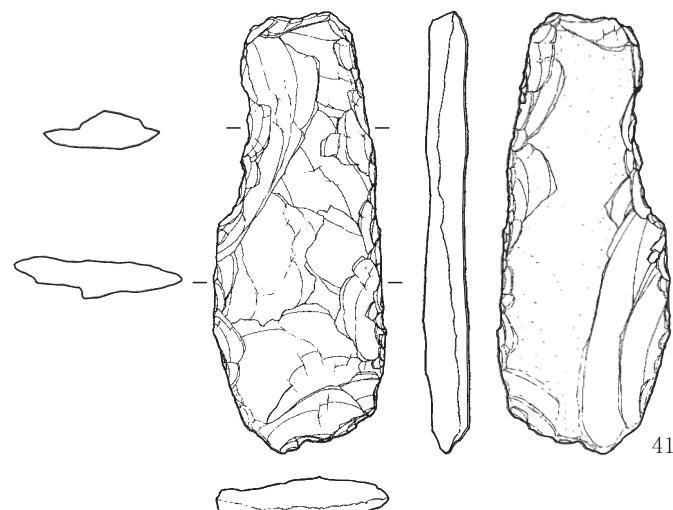
中期



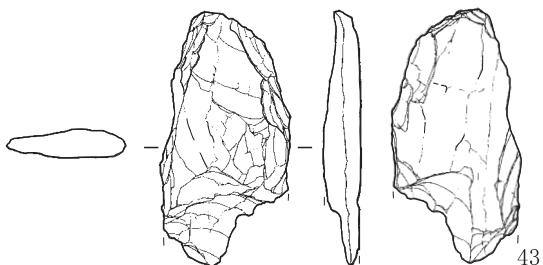
後期



0 S=1/3 10cm



42: (7.30) cm, (4.54) cm, (1.05) cm, (38.4) g, 結晶片岩製



43: (8.28) cm, (4.24) cm, (1.21) cm, (42.4) g, 結晶片岩製



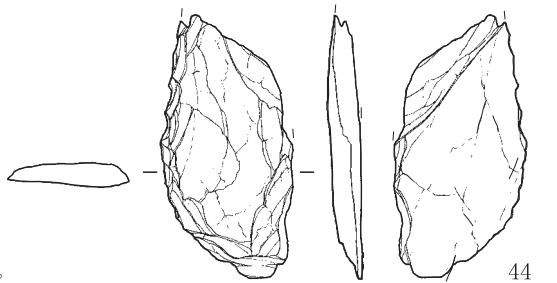
41 刀部から側縁にかけての摩滅痕（裏面から）

石器の計測値は、長さ、幅、厚さ、重さの順に記載した。

折損部分にかかる計測値には括弧書きで示した。

長さと幅は平面を四角く囲った際の長辺と短辺、厚さは最大厚を計測した。

0 S=2/5 10cm



44: (8.84) cm, (4.31) cm, (0.94) cm, (38.9) g, 結晶片岩製

図25 出土遺物(2)

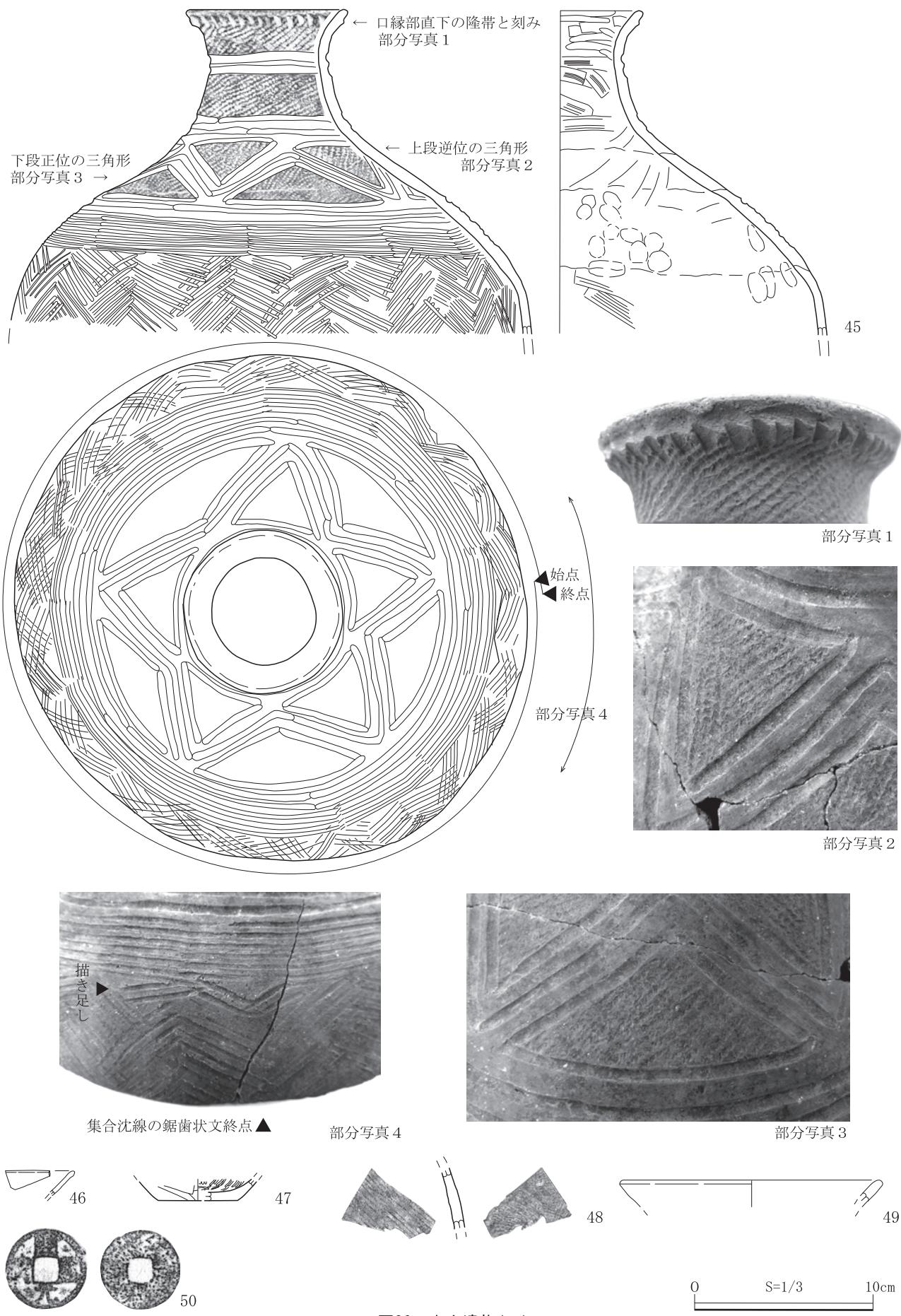


表3 遺物観察表（土器） 破損資料の計測値は、括弧付で示した。色調は農林水産省水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』1990年度版による。

図版番号	図内番号	出土遺構 遺構外は層位	種別	器種	寸法 (cm)			成形・施文技法・文様等	色調	胎土	時期
					口径	底径	器高				
図24	1	7層	縄文土器	深鉢	—	—	(3.3)	絡条体(燃系)の回転施文 内面はナデ整形	内外(10YR5/4) 黄褐色	微細な石英多く、 長石も含む	縄文時代 早期前半か
図24	2	7層	縄文土器	深鉢	—	—	(2.6)	絡条体(燃系)の回転施文 内面はナデ整形	内外(10YR4/5) 黄褐色	微細な石英多く、 長石も含む	縄文時代 早期前半か
図24	3	4・5層混在する層	縄文土器	深鉢	—	—	(4.5)	絡条体(燃系)の回転施文 内面はナデ整形	内(5YR5/6) 明褐色 外(7.5YR5/6) 明赤褐色	1.5mm以下の石英と 長石多い	縄文時代 早期前半か
図24	4	7層	縄文土器	深鉢	—	—	(4.5)	左撫り無節縄文の横位施文 内面はナデ整形	内(7.5YR4/1) 灰褐色 外(7.5YR4/2) 褐灰色	石英と長石の他、1.5~4mm のチャートを極少量含む	縄文早期末 表裏縄文系土器か
図24	5	6層	縄文土器	深鉢	—	—	(3.6)	貝殻腹縁文 内面は条痕整形	内(7.5YR5/2) 灰褐色 外(7.5YR5/3) にぶい褐色	微細な石英と雲母多い 纖維含む	縄文時代早期末 打越式
図24	6	7層	縄文土器	深鉢	—	—	(2.9)	貝殻腹縁文 内面は条痕整形	内外(7.5YR3/1) 黒褐色	微細な石英と雲母多い 纖維含む	縄文時代早期末 打越式
図24	7	7層	縄文土器	深鉢	—	—	(2.0)	貝殻腹縁文 内面は条痕整形	内(7.5YR4/1) 褐灰色 外(7.5YR5/3) にぶい褐色	微細な石英と長石含む 纖維含む	縄文時代早期末 打越式
図24	8	7層	縄文土器	深鉢	—	—	(4.5)	口唇に加飾、口縁部下に頂部に加飾 された横走隆帯、その下に斜格子状沈線、内面は条痕整形	内(7.5YR5/2) 灰褐色 外(5YR6/6) 橙色	2mm以下の白色粒子含む 纖維含む	縄文時代早期末 神之木台式
図24	9	7層	縄文土器	深鉢	(20.0)	—	(6.6)	口唇に加飾、口縁部下に頂部に加飾 された横走隆帯、その下に斜格子状沈線、内面は条痕整形	内(7.5YR4/2) 灰褐色 外(7.5YR4/6) 褐色	2mm以下の白色粒子含む 纖維極わずかに含む	縄文時代早期末 神之木台式
図24	10	7層	縄文土器	深鉢	—	—	(3.2)	外面擦痕状整形、内面は条痕整形	内外(5YR4/4) にぶい赤褐色	極微小な白・黒色粒子、 纖維含む	縄文時代早期後葉 条痕文系土器
図24	11	7層	縄文土器	深鉢	—	—	(5.2)	外面ナデ整形一部に条痕整形 内面に縱方向の成形痕	内(7.5YR3/2) 黒褐色 外(7.5YR6/6) 橙色	微小な石英・黒色粒子・赤 色粒子、纖維含む	縄文時代早期
図24	12	7層	縄文土器	深鉢	—	—	(5.2)	外面ナデ整形、内面に縱方向の 成形痕	内(5YR6/6) 橙色 外(10YR4/3) にぶい赤褐色	微小な石英・黒色粒子・赤 色粒子、纖維含む	縄文時代早期
図24	13	7層	縄文土器	深鉢	—	—	(9.4)	横走する隆帯 内面は条痕整形	内(5YR6/6) 橙色 外(10YR4/4) にぶい黄褐色	海面骨針を多く含む 纖維含む	縄文時代前期初頭 下吉井式
図24	14	7層	縄文土器	深鉢	—	—	(3.3)	横走する隆帯 内面はナデ整形	内(7.5YR5/4) にぶい赤褐色 外(5YR5/4) にぶい赤褐色	海面骨針を多く含む 纖維含む	縄文時代前期初頭 下吉井式
図24	15	7層	縄文土器	深鉢	—	—	(5.3)	平縁の口唇に加飾 内面は条痕整形	内(7.5YR5/4) にぶい赤褐色 外(5YR5/5) にぶい赤褐色	海面骨針を多く含む 纖維含む	縄文時代前期初頭 下吉井式
図24	16	7層	縄文土器	深鉢	—	—	(5.3)	横走する隆帯 内面は条痕整形	内(7.5YR5/4) にぶい赤褐色 外(5YR5/6) にぶい赤褐色	海面骨針を多く含む 纖維含む	縄文時代前期初頭 下吉井式
図24	17	7層	縄文土器	深鉢	—	—	(4.4)	外面・内面、ナデ整形	内(7.5YR5/4) にぶい赤褐色 外(5YR5/7) にぶい赤褐色	海面骨針を多く含む 纖維含む	縄文時代前期初頭 下吉井式
図24	18	7層	縄文土器	深鉢	—	—	(7.0)	外面は剥落多い 内面はナデ整形	内(7.5YR5/4) にぶい赤褐色 外(5YR5/2) にぶい赤褐色	海面骨針を多く含む 纖維含む	縄文時代前期初頭 下吉井式
図24	19	6層	縄文土器	深鉢	—	—	(5.3)	左撫り無節縄文の横位施文 内面はナデ整形	内(7.5YR6/8) 橙色 外(10YR6/6) 明黄褐色	纖維多く含む	縄文時代前期前葉 関山式
図24	20	6もしくは7層	縄文土器	深鉢	—	—	-3	口唇に突起、多截竹管状工具による横位の連続刺突	内外(7.5YR5/5) 明褐色	極微小な石英を含む	縄文時代前期 諸磯式期か
図24	21	6層	縄文土器	深鉢	—	—	(4.0)	多截竹管状工具の横位の連続刺突	内外(7.5YR5/6) 明褐色	1mm程度以下の石英と 長石が顕著	縄文前期後葉 諸磯b式
図24	22	6層	縄文土器	浅鉢	—	—	(4.6)	外面は有段 内外ともナデ整形	内外(5YR5/6) 明赤褐色	1mm程度以下の石英と 長石が顕著	縄文前期後葉 諸磯式
図24	23	6層	縄文土器	浅鉢	—	—	(4.6)	内外ともナデ整形	内外(5YR5/6) 明赤褐色	1mm程度以下の石英と 長石が顕著	縄文前期後葉 諸磯式
図24	24	3層	縄文土器	深鉢	—	—	(2.4)	集合沈線を地文とし、隆線を添付 その上を半截竹管状工具で加飾	内外(10YR6/4) にぶい黄橙色	石英を顕著に含む	縄文前期末 十三菩提式
図24	25	6層	縄文土器	深鉢	—	—	(1.8)	縄文地文の上に横走する隆線を添付 し半截竹管状工具で加飾	内外(5YR5/6) 明赤褐色	1mm程度以下の石英が 顕著	縄文前期末 十三菩提式
図24	26	6層	縄文土器	深鉢	—	—	(2.9)	縄文地文の上に横走する隆線を添付 し半截竹管状工具で加飾	内外(7.5YR4/6) 褐色	1mm程度以下の石英が 顕著	縄文前期末 十三菩提式
図24	27	5層	縄文土器	深鉢	—	—	(2.5)	縄文地文の上に横走する隆線を添付 し半截竹管状工具で加飾	外(10y r 4/3) にぶい黄褐色	極微小な石英を多く含む	縄文前期末 十三菩提式
図24	28	6層	縄文土器	深鉢	—	—	(7.3)	縄文地文上に、垂下隆線を添付し半截 竹管状工具で加飾	内外(7.5YR5/4) にぶい褐色	1mm程度以下の石英が 顕著	縄文前期末 十三菩提式
図25	29	5層	縄文土器	深鉢	(21.2)	—	(4.5)	やや内径する平縁の口縁、右撫り 単簡繩文による絶条体の回転施文	内外(5YR4/4) にぶい赤褐色	石英、雲母、長石含む	縄文中期後葉 曾利II式
図25	30	5層下部	縄文土器	深鉢	(21.0)	—	(5.0)	やや内径する平縁の口縁、右撫り 単簡繩文による絶条体の回転施文	内外(5YR4/4) にぶい赤褐色	石英、雲母、長石含む	縄文中期後葉 曾利II式
図25	31	5層	縄文土器	深鉢	—	—	(3.0)	やや内径する平縁の口縁、右撫り 単簡繩文による絶条体の回転施文	内外(5YR4/4) にぶい赤褐色	石英、雲母、長石含む	縄文中期後葉 曾利II式
図25	32	4・5層混在する層	縄文土器	深鉢	—	—	(5.7)	方形(部分)の沈線区画の擦消 縄文	内(5YR5/4) にぶい赤褐色 外(10YR5/4) にぶい黄褐色	石英、長石顕著	縄文中期後葉 加曾利E II式
図25	33	29号土坑 覆土下部	縄文土器	深鉢	—	—	(5.0)	不定形(部分)の沈線区画の擦消 縄文、加飾された垂下隆線	内(5YR5/4) にぶい赤褐色 外(7.5YR4/3) 褐色	極微小な石英と長石を 含む	縄文時代後期初頭か
図25	34	29号土坑 覆土下部	縄文土器	深鉢	—	—	(2.7)	不定形(部分)の沈線区画の擦消 縄文、加飾された垂下隆線	内外(7.5YR3/4) 暗褐色	極微小な石英を多く含み、 より大きな長石を少量含む	縄文時代後期初頭か
図25	35	5層	縄文土器	深鉢	—	—	(3.5)	やや肥厚する口唇、擦消縄文	内外(5YR5/6) 明赤褐色	極微小な石英を多く含み、 より大きな長石を少量含む	縄文時代後期初頭か
図25	36	5層	縄文土器	深鉢	—	—	(4.2)	縄文地文に沈線	内外(5YR5/4) にぶい赤褐色	1mm程度の石英と長石を 多く含む	縄文後期前葉 堀之内式か
図25	37	5層	縄文土器	深鉢	—	—	(11.1)	沈線で文様を描くが形状は不明	内(7.5YR5/4) にぶい赤褐色 外(7.5YR4/3) 褐色	1mm程度の石英と長石を 多く含む	縄文後期前葉 堀之内式か
図25	38	5層	縄文土器	深鉢	—	—	(3.7)	斜格子状沈線	内外(7.5YR5/4) にぶい褐色	1mm程度の石英と長石を 多く含む	縄文後期前葉 堀之内式か
図25	39	5層	縄文土器	深鉢	—	—	(3.3)	沈線で文様を描くが形状は不明	内(5YR5/3) にぶい赤褐色 外(10YR4/2) 灰黃褐色	1mm程度の石英と長石を 多く含む	縄文時代後期か
図25	40	4・5層混在する層	縄文土器	深鉢	—	—	(5.7)	平縁の口唇で、横走する沈線区画の 擦消縄文	内(10YR6/6) 明黄褐色 外(7.5YR6/6) 橙色	石英が多く長石が続く	縄文時代後期か
図26	45	35号土坑 底面直上	弥生土器	壺	8.6	—	(18.)	擦消縄文、鋸齒状に展開する集合沈線	内(7.5YR5/4) にぶい褐色 外(7.5YR4/3) 褐色	1mm程度の石英と長石を 多く含む	弥生時代中期
図26	46	3層	土師器	壺	—	—	(2.0)	ナデ整形	内外(5YR6/6) 橙色	赤色	8世紀
図26	47	3層	土師器	壺	—	(5.5)	(1.2)	ナデ整形、内面に暗文	内外(5YR6/6) 橙色	赤色	8世紀
図26	48	3層	灰釉陶器	甕	—	—	(3.4)	外面:たたき、内面:あて (5YR6/1) 灰色	内外(5YR6/6) 橙色 (5YR6/1) 灰色	平安	
図26	49	3層	土師器	碗	(2.2)	—	(1.5)	ナデ整形	内外(7.5YR5/4) にぶい褐色	石英、長石、雲母を含む	中世
図26	50	3層	錢貨	—	—	—	直径2.2cm	開元通宝			

第4章 集石土坑及び環状集石構成石材の検討

第1節 検討の目的

美通遺跡2021年度調査地点では直径約1m、深さ約0.3m(検出面からの深さ)程度の土坑内から多量の被熱した礫が発見される集石土坑が2基と、多量の被熱した礫が直径約7.5mの範囲内に概ね環状に分布する環状集石が1箇所発見された。これらの遺構は帰属する層位の検討や、遺構に伴う土器の特定から、縄文時代早期後半条痕文系土器群特に早期末の神之木台式期の所産である可能性が高いと推測した(第3章第3節、第5章)。また、旧地形の検討を通して、調査区やや南側で隣接する朝日川に向けて広がる小規模な谷状地形を避けて当該遺構が形成する傾向を指摘した(第3章第2節)。一方、環状集石については、集石土坑のような小規模な礫集中区が集積して形成されたような平面分布を調査段階で把握していたものの(写真図版4上段2枚)、明確な円形の平面形状や、土坑形状を捉えられず、その実態が不明であった。

集石土坑の資料整理段階において1号・2号集石土坑間の石材選択性の違いが判明したことを受け、環状集石を構成する集石間にも1号・2号集石土坑と同様の石材選択性の違いがあるとするならば、特定の石材が局所的に偏在する現象がみられるだろうと予想した。本章では1号集石土坑、2号集石土坑、環状集石の3つの遺構を構成する礫の比較を通して、環状集石を複数の集石土坑の集積体とする仮説の検証に有効な現象(結論としては少數石材と破損の少ない石材の分布)を把握し、検討する。

これにより、美通遺跡2021年度調査地点で発見された環状集石が、より小規模な集石土坑の集合体であることを明らかにする。

第2節 遺跡に隣接する朝日川河川敷での石材調査

検討に先立ち、検討対象を構成する礫の原産地の推定を目的として、発掘調査地点に隣接する朝日川の河川敷で石材調査を実施した。調査地点は図27上段に示した3地点である。発掘調査地点は石材調査地点から3~4m程度の崖線上面にあるが、比較的のだらかな地点もあり往来は容易である。石材調査地点は河川敷の中でも各集石を構成する礫と同程度の大きさの礫が分布するエリアから選定し、1m四方の簡易な枠を設定して、その中の石材種別を判別・記録した。

結果は図27下段のとおりで、いずれの地点でも礫岩と玄武岩、安山岩が大半を占めた。朝日川水系は、大部分が玄武岩や安山岩、玄武岩質安山岩、粗面安山岩、溶岩、火碎岩、デイサイト、流紋岩を含む付加体に囲まれており(図28)、今回の朝日川河川敷での石材組成の大半を礫岩や玄武岩、安山岩が占める現象は、これに由来する。各地点に少量含まれる溶岩は、富士山を給源として桂川を北流した猿橋溶岩流の一部が転石化したものだろう。調査地点周辺には猿橋溶岩が分布している。花崗岩は調査地点よりやや上流に岩体分布域がある。

この調査結果は、後述する各遺構の礫の石材組成と矛盾しないことから、発掘調査地点に隣接する朝日川河川敷が礫採取地であった可能性が高いことを示している(一部石材の組成比については第5章註(1) 参照)。

第3節 方法の検討：集石土坑及び環状集石の構成石材の特性

検討対象とした遺構中の礫の石材組成や大きさ、石材破損率を遺構間で比較し、環状集石の小単位を捉えうる分析項目を選定していく。

特定石材の分布傾向の検討 1号集石土坑、2号集石土坑、環状集石のいずれもが、礫岩、安山岩、玄武岩が石材組成の大半を占めている(表3)。これらの石材が占める割合は遺構間で一定である一方、溶岩については、2号集石土坑では42点(16%)含まれるのに対し1号集石では6点(1.4%)含まれるのみという対称的な結果が得られた。花崗岩についても数量に同様の偏りがある。

これらが縄文人による石材選択の結果であるとするならば、そして環状集石がより小さな集石土坑の集合体であるならば、環状集石を構成する集石土坑間にも石材選択の指向性に違いがあり、結果として特定の石材が特定

の箇所に偏在する可能性を想定し得る。この傾向は礫岩や安山岩、玄武岩のような組成の大半を占める石材では読み取れないため、1号集石土坑と2号集石土坑の石材組成中で偏りのみられた溶岩と花崗岩に着目する。

台石の分布による環状集石内小単位の検討 発掘調査段階で環状集石中にはひと際大きな礫が点在する特徴を把握していた(写真図版2)。これが台石である可能性を想定したが、図30の1点を除いて擦痕や摩滅痕など、集石を構成する他の礫と峻別できる痕跡はみられず、かならず扁平な形状であるというわけでもなかった。そこで、突出した重量の礫を選別するために礫重量を比較した(図29右)。いずれの集石も2,000gまでは比較的連続的に各重量が散布するが、3,700~8,200gの一群が重重量の礫としてこれらと隔絶した散布傾向を示している。これら重重量の礫の平面分布を示したのが図29左である。礫分布を示すドットの密集地に対応する重重量の礫の分布を想定したが、関係はみられなかった。重重量の礫の大部分が台石として機能したのか自体が不明でありここでの検討には有効ではない。

環状集石中の礫破損状況の検討 各遺構の礫を整列させた際(写真図版6中段・下段)、1号集石土坑と2号集石土坑を構成する礫は破損率が低いのに対し、環状集石を構成する礫は破損率が高いことに気がついた。図31右側に、各遺構における残存率80%以上の礫が占める割合を示したが、上記の傾向がよく表れている。重量を比較した図29右のグラフでも、環状集石は破損礫であろう低重量の礫が多量にあることがわかる。礫の大部分に赤色化、煤の付着、火燐ね、クラックの形成といった被熱痕がみられるところから、破損率の高低は被熱度合いやその回数の違いを反映しているものと思われる。近接した礫ばかりが接合関係にあることを示す図32は、礫が被熱により破損した様子を表しているのだろう。環状集石中の残存率80%以上の礫の分布に特定箇所への偏りがみられるとなれば、その一帯が被熱度合いの低いもしくは使用回数の少ない集石土坑の位置を示している可能性があり、これも環状集石が集石土坑の集合体であることを示す現象であるとみた。

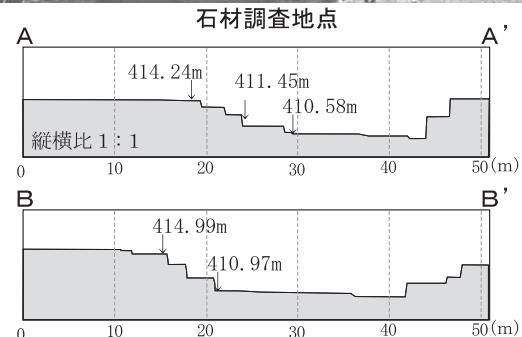
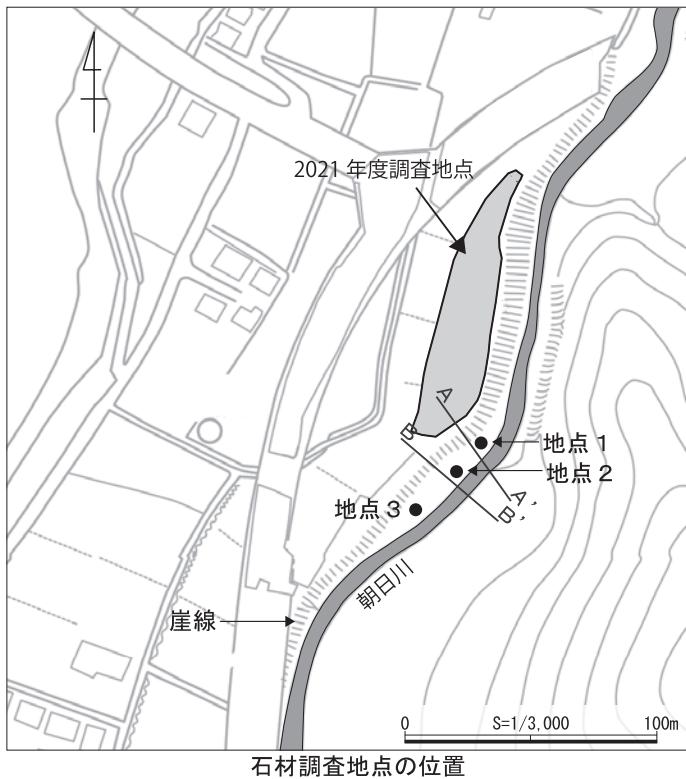
第4節 検討と結論：礫の特徴から推定される環状集石の構成

特定石材の平面分布傾向 図30は環状集石における溶岩礫と花崗岩礫の分布をそれぞれ上下段に示したものである。特に北西側に礫が多く分布しているため、いずれの石材も母数の多いこのエリアに比較的多く分布する傾向がみられる。その中にあって、溶岩は南東エリアに丸枠で囲んだ範囲、花崗岩は北西エリアに丸枠で囲んだ範囲に多く分布する。特に礫岩の密集は顕著である。

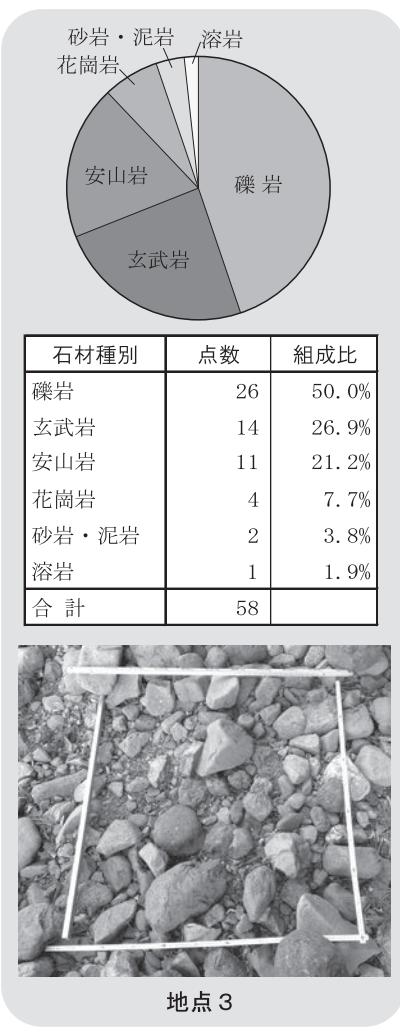
残存率80%を超える礫の分布 溶岩や花崗岩の分布傾向よりも著しい分布の偏りをみせるのが残存率80%を超える礫の分布である。図31にその分布を丸枠で囲んで示した。そもそも礫分布が密である北西エリアにあっても、残存率80%を超える礫の密集が際立っている。同地点の断面である写真図版3下段でも、左右で礫破損率の差が明瞭である。写真図版3の上段に白い丸枠で囲った範囲は、図31に示した中央の丸枠範囲に対応する。検出段階である左の写真には、他と違い破損のみられない円礫を中心に構成されていることがわかる。同じ地点における第1回の礫取り上げ後の様子(右の写真)からは、破損率は他と変わらないものの、残存率80%を超える礫の分布を踏襲しながら礫が円形に分布することがわかる。同一エリアにおける下層の礫よりも表層の礫破碎率が低い現象は、前者に対して後者の礫の被熱頻度がまだ少ないことを表しているのではないか。礫の中段に炭化物が多く分布した2号集石の事例(第3章第3節)を同一集石土坑の複数回にわたる段階的な利用の実態を表すものとするならば、当事例は段ごとにも複数回利用された可能性を示唆するものである。これを踏まえると、残存率80%を超える礫の分布は、集石の1つの使用単位を表しているともできる。

結論：集石土坑群としての環状集石 美通遺跡2021年度調査地点では、資料整理段階における各礫属性の分布傾向解析を想定し、発見した環状集石を構成する礫全点の3次元位置情報を記録した。これを用いた本章での検討結果は、当調査地点の環状集石が1号集石土坑や2号集石土坑のような集石土坑の集合体である可能性を示すものであった。また、当調査地点における特色として、集石ごとの石材選択性の違いや、土坑内の多段階利用、土坑内礫の複数回利用といった当該遺構の形成過程に関する現象を捉えることができた。

参考文献 尾崎正紀・牧本博・杉山雄一他 2002 「20万分の1 地質図幅「甲府」」 産業技術総合研究所地質調査総合センター



国土地理院提供「地理院地図」により作成し、一部を改変
遺跡立地面（現地表面）から石材調査地点にかけての地形断面



各地点における礫の石材種別比

図27 石材調査結果

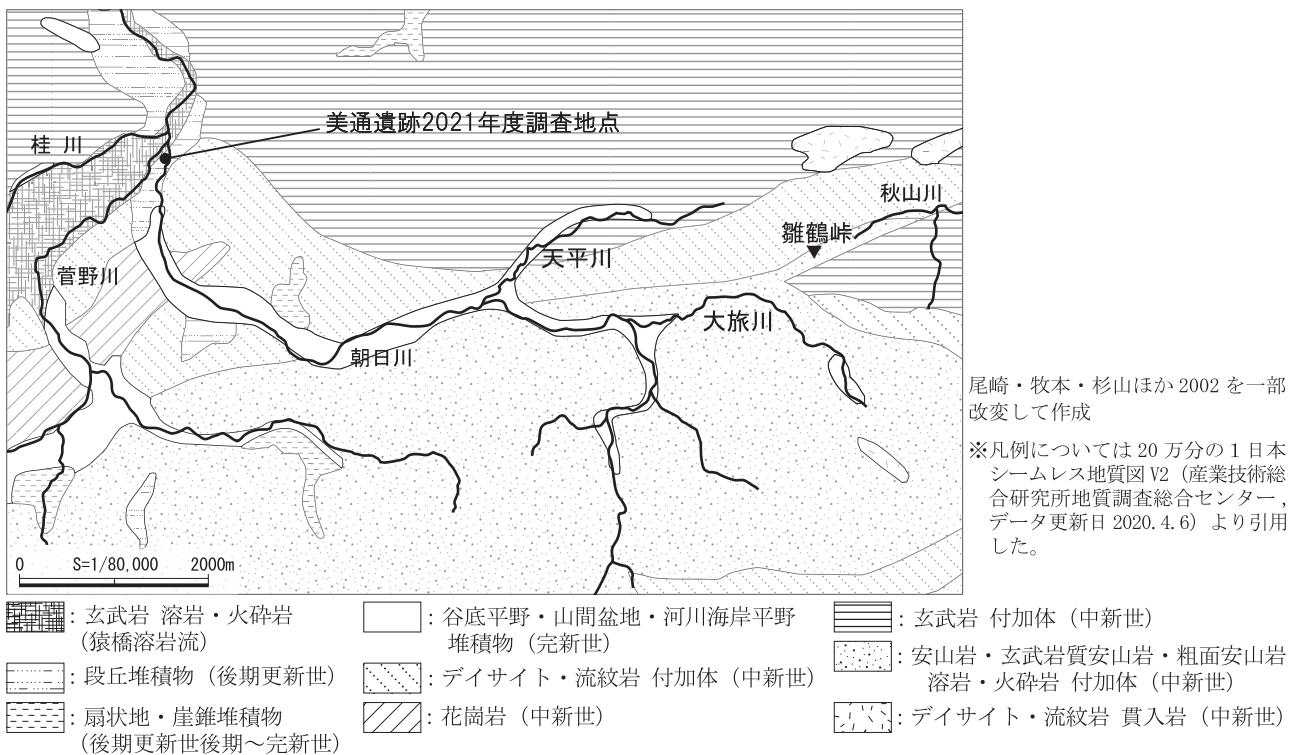


図28 美通遺跡 2021年度調査地点周辺の地質

表4 集石ごとの石材組成比

石材種別	環状集石		1号集石		2号集石	
	点数	組成比	点数	組成比	点数	組成比
安山岩	1475	55.8%	290	67.4%	73	27.8%
礫岩	522	19.7%	122	28.4%	59	22.4%
玄武岩	508	19.2%	9	2.1%	52	19.8%
溶岩	65	2.5%	6	1.4%	42	16.0%
花崗岩	57	2.2%	3	0.7%	34	12.9%
砂岩・泥岩	17	0.6%	0	0%	3	1.1%
合計	2644		430		263	

※石材種別の検討にあたり、極小の破片は除外した。

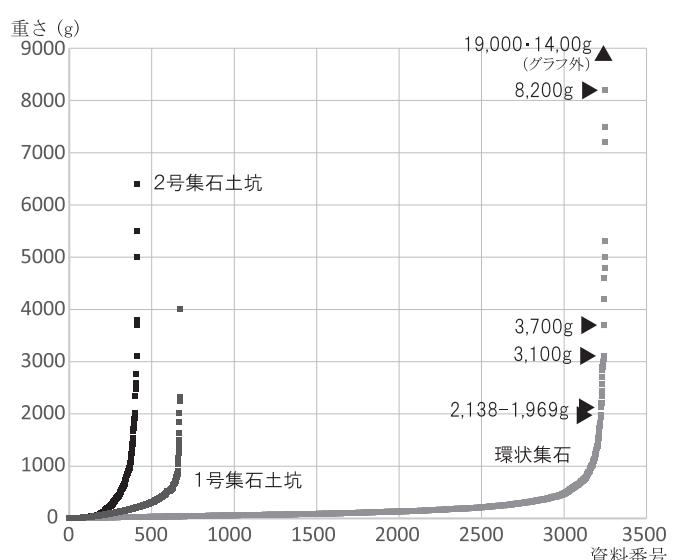
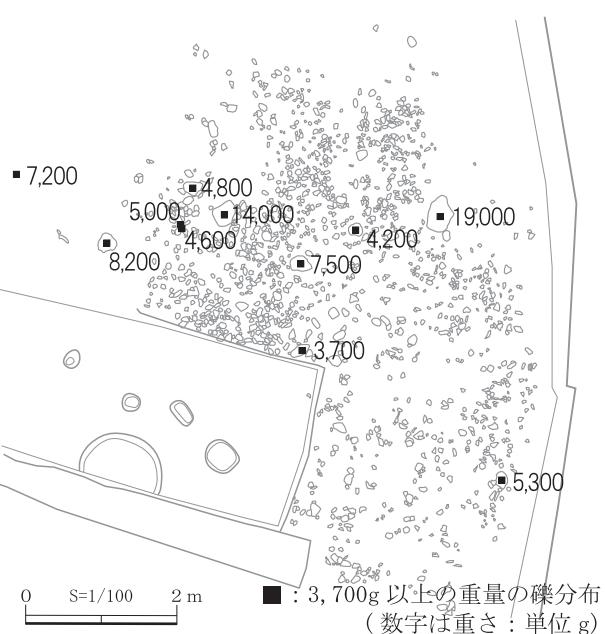


図29 集石間の礫重量比較と環状集石における重重量の礫の平面分布

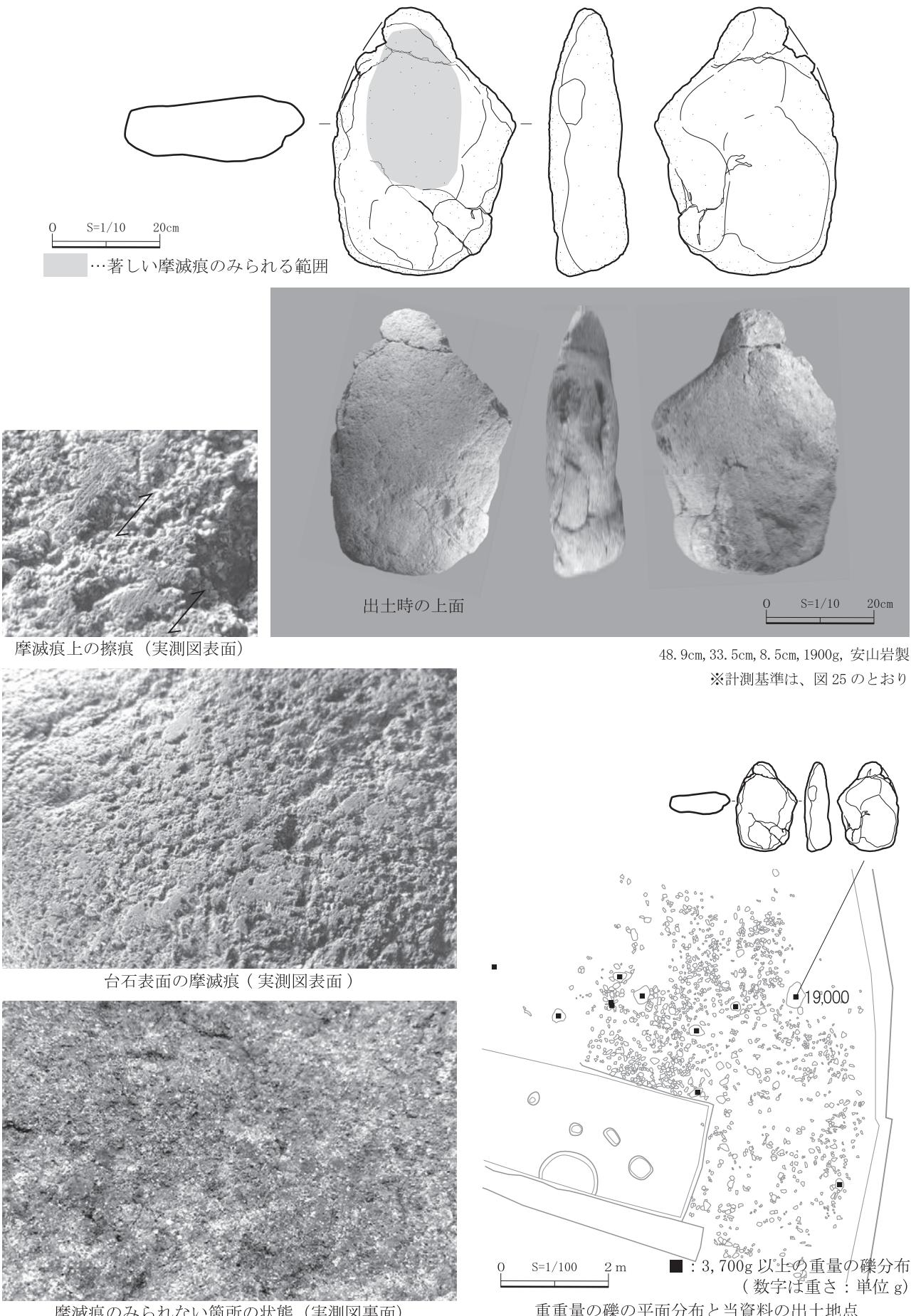
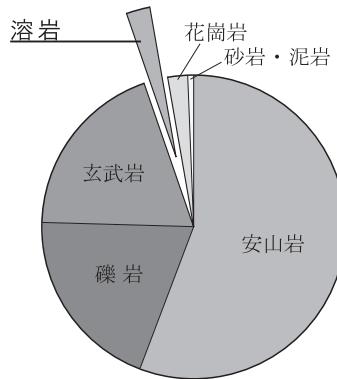


図30 環状集石内出土の磨り面をもつ台石

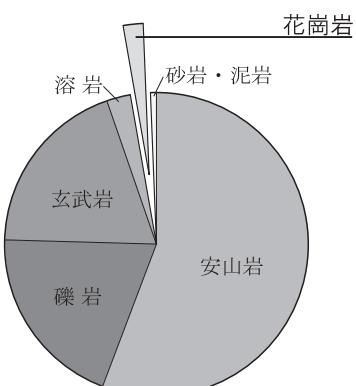
石材種別	点数	組成比
安山岩	1475	55.8%
礫岩	522	19.7%
玄武岩	508	19.2%
溶岩	65	2.5%
花崗岩	57	2.2%
砂岩・泥岩	17	0.6%
合計	2644	



・環状集石における礫の石材種別比



石材種別	点数	組成比
安山岩	1475	55.8%
礫岩	522	19.7%
玄武岩	508	19.2%
溶岩	65	2.5%
花崗岩	57	2.2%
砂岩・泥岩	17	0.6%
合計	2644	



・環状集石における礫の石材種別比

花崗岩の分布（「△」が花崗岩礫検出地点）

図31 環状集石における石材種別平面分布傾向

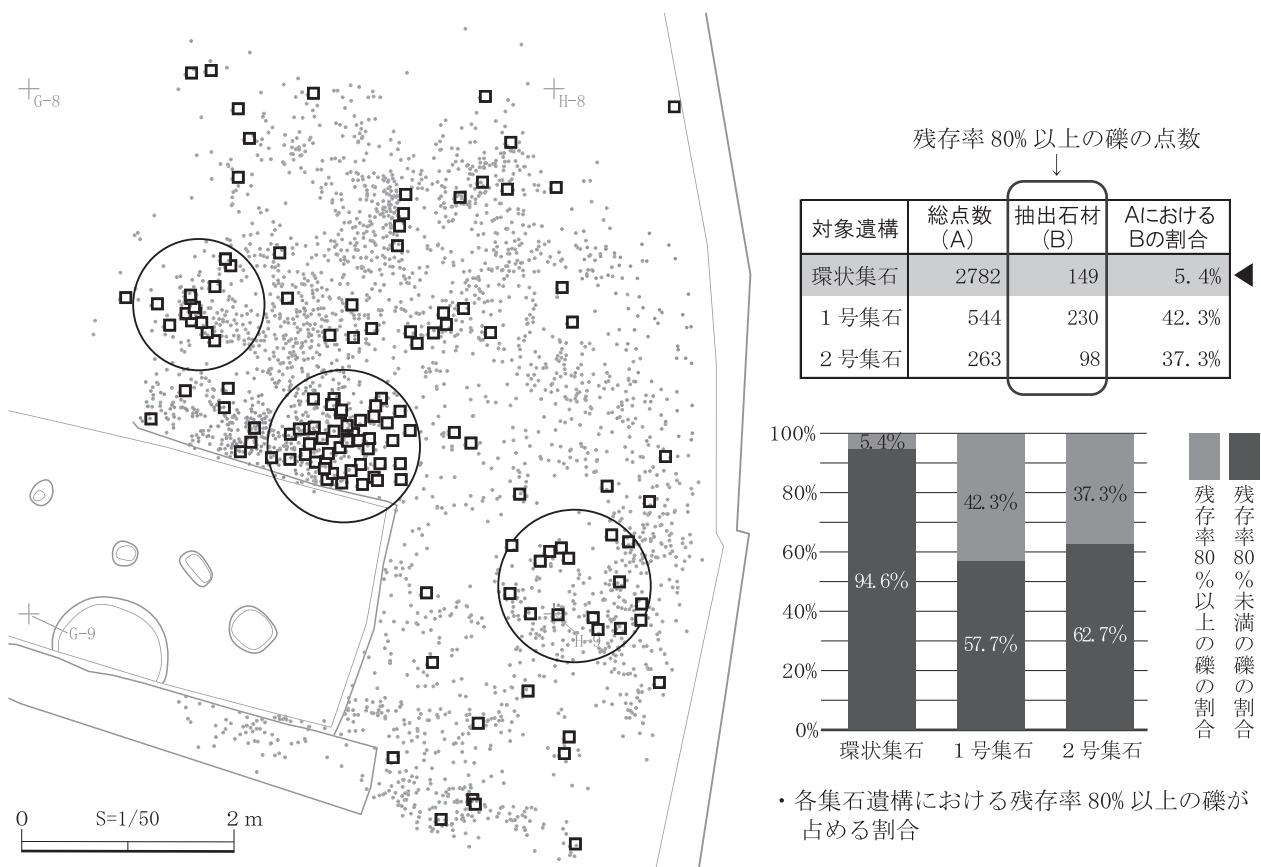


図32 環状集石における非破碎石材の平面分布傾向

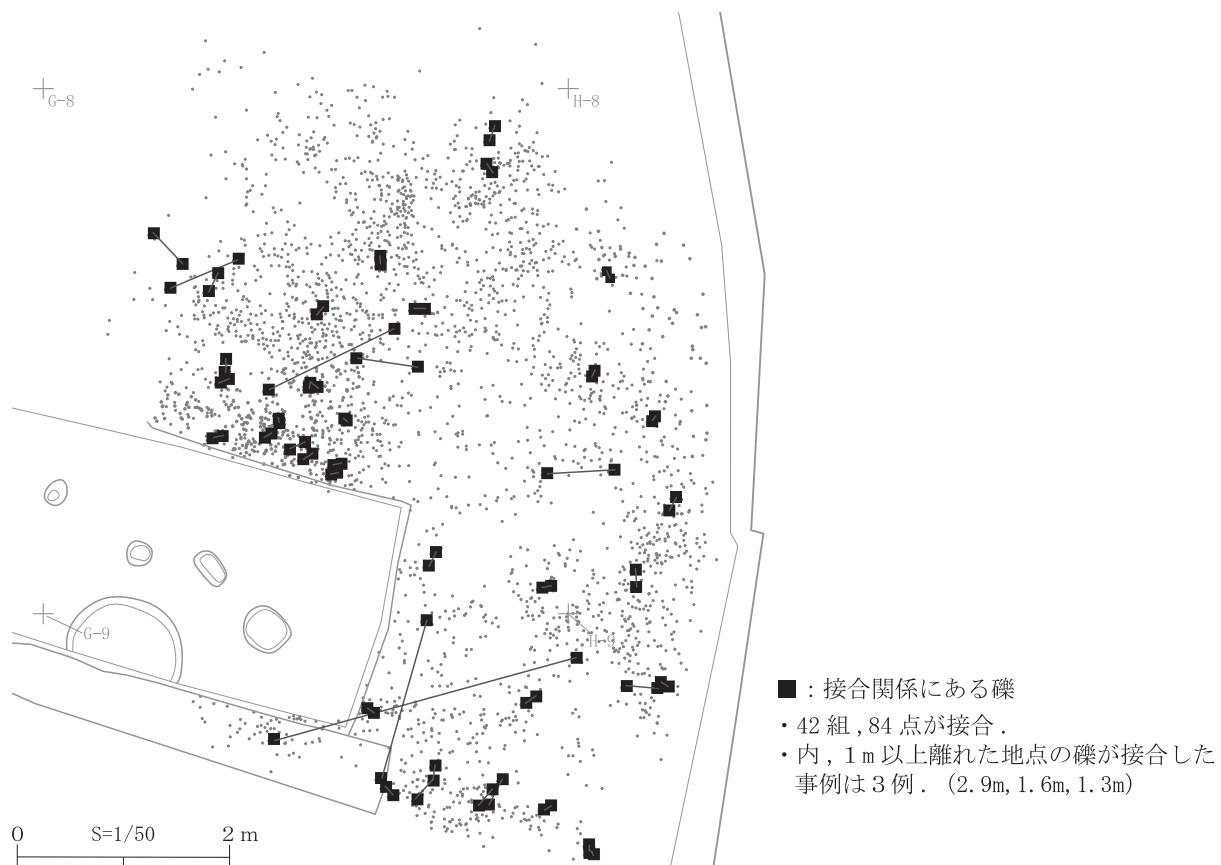


図33 環状集石における礫接合関係

第5章 総括

美通遺跡2021年度調査地点の層序と年代 当地点の地形と遺跡の形成過程は、基本層序の5層形成以前と以後とに分けて整理するとわかりやすい。際立って多量のスコリアを含む5層は、層下部に包含する土器の型式から縄文時代中期後葉の曾利式期に堆積したものと想定している。当該地域では曾利IV式期に富士山から噴出した火山碎屑物が確認されており、これに該当するものだろう。

5層形成以前の各層はスコリアを含まず、風化火山灰を中心としている。10層を底面とする谷状の微地形が調査区南側に確認されるとともに(図9)、より上層の堆積層によって緩やかに埋没していく様子もみられた(図6 A-A'断面)。9層から6層までは風化火山灰層中に2枚の黒色帯がみられる。この5層よりも下層の層群には、打越式土器や神之木台式土器などの縄文時代早期後葉の条痕文系土器群、前期初頭の下吉井式土器、前期前葉の関山式期の土器、前期後半諸磯b式土器、前期末葉十三菩提式土器の散布がみられるほか、36から39号土坑、2基の集石土坑と集石土坑に関連すると思われる土坑(7号土坑)、環状集石を発見した。遺構はいずれも7層相当段階に形成したものと思われる。土器は時期ごとにまとまって散布する傾向がある(図23)。

5層から近世以降の水田耕作土である2層形成前までの各層には、量の多寡はあるもののいずれにもスコリアが含まれる。当該地域では縄文時代中期後半以降の堆積層から、富士山給源の火山碎屑物が度々確認されており(望月・松元・高橋ほか2012)、当該層群の特徴もこれに類似するものと考えられる。スコリア層の形成時期と若干の隔たりがあるが5層には曾利II式土器が含まれる。また5層の一部から4層以降からは、縄文時代後期以降の遺物が出土する。この層群からは、円形土坑23基、長形土坑11基が発見された。5層を覆土とする土坑は40号土坑1基で、その他はいずれも5層形成後の遺構である。遺構中に土器を含まない場合がほとんどで、覆土下部から縄文時代後期初頭の土器が出土した29号土坑と、底面から弥生時代中期の壺形土器が出土した35号土坑のみ具体的な帰属時期を推定し得る。33号土坑からは打製石斧と剥片が出土したが時期は不明である。長形土坑は他の遺跡からの発見例も多いものの、遺構中からの遺物出土例が少なく時期比定が難しい。桂川流域の三ノ側遺跡での事例によれば中世に帰属するものと推定される(熊谷・柴田・加速器分析研究所2017)。その他、主に近世以降の水田耕作土と考えられる2層から、平安時代や中世、近世の遺物が出土した。

隣接する美通遺跡C区とD区では、縄文時代早期押型文土器、条痕文系土器、前期諸磯a式土器、前期末十三菩提土器、中期曾利V式土器、後期称名寺II式、堀之内I式、加曾利B1式、晚期氷I式、弥生時代中期初頭の土器、古墳時代後期、平安時代、中世の遺物や遺構が発見されており、当調査区と共に通する時期のものもある(笠原・依田・塙谷ほか2011、今福・土橋2012)。当調査区の2基の集石土坑と環状集石は、環状集石から伴出する土器(神之木台式土器・その他型式判定できない条痕文系土器の破片)や層位からいずれも縄文時代早期末段階と結論したが、C区では年代測定結果や周辺に散布する土器から前期末としている。当調査区でも、関連は不明であるが2号集石土坑から5mほど離れた地点から前期末の十三菩提式土器が複数点出土している。

微地形と遺構形成の傾向 ①遺構分布の傾向: 5層堆積以前に属する遺構と、それ以後の層に属する遺構には、分布傾向に違いがある。5層堆積以前に属する遺構である36から39号土坑、1号集石土坑、2号集石土坑、7号土坑、環状集石は、調査区北側と南側の両極端に偏って分布する。いずれも谷状地形の外側だ。5層堆積以前の層から出土した縄文時代前期末までの遺物も、前期後葉の土器群を除いて谷状地形の外側に分布する。

②5層による地形の変化と遺構分布: 5層の下面是、6層以下の各層と同様、10層以降にみられる谷状地形に沿った傾斜をもっている。朝日川に向かた谷状地形は9層から6層の間で徐々に埋没していくが、5層堆積時にはまだ埋没しきっていなかった。一方、5層の上面には谷状地形の傾斜はほぼ反映されておらず、平坦となっている。度々記載しているように5層は富士山給源の火山碎屑物を中心に構成された層で、堆積構造はみられず、比較的短期間に厚く形成したようである。この5層の形成により、谷状地形は完全に埋没したようだ。5層形成後の遺構が谷状地形と無関係に分布するのは、上記の地形の変化が影響するものと推測できる。

集石土坑と環状集石 美通遺跡2021年度調査地点では、集石土坑2基と集石土坑に関連する可能性のある土坑1基(7号土坑)、そして直径約7mの範囲に3,250点の礫が密集する集石が発見された。3,250点の礫による集石は、中央で礫の散布が希薄になっていることから環状集石と呼ぶこととした。1号集石土坑と2号集石土坑はほぼ同規模で、直径約1mの円形の土坑中から被熱した多量の礫が発見された。

これらの集石を構成する礫石材は、安山岩、玄武岩、礫岩を中心に組成され、花崗岩、溶岩、砂岩、泥岩をわ

ずかに含む。これらの石材はいずれも調査区に隣接する朝日川河川敷で採取可能なものだ。

1号集石土坑と2号集石土坑の礫石材組成を比較すると、安山岩、玄武岩、礫岩が多数を構成する点は共通する一方で⁽¹⁾、溶岩については1号集石土坑で希薄という圧倒的な組成比の差がみられた(表4)。

環状集石の礫には、調査段階から遺構内にいくつかの平面分布上のまとまりがみえていて(写真図版4上段左の2つの密集、同右にも複数の密集がみえる。)、複数のより小規模な集石が集まって形成されたものではないかと予想していた。しかしながら、環状集石の礫は全域にわたって黒色土中に含まれるように分布しており、2基の集石土坑のような土坑形状は確認できなかった。また検出時点では写真図版4上段2枚のように複数のまとまりにみえていた平面分布も、第1回取り上げ後には不明瞭になる場合が多く、個々の単位を捉えられなかつた。

そこで先の1号集石土坑と2号集石土坑にみられた石材選択の違いに着目し、環状集石内に小単位を捉えようとしたのが第4章である。小単位ごとに石材選択の違いがあるのならば、環状集石の礫平面分布に特定石材の偏った密集がみられると予想したのである。もしこの傾向がみられるのであれば、石材組成の圧倒的大部分を占める安山岩、玄武岩、礫岩よりも、少数石材のほうが分布の偏りは生じやすい。そこで1号集石土坑と2号集石土坑の間でも組成率に明瞭な差が認められ、かつ少数石材である溶岩と花崗岩を対象にすることとした。

いずれの石材も、そもそも礫分布量の多い西側から北西側の範囲に多く散布する傾向をみせつつも、特定の箇所に密集する様子も把握できた(図31)。併せて、礫の破損度合いが集石の使用頻度に比例するとの推測の下、破損率の低い礫の分布にも同様の局所的な密集がみられるか否かの検討をした。結果は、溶岩と花崗岩の密集よりも顕著な傾向を示した(図32)。これらの検討は、環状集石が異なる石材選択の指向や使用頻度の異なる集石の集合によって形成したものであることを示しているといえる。

集石の形成過程 2号集石土坑では土坑内の礫の中段に炭化物の多い層があり(写真図版5上段2枚)、集石が段階的に形成されている可能性をみてとれる。集石土坑関連遺構とした7号土坑の、底面に礫があり炭化物を多く含む覆土が堆積する特徴も集石土坑の形成過程に関する可能性がある。同一の土坑を複数段階に分けて利用しているのではないか。そして、2基の集石土坑に対して環状集石の礫破損率が高いことや、その環状集石内にあって低破損率の礫が局所的に密集するという現象は、集石中の礫が繰り返し使用されたことを示す可能性がある。

美通遺跡における各時期の空間利用実態に関する課題 胎土に海面骨針を含む下吉井式土器が発見された(巻頭写真6)。これは、下吉井式土器期の当該地域の遺跡形成について、当該土器を使用した縄文人の広域規模での居住行動(例えば季節的移動など)と連関させて議論すべきであることを示している。また、美通遺跡はこれまでの度重なる調査を通して縄文時代早期から近世に至るまでの長期にわたる断続的な土地利用が明らかになっているが、各時期の空間利用の実態や遺跡形成の過程は明らかにされておらず、課題となっている。

註(1) 当遺跡と隣接する朝日川河川敷では安山岩と玄武岩の肉眼判別が難しい場合や、礫岩と判定したものも打ち割ると玄武岩である場合も多数あった。各集石や朝日川河川敷での石材調査各地点で、安山岩、玄武岩、礫岩の組成率に齊一性を欠いているのはこの判定の揺らぎによるものと考えらえる。そのため、この3種類相互の比率の違いは扱わないこととした。もっとも、本文で述べるように環状集石の中から小単位を抽出する分析には少数石材が有効であることから、この3種類の石材組成比は厳密には問わない。

参考文献

- 今福利恵・土橋寛仁 2012『美通遺跡D区』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書台283集, 山梨県埋蔵文化財センター, 山梨
笠原みゆき・依田幸浩・塩谷風季・パリノ・サーべイ株式会社 2011『美通遺跡A・C区』山梨県埋蔵文化財センター調査
報告書台274集, 山梨県埋蔵文化財センター, 山梨
熊谷晋祐・柴田亮平・加速器分析研究所 2017『三ノ側遺跡(県立都留興譲館高校地点)』山梨県埋蔵文化財センター調査
報告書台314集, 山梨県埋蔵文化財センター, 山梨
望月秀和・松元美由紀・高橋敦・中山誠二 2012『上中丸遺跡(第2次)』富士吉田市文化財調査報告書第9集, 富士吉田市・
富士吉田市教育委員会・公益財団法人山梨文化財研究所, 山梨

写真図版 1 調査風景



発掘調査風景



28・29号土坑南側での精査（北から）



環状集石の精査



18号土坑とその周辺の精査（北から）



調査区と周辺の様子（北から）

写真図版2 環状集石（1）

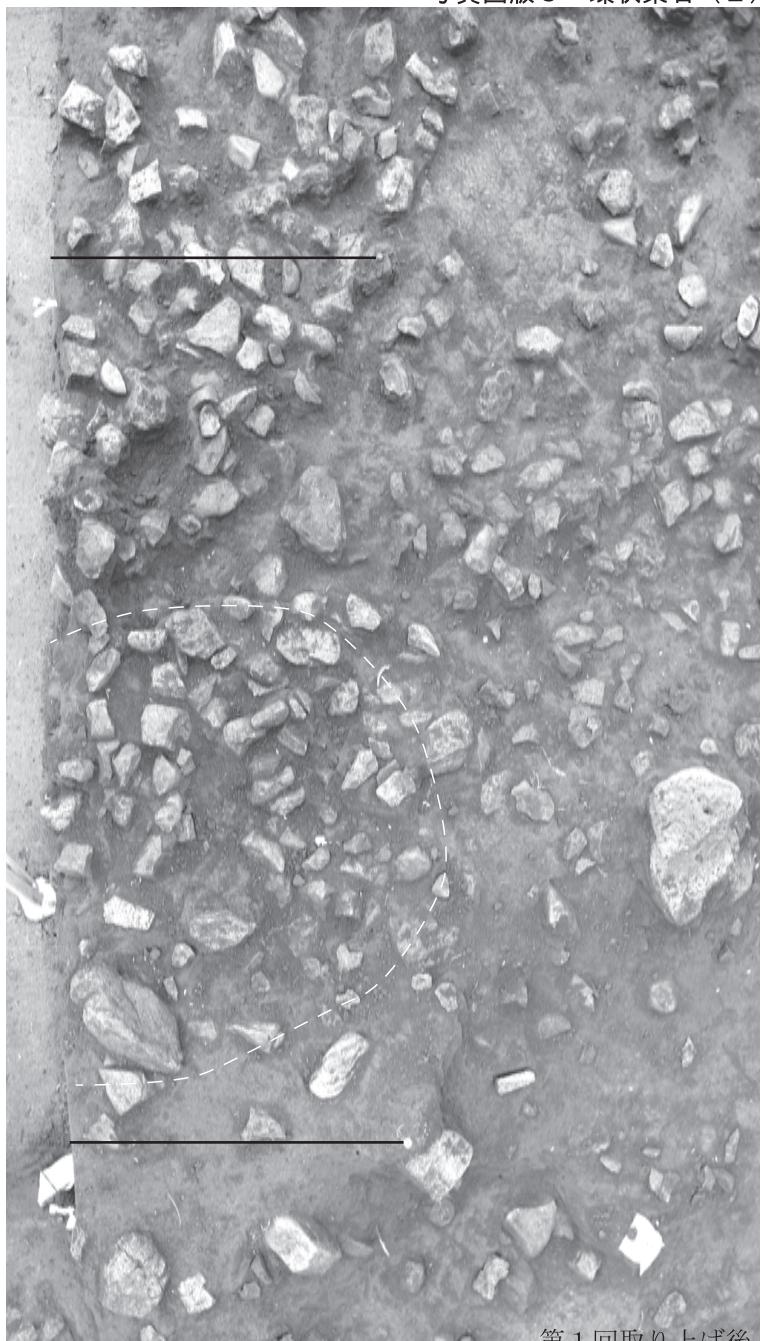


検出段階の礫平面分布（左が北）





第1回取り上げ前
礫の大きさ・円磨度の違い(右が北)写真図版2上段の地点A

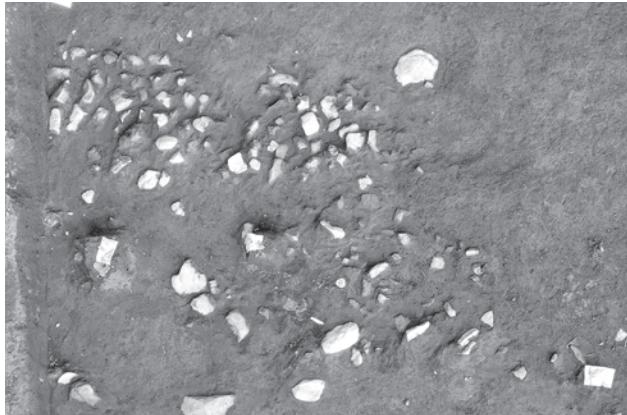


第1回取り上げ後



上段写真の左側土層断面上にみる礫の大きさ・円磨度の違い (G-G' 断面)

写真図版4 環状集積石（3）・1号集石土坑・2号集石土坑



環状集石礫平面分布（左が北）地点B



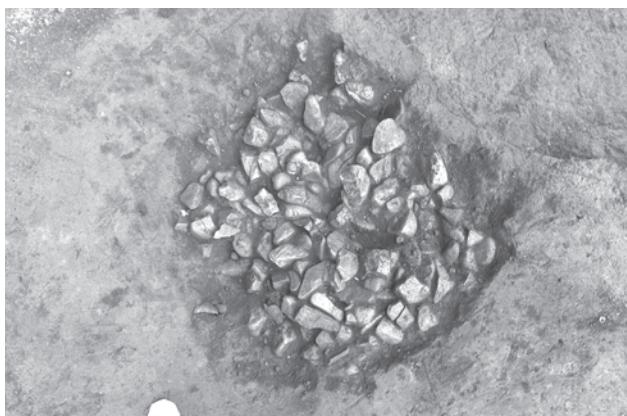
環状集石礫平面分布（北面から）



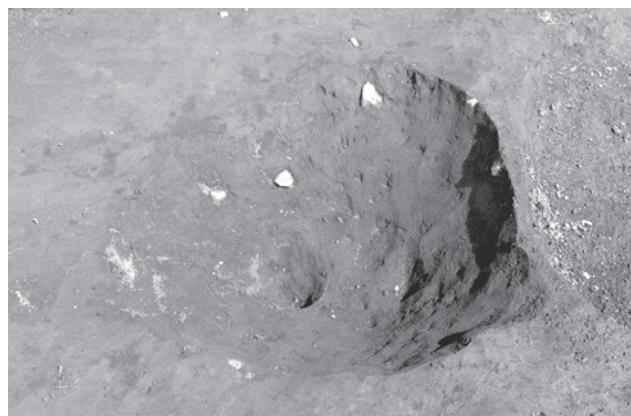
1号集石土坑検出段階（北から）



1号集石土坑検出段階上面観（上が北）



1号集石土坑第1回礫取り上げ後（上が東）



1号集石土坑完掘状況（西から）



2号集石土坑検出段階（南東から）



2号集石土坑検出段階上面観（上が北）

写真図版 5 2号集石土坑・7号土坑



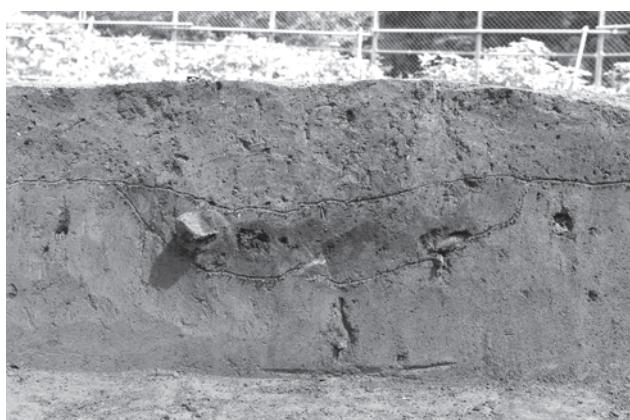
2号集石土坑第1回礫取り上げ後（北西から）



2号集石土坑完掘状況（北西から）



2号集石土坑第1回礫取り上げ後（上が北）



2号集石土坑断面（図18c-c'断面）



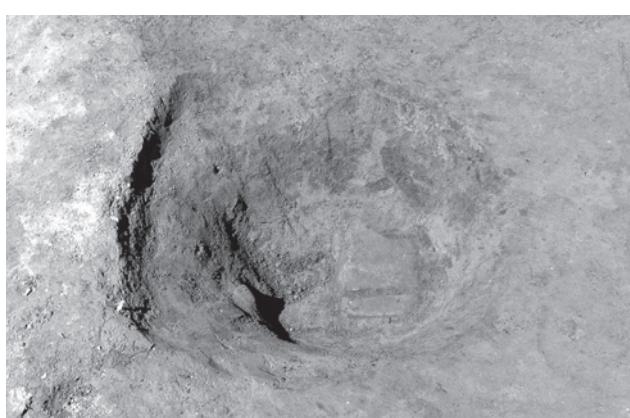
7号土坑検出段階（東から）



7号土坑断面（図14c-c'断面）



7号土坑内礫検出状況（東から）



7号土坑完掘状況（東から）

写真図版6 環状集石・集石土坑の石材



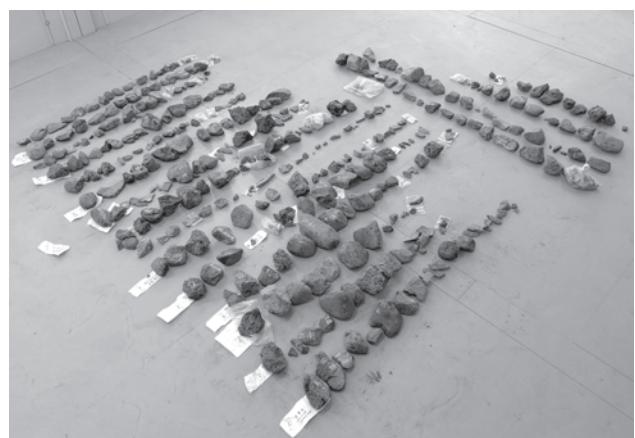
石材調査地点



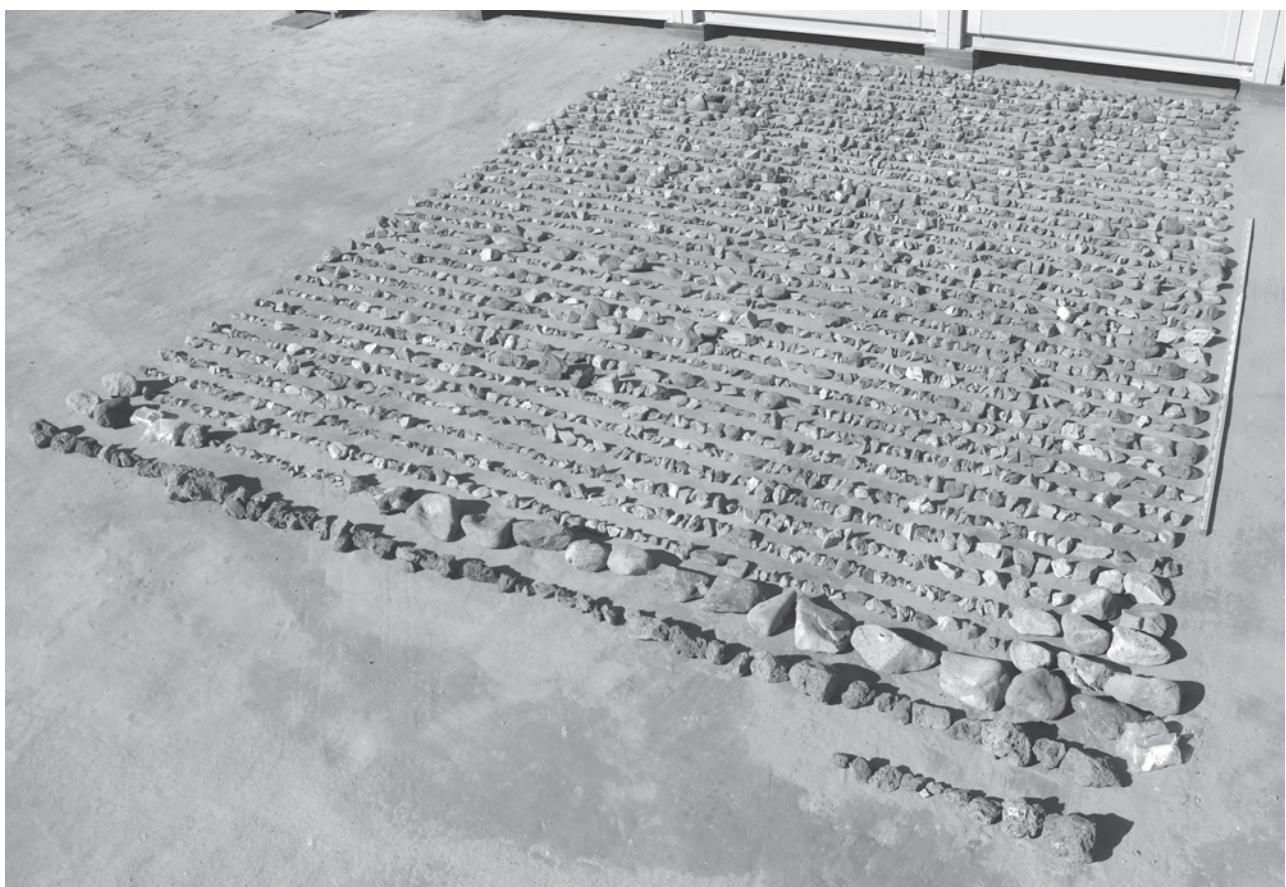
石材調査地点の玄武岩質溶岩体



1号集石内出土の礫



2号集石内出土の礫 (溶岩をふくめず)



環状集石を構成する礫

写真図版7 土坑（1）



1～6号土坑（北西から）



8号土坑（東から）



9号土坑（西から）



10号土坑（北から）



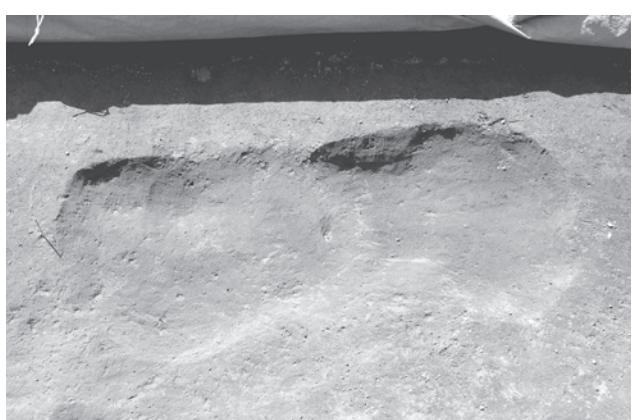
11号土坑（西から）



12号土坑（東から）



13号土坑（北西から）

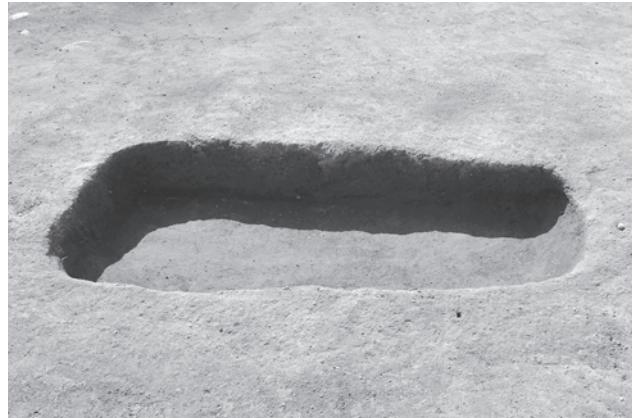


14号土坑（東から）

写真図版8 土坑（2）



15号土坑（北から）



16号土坑（東から）



17号土坑（北から）



18号土坑（北西から）



19号土坑（北から）



20号土坑（北から）



21～23号土坑（北から）

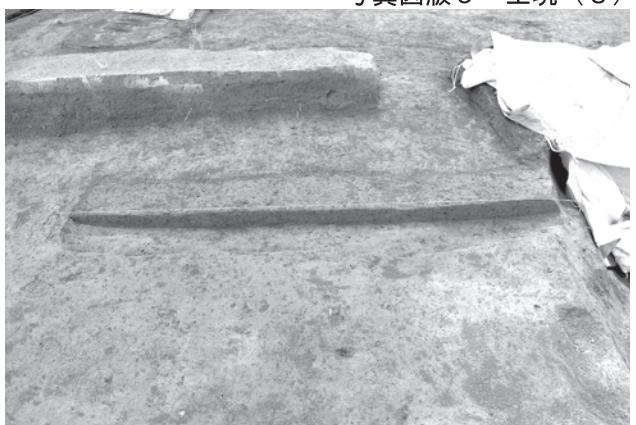


24号土坑（円形）（南から）

写真図版9 土坑（3）



1号溝跡（南東から）



25号土坑（西から）



26号土坑（手前）（南西から）



27号土坑（東から）



28・29号土坑（左28号・右29号）（北から）



30号土坑（北から）



31号土坑（東から）



32号土坑（北西から）

写真図版 10 土坑 (4)



33号土坑（東から）



34号土坑（北西から）



35号土坑（北西から）



40号土坑（南西から）



諸磯式期の遺物分布（1）



諸磯式期の遺物分布（2）

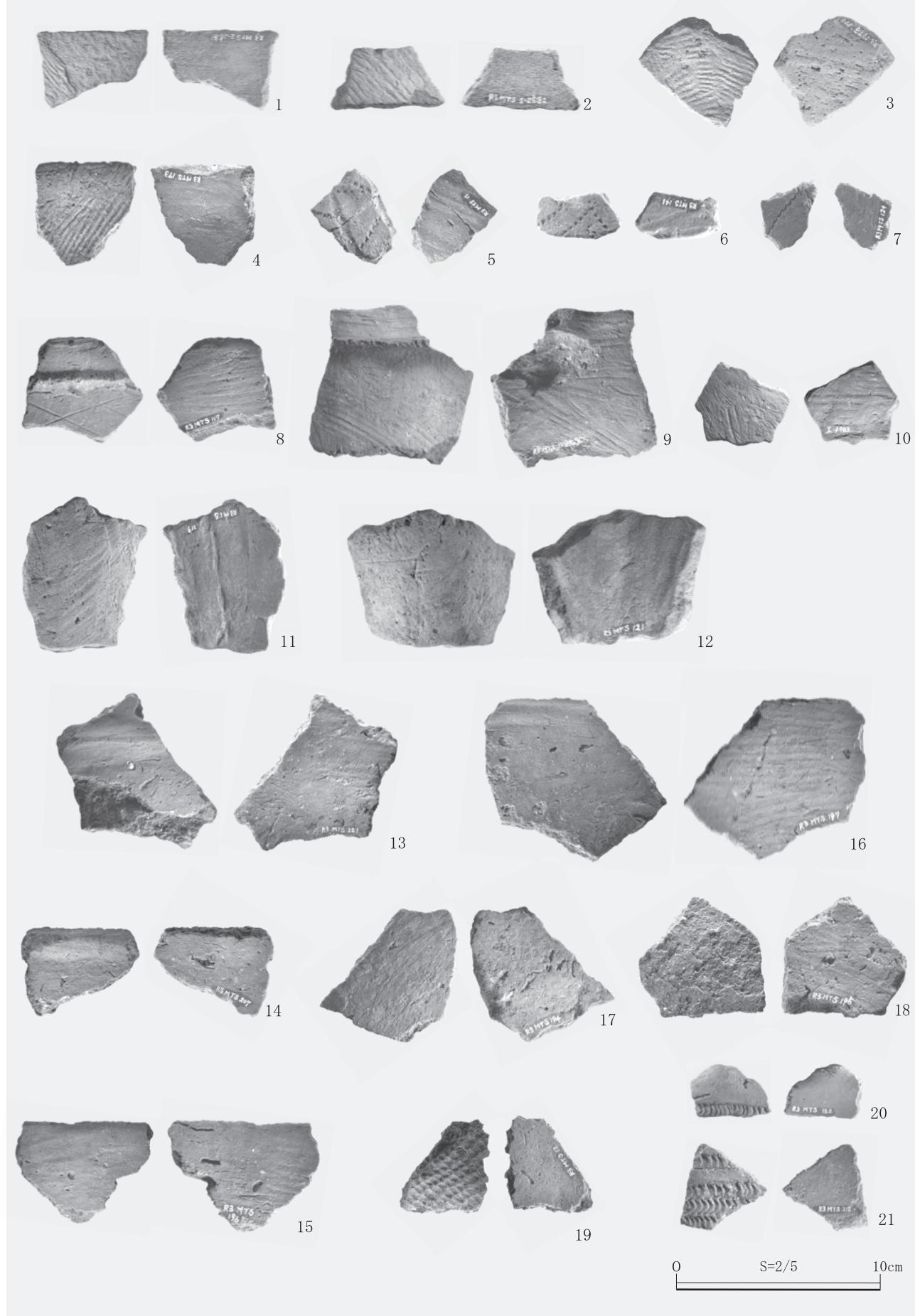


基本層序と7号土坑（1）（北から）

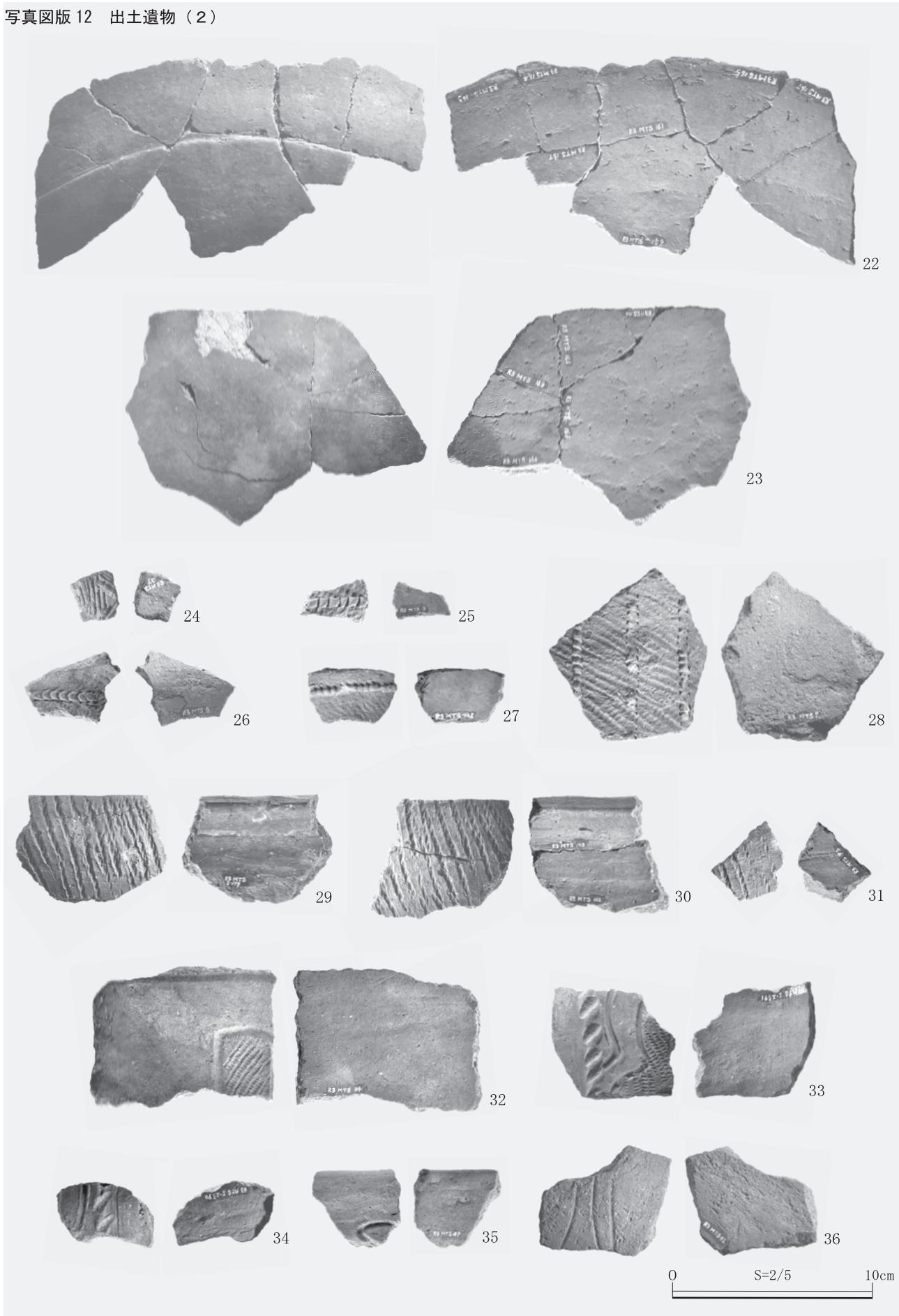


基本層序と7号土坑（2）（南東から）

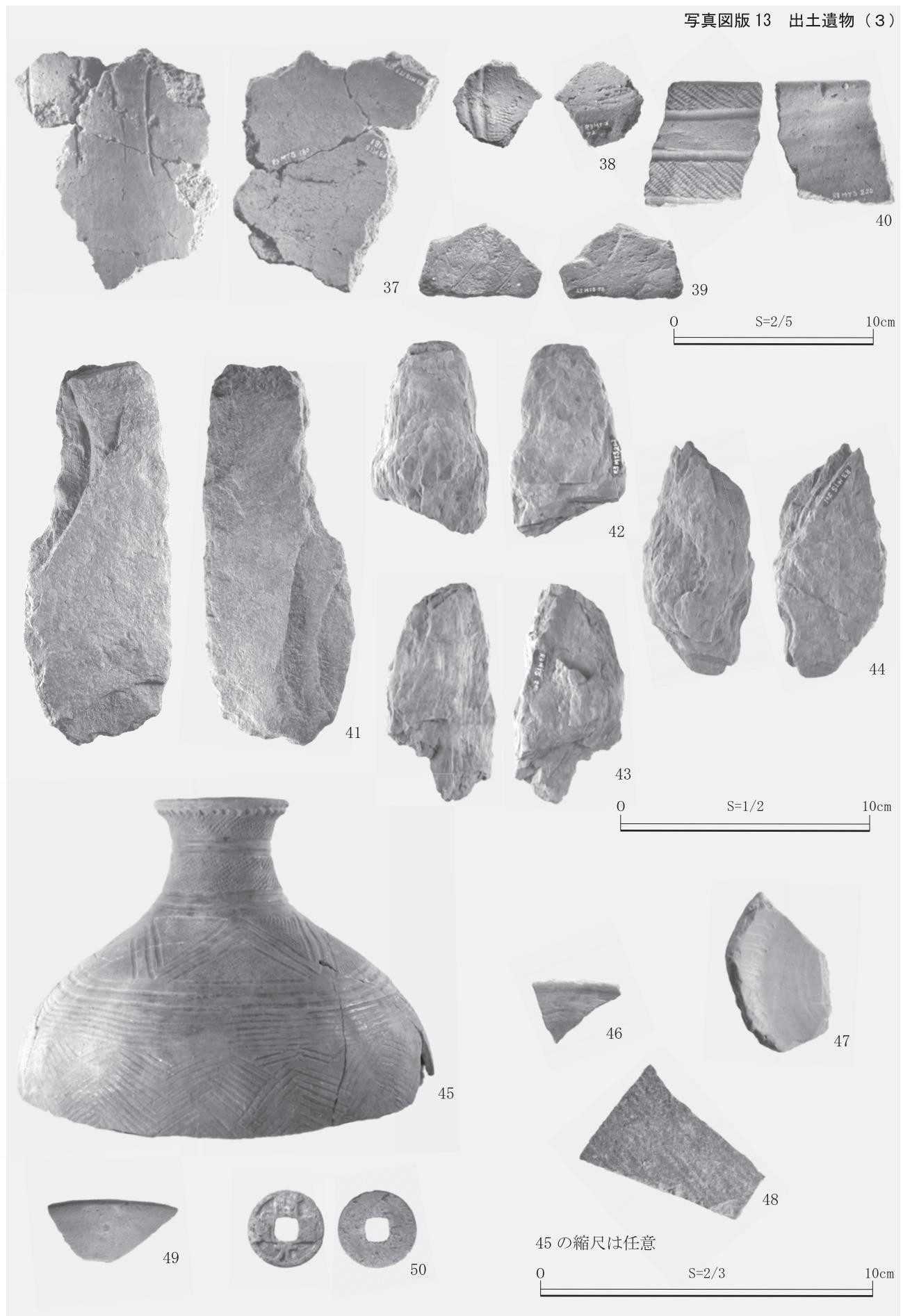
写真図版 11 出土遺物 (1)



写真図版 12 出土遺物（2）



写真図版 13 出土遺物（3）



報告書抄録

ふりがな	みとおしいせき (2021ねんどちょうさちてん)							
書名	美通遺跡 (2021年度調査地点)							
副書名	一級河川朝日川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第338集							
編著者名	久保田 健太郎							
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター							
所在地	〒400-1508 山梨県甲府市下曾根町923 TEL 055-266-3016							
発行機関	山梨県							
発行日	2023年3月17日							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
みとおしいせき 美通遺跡	山梨県都留市井倉地内	19204	都留31	35° 34' 29"	138° 56' 01"	20210601 ～ 20210930	2,000 m ²	河川改修
	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
	集落跡	縄文時代 弥生時代 中世	集石土坑、環状 集石、円形土 坑、長形土坑、 溝跡		縄文土器、縄文時代の石 器、弥生土器		(縄文時代土器の各 時期は、早期後葉か ら前期初頭、前期前 葉、前期後葉、前期 末、中期後葉、後 期)	

要約	美通遺跡は都留市井倉地内に所在する遺跡である。これまでの調査で、縄文時代から中世に至るまでの多時期の遺構や遺物が発見してきた。一級河川朝日川河川改修工事の対象範囲内では、2014年に都留市教育委員会が実施した試掘調査で遺物や遺構が発見され、2021年に本調査を実施することとなった。 調査の結果、縄文時代早期後葉の所産と考えられる直径約7mの規模の環状集石1箇所や、集石土坑2基、弥生時代前期の壺形土器が出土した土坑1基、中世の所産と考えられる長形の土坑10基などが発見された。遺構外からは縄文時代早期後半の条痕文系土器や前期初頭の下吉井式土器、前期後葉諸磯b式土器、中期後葉曾利式土器、後期初頭称名寺式期、後期前葉堀之内式期と想定される土器などが発見された。弥生土器は、土坑内から出土した1個体以外、当調査区からは発見されていない。近世以降の耕作土から平安時代や中世、近世の遺物が出土しているが、当調査区内の時期不明遺構の形成期に関係するものが含まれている可能性がある。
----	--

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第338集

美通遺跡

一級河川朝日川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2023年3月13日 印刷

2023年3月17日 発行

編集 山梨県埋蔵文化財センター
山梨県甲府市下曾根町923
TEL 055-266-3016
maizou-bnk@pref.yamanashi.lg.jp

発行 山梨県
印刷 青柳印刷株式会社